

# 沖縄市の伝承をたずねて

## 怪異譚編





沖縄市文化財調査報告書第44集

沖縄市の伝承をたずねて

怪異譚編



## ごあいさつ

このたび、沖縄市文化財調査報告書第四十四集『沖縄市の伝承をたずねて　怪異譚編』を発刊するにあたり、一言ごあいさつ申し上げます。

沖縄市教育委員会では地域の民話伝承の保存・継承を図るため、昭和五十五年度より沖縄国際大学□承文芸研究会の御協力を仰ぎ、民話伝承調査を実施しました。調査で得た語りの録音資料は沖縄市立郷土博物館に収蔵し、その録音資料をもとに語りの文字起こしと日本語訳を付した文化財調査報告書の刊行を続けてまいりました。二〇〇〇年『沖縄市文化財調査報告書第一三集 むかしばなし（動物昔話）』の刊行に始まり、二〇〇五年『池原の伝承をたずねて』以降は『伝承をたずねて』シリーズとして刊行を重ね、本報告書にいたります。本書は平成三十年度七月刊行の広域伝説編Ⅲに引き続き沖縄市外の地域に関する伝承をとりあげていますが、テーマを「怪異」とし、あやかし、ばけもの、不思議なものごとについての語りを集録しました。本報告書をもって沖縄市民話伝承調査で得た資料のうち三千話余の語りを文字資料にすることがかない、民話調査報告書発刊の事業もひとくぎりとなります。これまで刊行した民話調査報告書に記載した語りが、単に貴重な記録であるということを超え、沖縄市民のみならず沖縄の伝承に興味を持つあらゆる人びとに受け継がれ、活用していくものであつてほしいと思います。

末尾となりましたが、調査にご協力いただきました地域の皆様ならびに関係者に対して、深く感謝申し上げます。

一〇一九（平成三十一）年三月

沖縄市教育委員会

教育長 比嘉 良憲

# 凡例

多くの話 多くの話者の語りをできるかぎり語られたかたちのまま文文化し、公刊することを目指して掲載話を選定した。よって、語りとしては断片的なもの、代表的な話題とほぼ同じ語りのものが複数みられる場合も、割愛せずに掲載している。

## 一 沖縄市の民話調査と構成

① 沖縄市の民話調査は昭和五五年「沖縄国際大学口承芸術調査団」(連藤庄治団長)によつて、沖縄市池原と登川で初めて行なわれた。その後、昭和六〇年から昭和六二年度は編集事務局が調査を行ない、その調査資料を基礎に、平成二年度に沖縄国際大学口承芸術調査団を結成し、また一度も調査を行なつてない地区を優先して予備調査を行ない、沖縄市全字の組織的調査(第一次本調査・第二次本調査・補足調査)をし、さらに平成三年度に数回の個別調査まで及んだ。

② 本報告書には、昭和五五年から平成三年にかけて行われた調査で聴取した話と、わらべ歌調査・文化財調査等で聴取された話のなかから、「広城伝説」のうち「怪異譚」を収録した。

## 二 本書掲載話の選定

① 民話調査で聴取した話について、沖縄国際大学文学部国文学科の学生七名が沖縄市の民話を研究し、翻字して卒業論文として提出した。

平成二年度 旧美里地区 上門博之、山城綾子、宣保勝  
平成三年度 旧コザ地区 香村夏子、照屋京子、石川小百合、大川清子

これらの翻字話に、編集事務局で追加翻字したものと加えたなかから、広城伝説のうち怪異譚に分類される語りを選定して本報告書に掲載した。

② 本報告書では、後世に資料として参照される可能性を鑑み、できるだけ

## 三 翻字話の整備

① 翻字にあたつては、テープに収録された話者の語りを尊重し、できるかぎり音声に忠実に文字化するよう努めた。

② 話者の語り口を失わないよう心がけ、話者の明らかな語り違いは補正し、言葉の脱落、難解語句、ストーリーが理解しにくい場合は( )で言葉を補うなど適宜整備した。

③ 段落の設定、及び句読点の扱いは可能な限り話者の語りに即するように心がけたが、区切りがつかない場合は、翻字者の判断で適宜句読点を打ち、話の展開にそつて段落を設定した。

④ 共通語の語りの中で部分的に方言の語りがある場合には、方言の語りのあとに「」で対訳をつけた。

⑤ 方言での語りについては、漢字表記が可能な語句については意味がわかりやすいようできるだけ漢字をあて、発音はひらがなでルビをつけた。

⑥ 日本語共通語での語りの場合、難解な漢字のみひらがなでルビをつけた。ただし、方言の語りに日本語や日本語的な発音が入り混じる場合は、日本語の影響を受けた発音も判別できるよう、方言の発音だけでなく日本語的な発音にもルビをつけたものがある。

⑦ 地名、人名などの固有名詞、一部の擬声語、擬態語、外来語などは、カタカナで表記した。

⑥ 語りの中の会話部分や文脈上、会話と判断される部分は改行して「」でくくり、地の文を続いている。

右記の条件に従って文章の整備をしたが、語りの雰囲気によつては、適宜条件を外れて表記した部分もある。

## 四 本文について

① 話題名は、調査時に付された題名を基本とし、話型の内容に応じて一部を変更した。

② 話の始めに題名・話者名・生年、所属していた行政区を示した。

③ 対訳・共通語翻字において、方言をそのまま用いたほうが良いと判断した場合は方言を用い( )内に訳を入れるか、注記にした。

④ 差別的である。また偏見を助長する不適切な表現であるとの懸念により、現在では一般的に使用を控えられている語について、そのような語を話者が発話している場合があるが、歴史的資料としての性質を重視し、発話の個人、団体、またその属性を侮蔑したり、差別や偏見を肯定するものではない。

## 五 注記について

① 人名、地名、民俗語彙について、本文の理解を補助となるものについて

できるだけ注記を付した。

② 難解語句、意味のとりにくい部分については注記で補足的な説明を付した。

③ 前述の「四 本文について」④に記載した差別的な語について、注記にてその語について解説を付し、差別語である旨の説明を行なつてある場合がある。

## 六 本文掲載話の順序

① 掲載話の順序は、話型の分類にしたがつて「化け物、悪霊」「祟り」「幽霊、鬼魂」「予兆」「厄除け、魔除け」の順に並べた。

② 同一の事物、同一のテーマとなる話型群のなかでは、できるかぎり、方言で語られているもの、語りの良いものが先行するように並べた。

③ 同一の事物、同一のテーマとなる話型群のうち、一つの語りに複数のモノチーフを含む話は、話型群の冒頭にくるように配置した。

④ 内容も語りの質も同等な語りについては、話者の所属する行政区によつて、おむね北よりの集落の話者の語りが先に来るよう並べた。

## 七 イラスト

① 表紙のイラストは八田夕香氏に描いていただいた。

② 本文中のイラストは長沢益美氏、八田夕香氏に描いていただいた。

調査にあたり、各自治会長、各老人会長の方々に調査への便宜を図つていただきました。記して感謝の意を表します。

## 目 次

一 化け物、悪靈	7	ごあいさつ	3
〔1〕きじむなー	7	凡 例	4
〔2〕動物の化け物	14	目 次	6
〔3〕道具の化け物	17	予 火	4
〔4〕悪靈のわざわい	18	ごあいさつ	3
二 崇り	23	凡 例	4
三 幽靈、靈魂	30	目 次	6
〔1〕幽靈の言い伝え	30	予 火	4
〔2〕幽靈を見た話	39	ごあいさつ	3
四 予 兆	52	〔3〕音であらわれる幽靈	45
五 厄除け、魔除け	61	〔4〕遺念火	47
掲載話一覧	73	〔1〕くしやみしたときの厄除け	61
調査日誌と調査協力者	77	〔2〕サン結び	64
沖縄市民話調査報告書発刊業務の総括	84	〔3〕ひとさし指の魔除け	61
本報告書の編集協力者および作業担当者	87	〔4〕豚小屋、便所の魔除け	70
参考文献および参考資料	87	〔5〕魔除けのまじないことば	72

# 一 化け物、悪靈

## 【1】きじむなー

① きじむなーについて

伊礼秀（大正十年生）越來

「夜は口笛したるきじむなーが来るからね、夜は口笛しないよ」って、よく言われた。

きじむなーというのはね、見たことはないけど、きじむなーと親から話されれば、やっぱり怖かったわけ。見たこともないけど。

で、たまにね、この葉っぱの裏なんかにね、きじむなーの睡いうてね。ほんとに人間が睡を吐いたみたいなね、あれをこういう葉っぱの裏なんかに、こひついてね、みかんの裏、葉っぱの裏なんかについて、ちっちゃい蟻みたいなね、黒い星があつたんだよ。それがね、「はー、夜ーきじむなーがこつち睡を吐いたんだ」と。

たまにはね、こう、皮膚なんかね、大きな、赤くしてね、傷が入る場合があつたんですよ。これにはね、「きじむなーやーちゅー」と言いつたんだよ。やいとされたという。なんもしなくとも、きじむなー

やーちゅーされたというのはね。

たまにはね、大きな人がね、ほんとに入つてくるのがわかるよ。『こいつ、またきよるなー』言つて。

それからもう、自分、こうなるわけ。『おまえなんかに負けるもんか』といつて、わたしたちのおうちは戦いよつたな。『影みたいなね、大きくな』。

一回はまた、今度、軍作業行つてるときにね、かまぼこ型のね、屋根があつたんだよ。このひとコン

セットにね、アメリカ人がね、六人づつ入つておつたんだよ。で、彼ら、お昼休憩のときには、みんなかにみんなこう、お弁当食べるいうてね、六人の方たちが、みんなお弁当食べて、みんなかに座つてた。仕事が少ない人はちょっとぐわー昼休みしよつたんだよ。で、そのときにね、私はきじむなー見たわけ。

恵兵を指す。

ほんとにあのこけし人形みたいね、ほんとのおかっぱの、もうほんとにこの、もう、この、十五センチくらいの、このくらいの。で、わたしがこう寝たら、枕元のこつちにね、二人立つてゐる。そんでね、これはほんとのこけし人形みたなかたち。で、私がね、『あんたちはこつちに来たら、エムビーが来たらね、つかまえられるよ、こつちから行きなさい、行きなさい』言つてね、そういうときに金縛りやられたわけさーねー。ほんとに、ほんとに私は見たんだから、きじむなーは。

※1 きじむなー 沖縄諸島に伝承される妖怪。赤い顔や髪をした童子のよろんな姿で、古い大樹に住むといわれる。

※2 軍作業 米軍雇用労働のこと。沖縄戦中、米軍に収容された住民に与えられた簡単な労務に始まり、戦後の基地建設の拡大では大量の軍作業員が雇用された。

※3 コンセット 米軍が用いたがまぼこ聖兵舎。Military Policeの略称。米軍内の軍律や治安の維持にあたる組織、またはそこに所属する

※4 エムビー Military Policeの略称。米軍内の軍律や治安の維持にあたる組織、またはそこに所属する

金良君江（大正七年生）安慶田

三つぐらいの赤がんたーぐわー「三歳の子どもほどの赤髪のおかっぱのやつ」じゃないかな。三つ、四つぐらいの赤がんたー。

見たんじやない。ありどうやる、きつさうちうすららーやー、あびらんどうないむんぬ「あれなんだよ、急に覆いかぶさられて、叫びもできなくなっているに」。

三つぐらいの赤がんたーぐわーがよー。あれしてからに。ありんでいちよー、「あい、『聞き取りできず』かけよったなー」んち見るえーかねー、きつさうちうすらつて、もうあびらんでーむんぬ「きじむなーだと思って『おや、『聞き取りできず』かけたなー』と見るうちに、急におさえつけられて、もう叫びもできないのに」。

あれがいちばん多いことはね、古木。木の根つこ。木の精。それにまた、おうちの、古いおうち。ひとつのあれだが、昔の木ぬ精、家ぬ精。家うつい、昔は木造作りやしえーやー「昔の木の精、家の精。家で、木造作りだからね」。それが年間が経つたやー、そんなどこにあると聞いてる。わからんけど。こつちはもう、にいでうすらりたかわからんけどよ。あぎじやびよー、絶対、動かれないと。自分の経験だから話するんであつて。

玉城シズ（明治三十八年生）久保田

川に水汲みに行つたから。小さいときだつたから。十歳ぐらいじゃなかつたかな。これ見て、

「あり、あまに、あぬ〔ほら、あつちに、あの〕」、昔、あり「あれを」方言で「じえーま」言つたんですよ。きじむなーに。しょーま言つたんですよ。方言では、

「あり、あまにしょーまぐわーが寝んとーんどー、あれー木に寝んとーんどー」「ほら、あつちに『しょーま』が寝ていてるよ、あいつは木で寝ていてるんだよ」つてから、すぐ水汲みに行つてから、おばさんたちとそこ、走つてきて、水もなにももう取つてこないで、すぐ、泣いておうちに帰つたことがある。これだけ覚えてる。

きじむなー言うたらね、昔のおばあさんたちがや、かんたーぐわー、あかぶたーぐわーのかんたーぐわー〔さんばら髪、赤いざんばら髪〕の話があつたけどね、これ見たことがないからわかりません。

方言でよく、おばあさんたちが、

「ゆうべうさーさつてい、息んならん〔昨晩おさえつけられて、息もできない〕」

これ、きじむなーにあれする人はね、誰だれにはあれしないって。これが昔の言葉に「さー〔靈力〕」言うてね。この人と合う、今の言葉に、合ういう言葉、あれかしらん、これわからんけど。「誰だれに

※1 しょーま 話者は本部町渡久地の出身。沖縄島北部の本部町や今帰仁村にはきじむなーとぼ同じ持徴をもつ妖怪を「せーま」「しょーま」と呼ぶ地域がある。

※2 さー 人間の精氣 精的活動力を指す語。

は見一らん〔誰だれには見ることができない〕」つて話があつた、これ。見えない人には見えないといふ話があつたけど。でもはつきりわかりません。

#### ④ きじむなーについて

知名タケ（明治四十一年生）越來

きじむなーは、あの、なにか、古い木にいますさーねー。ずっと何年もなる木に。だから、あれからどうかしたらまた、人に邪魔してさ、人おさえて、こんなして絶対起ききれないさーねー。声も出ない。こんなしたときもあるよ。いつたんは当たつたことがある。ちょうど一回は。

#### ⑤ きじむなーにおさえつけられる

金城安栄（大正二年生）知花

方言原話  
きじむなー思一り一ひがよ。えーえーえーんつしょ、うんぐどうーそーてい。絶対動からん。あー、ちゅー動からんどー。むのー思一りーんどー、また。きじむなーんかいうさーりーんでいしぇー。

#### 〈共通語訳〉

ものは考えられるけどね。ええ、ええ、ええ、と、そんなふうにうめいて。絶対動けない。ああ、ひとゆるぎも動けないよ。ものを考えることはできるん

だよ、また。きじむなーにおさえつけられるというの。

#### ⑥ きじむなーにおさえつけられる

川上亜（明治二十九年生）美里

方言原話  
きじむなーんでいしや、見ちんーらん、うんでいちゃんわからん、詰びかー出じらすがや。ちゃんがなーつし、一回やあさぎぐわーなかい寝とーしが、心ーなー起きてい、ちゃんがなー動れーやーんでい思ていんむる動からん。うさーつてい、いちまろーそーる心ぬ、うれー半分ー寝てい、半分ー起きとーるしー、頭ー。うぬふーじーやあたたるくとーあん。なー起きれーやーんでい思て、わんねー考一とーひが、頭ん半分ーあつい、じゅんに起きとーねーんしが、半分ーなー夢ん心か、なーうへーましやるあてーしがや。むる起きゆーはんばーぬあてーしが、うれーうぬふーじーるやがやー、きじむなーぬうさーりーる。かんしさるばーぬあん。

#### 〈共通語訳〉

きじむなーというのは、見てみたことはない、実在するかもわからない、話だけるんだけどね。どうこうあつて、一回離れて寝ていたけど、気持ちは起きて、なんだか動こうと思うつてもまるで動けない

い。おさえつけられて、夢うつつの気持ちで、これは

は半分は寝ていて、半分は起きているから、頭が。  
そんなふうなことに遭遇したことはある。もう起き

ようと思つて、私は考へてゐるんだけど、頭も半分  
はあつて、まつたく起きているふうなんだけど、半  
分は夢うつつか、もうちょっと良い状態だつたけど  
ね。まるで起きられないときがあつたけど、これは  
そういうふうなことなかなあ、きじむなーにおさえ  
つけられる(というの)。こういうことをされた  
ことがあつた。

⑦ きじむなーにおさえつけられる

名護ヤエ子(大正八年生) 吉原

昔はね、蚊帳ひいて寝てるでしよう。蚊はぶーし  
て、響くんですよね。うおーって響いてからに、蚊  
帳は開けてね『あい、誰か来るねえ』思つてしまつ  
もうおさえつけられているんですよ。それ、五秒、  
六秒ぐらいだね。入つてくるのわかるんですよ。  
入つてきたらすぐおさえつけられるんだから。五秒くら  
いだね、もう、強くおさえつけられて、「これ、な  
にかねえ」思うたらね、この家の、家に柱なんかあ  
るでしよう。この柱を枕にして寝たらね、この柱が  
古い木であつて、精がついた。木ぬ精。『ああ、こ  
れだねえ』いうて思つてゐんですよ。

⑧ きじむなーにおさえつけられる

屋良朝良(大正二年生) 城前

一番はじめね、昔は子どものときは天井ぐわーゆ  
うて、下は牛が休んで、その上のほうに棚かいて「棚  
をかけて」、そこに休みよつたですよ。まあ、十三  
ぐらいのときさ。寝ているときに、もう、うーうー  
うーうーしてくるさーねー。うーうーしてきたもんだ  
から、こうして、そのときにもう、起きようとして  
も全然起きることができない。動くこともできな  
い。わかつてはいるんだけれど。この指ぐらいの程  
度のものが、顔も赤一して、髪の毛ももう、なんと  
いうか、現代のアメリカの、なんというかな、ぎん  
ばつとか。ああいうふうな顔して、この指ぐらいの  
ものが目の前までくるけどね、起きようとしても全  
然起きられん。そしてもう、息苦しいですよ、んー  
んーして。そして、いよいよこれが覚めてしまつた  
ら、『ああ、これ、きじむなーだったな』と、こう  
考へるわけですよ。

⑨ きじむなーにおさえつけられる

瑞慶賀好子(大正十年生) 城前

寝ていたらよ、入つてくるのわかるのに。きじむ  
なーが入つてくるの。すぐ、まつ黒くしてから、こ  
う、入つてくるの。上からうすやーなかて、いー  
いーいーっすし、わかんよーやー「上から覆いか

ぶさって、うんうんうなる人がいて、わかるんだよね。

「助けて、助けて」するけど、もう、そばにいる人がわからないわけ。（話者自身も）きじむなーなんかうさーつい。いーいーいーつし「きじむなーにおさえられて。うんうんうなつて」とつても苦しい。

（どうするかというと）なんとかする。いなくなれる。夢見たよーな心地。きじむなーんかいうさーりーん「きじむなーにおさえられる」だからこの、姿は見たことないよ。ただ、黒くして入ってくるのわかる。

⑩ きじむなーにおさえつけられる

川上龍（明治二十九年生）美里

きじむなーはね、大きい昔の木が生えているところ、よくそこにいる。大きい木、昔の木のある、そのへんにいるがね。見たことないが、そのへんに家があるって、そこに眠つたらね、泊まつたらね、あれするときにはね、大きいつの木が生えているところ、「おさえつけられる」ことがある。

少し寝て、半分、寝んじ（半分寝て）、起きてもない、寝てもない、ずっと起きよとはするが急にいーして。

は起きられない、そんなときには。いーいーして、苦しんではいるが、自分の思うように起きることができない。そうしたら、ある時間（約一、二分過ぎたならちゃんと起きてね、「あー、私んねーやきじむなーにうさーつてーさやー」んち「ああ、私は、きじむなーにおさえつけられたよ」と）。もう、昔、これは。今はい。

⑪ きじむなーにおさえつけられる

内間シモ（明治四十四年生）城前

起きていよ、私つたーコウユウよー、はっさー、目ぐるぐるーして、すぐなー「起きてね、うちのコウユウがね、ああもう、目をきよろきよろして、すぐもう」、もう叩いてもきかないわけさ。これ、連れていくつて。あつちにね、女がね、櫛よ、いつてからや、うぬ櫛取いんじからよ、またきじむなーそていくんでいよー「いってからね、その櫛を取つていつてからね、またきじむなーを連れてくるつてね」。

櫛よー、櫛。うりる習ーすたしえー。うり取りが必じ来ーんてい。家なかい「それを教わつたんだから。櫛を取りに必ず来るつて。家に」。家に取りに来てからよ。もう、連れいくつてよ。

⑫ きじむなーと魚の目玉

島袋次郎（明治三十四年生）知花

方言原話

きじむなー やうーん なーん でいが、あり、かじ  
ねーほーしが いちむのーあり ゃんどー。ぬーい ちや  
いがん でいねーよー、与那原田 でい出じ、くむい  
干らしーにや、魚ぬ 背中 なか、かんひ 指ぐわーみ  
じゅかたい 入つ ちよーしや、くぬ 左ぬ 目んだりー  
ねーらん。うりが ちん抜じ うちゆ 嘘でい。でーじ  
どー。あれーかじねーどう ほーしが よー、いちむん  
やんどー。本當ぬ いちむんあらん、かんし、魚ぬ  
背中 かんけー 指ぬ 形入れ らんく どうでー。ゆーうりあ  
てーく とうてー。与那原田 ぶつくわー、あり、魚ま  
んどー へー やー。うり死 じよーしが ちやー やでい  
んよー、かん取 い見じねー 左ぬ 目んだりー ねーら  
んあいねー や、背中 かんひ 指ぐわーみじ 形入つ  
ちよーん。ひるましー むんどー、あれー。けものん  
でいしぇー。

〈共通語訳〉

きじむなーはいるのかというが、あれ、悪靈だと  
いうけど生き物なんだよ。なにで遭遇したかといっ  
たらね、与那原田というところに行つて、池を干し  
がらせたときには、魚の背中のまんなかに、こうし  
て指のあとが三つ入つていて、この左の目玉

がない。きじむなーが抜きとつて喰つてしまつて。  
たいへんだよ。あれは惡靈だといふけどね、生き物  
なんだよ。本当の生き物ではない。（普通の生き物  
は）こうして、魚の背中に指の形を入れないから

ね。よくこれがあつたからね。与那原田んば、あそ  
こは、魚がいっぱいいたからね。これが死んでいる  
のもうであつてもね、こう取つて見たら左の目玉  
はないものがあつてね、背中にはこうして指の三つ  
形が入つていて。めずらしいことだよ、あれは。け  
もの（きじむなー）というのは。

⑬ きじむなーと魚の目玉

宮城次郎（大正三年生）國田

魚は、左の目取つて食べて。魚の目。片はら、目  
があるもの、あれが食つていて。この話があつたよ。

⑭ きじむなーと魚の目玉

真喜志康一（大正元年生）國田

（きじむなーは）人間の屁を出すのをとても嫌が  
るような話もあつたけど。

漁した魚、一つは目玉はきじむなーが食つたとい  
うふうに、昔の伝え話だがね。

※1 かじ 悪い霊氣、惡霊。外出

時に目には見えない悪い霊氣やさま  
よう霊と出会うと、ふいな発熱やで  
きものなどの病気につながるとい

れる。ヤナカジともい。キロメートルほどにあつた水田地

帯。与那原川沿いの低湿地で、現在  
はほぼ全域が米軍用地。



(15) きじむな一火

平龟(明治二十八年生) 美里

動かない。で、翌日からは『さる』といつて書いて、枕元において寝た覚えだがね。

それ(きじむなーの火の玉)が歩くのを見たよ。火をつけたから、夜が暮れたら、火をつけて、墓ぬまんぐらから(墓のあたりを)。あれ、どこの前

でも出ましたよ。

寂しいところから、あれは火をつけて歩(あゆ)ちどうや

るさー(歩くんだよね)。字(集落内)にはいないよ。

海ぬたきー(海のなか)。そうさ、あれー(きじむなー

の火の玉は)。海、海にが行つて、魚ー(魚を)取つて。

(16) きじむなー除け

富山茂(明治三十八年生) 美里

あれは、今から考えたらね、血液の循環異常だと思つんだがね。寝ておつてね、息苦しくなるとか、なにか、手足も動かんとかね、これ血液循環のだがね、これ、きじむなーにうすらつとーん(「きじむなーに覆いかぶさられている)。

このきじむなー除けるにはね、『さる』という字

を書いたらきじむなーは来ないそうだ。これも字の音からきた、「さる」というのは、行くと言う意味でしよう。「きじむなーは行つて来ないそうだ」というような、字の意味からかしらんがね。私なんか、それ、経験したことある。夜、寝ておつてね、なにかおさえつけられるような、手、動かさうとしても

※1 南洋 南洋諸島を指す。

一九〇〇年から一九四五五年まで大日本帝国の委任統治領で、日本から多くの移民が移住した。

※2 大和 沖縄から見て日本本土を指す語。

島袋次郎(明治三十四年生) 知花

〈方言原話〉

南洋ややー、大和、日本中ぬ人集まつとーんでいるむんぬ。

試作農場うでいよ、くぬ、与論ぬ人ぬでー、んじ、船流りさーに、鹿児島んじていつちよ、三人、夜ー

きじむなーなかいうさーでいてーなー。あまんじ、浜なかい寝んとーいで。あんしなー、うすましーむ

んぬやでいや、はー、あまぬ(けんむん)ぬうふ

さーんでい言たん。与論ぬ人ぬ話ふたんよー、あれー。ひるまはんどー。だー、あれー、試作農場や、

四百名あまい人夫ぬうくどうや。あんさーに、うつたー話すたんよー。

(17) けんむんの話

島袋次郎(明治三十四年生) 知花

※3 試作農場 南洋興発株式会社が經營していた農場の一つを指す。

※4 与論 冲縄島の北北東二十五キロメートルほどの位置にある島。鹿

※5 けんむん 奄美的妖怪。赤い髪や赤ら顔の童子形。木に住み着く、魚や蛸を好むなど、沖縄のきじむなーと似る。

〈共通語訳〉

南洋はね、日本本土、日本中の人が集まつていた

というのに。

試作農場でね、この、与論の人人がだよ、ほら、漂流して、鹿児島に行つてね、三人。夜はきじむなーに押さえつけられたつて。あつちで、浜に寝ていて。あれだけの、すさまじいものだつてね、はあ、あつ

ちの『けんむん』はいっぱいだと言つてた。与論の人が話をしていたんだよ、あれは。めずらしいよ。ほら、あれは、試作農場は四百名あまり労働者がいるからね。それで、この与論の人たちが話をしたんだよ。

### ⑯ ブラジルできじむなーに遭う

星宣盛助（大正元年生）嘉間良

私もきじむなーにはよくおそわついていたね（おさえつけられていたね）。ブラジルでも毎日。あれは、私はちつとも恐ろしくなかつたよ。あれはあの、神経といううにがあつたからね。

## 〔2〕 動物の化け物

### ① 豚のまじむん

仲宗根盛雄（明治四十三年生）登川

〈方言原語〉

また西川門のおばーたー話や、あぬ中道えー昔えー豚ぐわーまじむんでいうたんで、やー、

うんな話聞ち。あんざーい、

でーい、今日や遊ばがんに、豚ぐわー蹴り転ばちくやーんんでい言ち、あんし言ちゆたしが、

「じゅんに出じーたんどー」んでいしがふーじぬ、寝じーがすたらや、わー嘘んでい思一つさー。

### 〈共通語訳〉

また西川門のおばあさんたちの話では、あの中道は昔は豚の化け物と言うのがいたつて、ね、そんな話を聞いて。それで、「さあ、今日は遊びで、豚を蹴り転ばしてこよう」と言つて、そう言つてたけど、

「本当に出たんだよ」と言つてたようだけど、寝てでもいたんじゃない、私は嘘だと思うよ。

### ② 豚のまじむん

高江洲節（明治三十五年生）松本

〈方言原話〉

豚ぐわーまじむん立ちゆんんどー言ちやくどう、かちみたくどう、うれーくんじ、たばたくどう、薪であつたそだ。

### ③ 一日橋の豚まじむん

佐原本トヨ（明治三十九年生）泡瀬

〈共通語訳〉

豚の化け物が出ると言うので、つかまえたら、そいつを捕つて、束ねたら、薪であつたそだ。



登川集落の中道

※1 ブラジル 話者は戦前にブラジルに農業移民した経験がある。

※2 西川門 登川集落の屋号の一つ。

※3 中道 登川集落の中心となる道で、分村碑から北に向か神アシヤギを經由して池原集落まで伸びる道。

※4 まじむん 化け物、妖怪、魔物などのたぐい。なかがが化けたもの、得体の知れないものなど、通常では考えられない不思議な存在を蔑称して「まじむん」といい、多くは人畜に害をなすものとして恐れられる。

乗つてあそこ通らなかつたつて、怖いからといつて。『一曰橋はね、幽靈どころだつて。

あの、馬車持ち、車持ちやーよ。(お客様がきて) ドアも開けて、入つて。乗して、入つて、くままでいいし、うすとーいしが、みじらしー、人ぬちゃんはすわつていたけど、不思議なこと、人がいなくなつ

ていて、開けてみたら豚だつたつて』。一人、ひとりの人はまたあふいらーぐわーやたんいで「もう一人はあひるだつたつて」。それに化けているばーてー化けているわけだよ。

それ、芝居<sup>しばゐ</sup>、それ芝居<sup>しばゐ</sup>がね、あの、増やしたかもしらんよ。本当か実かわからん。

#### ④ あひるのまじむん

久場政三(明治四十三年生) 國田

〈方言原話〉

鶏うとうるーやんでいよ。鶏ぬあびーしょー、一番鶏<sup>ばんけい</sup>、三時まんぐら。いちやいねーよー、うまかいうるまじむのーちやーりてーはいんでい。ひるまさつさー、うりびかー、考ーらん。

あひらーまじむんの話。鳥尻<sup>とりしり</sup>まあ玉城<sup>たまこじ</sup>だつたやろうなあ。たた新家立<sup>しんかたち</sup>やー、私がーのーなー、ぬーんうーらんしえーやー、新家立<sup>しんかたち</sup>やーくどう。

立つちぢやーきどうやくどう。

夫婦うしが遊びーが行ぢやーなかい、うれー。うぬ男遊びーが行ぢやーくどう戻やーや、うぬ、あふい

らーぐわーかちみていちょーるばーてー。かちみでいつち、今取らんでいすしが、うぬじーうどーてーなーむる捕らん。あま見くま見ざくどう、岩ぬみーんかい登どーし、

「うね、くまにいるうつさい」んでい言やーなかいどうつかちみて、足どうつかちみて。あんさーい、うりくんち家んどうー持つ来つちしえーしが。

うぬ

明日

一曉

ー、女ぬんかい、

「うまなかいあひらー捕ていち置ちえーぐどう、うれーくだみんなよー」でいち。あんさーい男ーけー寝んていそーしーが。女ー起きてい芋煮<sup>いもご</sup>がんち行

ちーねー、うぬ芋煮<sup>いもご</sup>、な、夜しら明きーさくどう、

「あふいらーくんち置ちえーんでいしがまーなかい置ちえーがやーんち家ぬまんまーる巡たんてーかにうらん。後一夜ぬしら明きて、

「ぬー、いやーあふいらーくんち置ちえーんでいしがまーなかい置ちえーがーんちやくとう、

「うね、うまんかい、中柱<sup>なかじゆ</sup>なかいくんち置ちえーえーーーんち、起きていち見ぢやくとう、あーぬー足骨ぬくんち置かつとーるばー。うれーまーぬ、岩ぬ上から足ぐんちうりしえーるばーよー。

やつぱり、うぬ男ぬ意地ぬーらんむんやれー取

#### 表 1 一曰橋 国場川の支流、板敷

川に架かる橋。首里から南部への交通の要衝であった。

※2 馬車持ち、馬車運送業者のこと。馬車は荷馬車と客馬車がある

が、この語りでは後者。

※3 芝居<sup>しばゐ</sup>、沖縄芝居のこと。近代以降に発展した沖縄方言による演劇。那覇に複数の劇場や劇団があり、庶民の娛樂として興しました。

※4 島尻 沖縄島の南部、昔を指す。

※5 玉城 沖縄島南部東海岸にあった玉城村のこと。現在は南城市。



らりーがすたらわからんしが、意地ぬあやーい、うんくどう意地なーかい負きて、うぬあひらーや、なー溶きてはぢやるばーどうはじ。骨<sup>く</sup>残とーたんでい。小つさぬ骨<sup>く</sup>やるばー。二匹うりやたんでい、うまからー、前から歩ち。

あひらーまじむの一とにかくーうぬ股<sup>もも</sup>から越一しーねー命取らりーんでいちよ。ちやーいーまーいーし、あれー股<sup>もも</sup>からー越一するむーあらんでいぐとうや、うぬやなむのー。うり股<sup>もも</sup>はしから逃がちやいぬーさいしーねー、うぬ人ーなーだめ。昔人ぬ言葉るやる、うれ私つたーが作てーる言葉ーあらんどー。

### 共通語訳

(化け物は) 鶴が怖いそうだよ。鶴が鳴くと、一番週、三時ぐらい。化け物と出会つたとしたら、そこにいる化け物は消えていくそうだ。不思議だよ、それだけは、考えられない。

あひるの化け物の話。鳥戻、まあ玉城だつたろうなあ。普通の分家した人、私が思うにはもう、(家畜が)なにもいないんだよね、分家だから。分家したばかりなので。

夫婦で暮らしているが、夫が遊びに行つて帰りに、そのあひるを捕まえてきたわけだよ。捕まえてきたが、今捕まえたかと思つていたら、そうでもな

く、なかなか捕まえることができない。あつち見た

りこつち見たりしたら、岩の方に登つてるので、「あ、ここにいるじやないか」と言つて捕まえて、足を捕まえて、そして、これを括つて家に持つてておいていた。

その翌日明け方、妻に、

「ここにあひるを捕つてきて置いてあるので、それを踏むなよ」と言つて、そして夫はすぐ寝てしまつた。妻は起きて芋を焼きにと言つて行くと、芋を焚いている間に空が明るくなつてきたので、「あひるを括つて置いていると言つたけど、どこに置いてのかねえ」と家の周囲を回つてもいらない。そういううちに、空が明るくなつたので、

「ねえ、あなた、あひるを括つて置いていると言うけど、どこに置いているの」と聞くと、

「ほら、その中柱に括つて置いているよ」と、起きてきて見たから、足の骨が括られて置かれているわけさ。それはどこそここの岩の上から(みつけた)足骨を括つて持つてきているわけさ。

やつぱり、この夫の意地がなかつたら、(夫の命を)取られたかもしれないが、意地があつたから、このようふうに夫の意地に負けて、そのあひるは、もう消えてしまつたんだろうね。骨は残つていただつて、小さい骨であつたわけよ。二匹だつたつて、そこから、前を歩いていて。

表1 やなむのー 「やなむん」。  
説は「悪いもの」。妖怪、魔物、悪靈など、動物などに化けいでたり、目に見ることができないが、人間の心身や魂に害をなす超自然的存在全般を指す。

あひるの化け物はとにかく、股の間を通りぬけさせたら命を取られるといつてね。ずっと追いかけたれを股の間から通りぬけさせるものではないというからね、その魔物は。あひるの化け物を股のあたりを通ったのを逃がしたりしたら、その人はもうだめ。昔の人の言葉だよ、それは私たちが作つた言葉ではないよ。

### ⑤ 読谷の化け猫

平田ウト（明治三十一年生）松本  
島里ナベ（明治四十三年生）松本

〈方言原話〉  
以下、平田ウトさんの語り）

うりん芝居んち言ちえーたしがよー。読谷の祝女殿内ぬ猫やたんていしが、どうく長一飼らていよー、人ぬ見うちな化きーたんでい。化きーんでいーねーよー、人んかいなやーなかいよー、うまんかい通る。女んかい強姦つし、さんでいすたんいで。うれー芝居なかいしょーたんや。

（話者交代、以下は島里ナベさんの語り）

猫どうく長一飼れーねー、だつとうかやかなさし、あと一化きーるばーてー。あんくどう、猫長ー

〈共通語訳〉

（以下、平田ウトさんの語りの訳）

これも芝居で言つていたけどね。読谷の祝女殿内の猫だつたけど、あまり長く飼つてね、人を見たら化けたつて。化けると言つたらね、人になつてね、ここに来る女に強姦して、しようとしたつて。これは芝居でやつていたねえ。

（話者交代、以下は島里ナベさんの語りの訳）

猫はあまり長く飼うと、丁寧にかわいがつても、しまいには化けるわけだよ。だから、猫は長く飼うなつて、それだからだよ。

## 〔3〕 道具の化け物

### ① 化けるしゃもし

仲宗根ツル（大正六年生）越來

（しゃもし）化けたつていうだけしか聞いてないですけど。わかりませんける。ただこれだけしか。あれは粗末にしたら化けるつても（聞いた）。やっぱりあれば、もう長いこと、ごはんいれてなかつた、食べたもんだから、そのあれじゃないかね。ごはんの。

（なにに化けるかは）化け物つてしか聞いてないんですけど、化けるつて。そう、ただ、これだけしか、はつきりとは。昔の道具はみんな、もう、方言でいつ

※1 祝女殿内 村の祭祀を司る祝女の家のこと。祝女は琉球国王府に任命された女性の神職。

たらたくさんあるさね。

(化けないようにするには)これまでではつきりわかりません。ただ、これだけしか、年寄りの教えたこと。

## [4] 悪靈のわざわい

① ナナユフイーとシチニンヨーテー

金城賀良(明治四十年生) 古謝

方言原話

ナナユフイーとシチニンヨーテー  
ナナユフイーんちよー、安謝めはたぬ坂ぬあ  
しえーやー、那覇んかい行ちーに。ありが北ぬは  
たんかいナナユフイーんでいる畠ぐわーぬあたん  
でい。うりがまた南ぬはたぬんかいよ、ナナユフイー  
んでいる人ぬ入つちよーみしえーる按司お墓ぐわー  
ぬあたんよー。

あんさくどう、昔えーシチニンヨーテーんでい  
ち、化き物ぬ、人ぬ魂取いる化き物ぬうたんでい  
くどうてー。あんさーに、うぬナナユフイーでい  
しえー、人ぬ家にどううくどう、日中や。うんにん  
なー耕地ぐわーやくいらつてーくどう、

夜なーうり仕事しえーーんでいち、シチニンヨー  
テーんでいる化き物ー人取やーどうやくどう、  
「いやー生ち者ーどうやるい、死に者ーどうやるい」  
でいちやくどう、畠ぐわーかじーとーしが、あんやた  
あんさーにさーに、はちらー歩かんでい。後生ぬ

んでい。

「私ねー死に者どーやる」あんさくどう、

「だー、あんしえーいやー足触ていんだ」でいちや  
くどう、鍼やさかさまにからみやーに、柄かちみらつ  
たくどう、柄や熱えーねーんしえーやー。

「いやー頭触ていんだ」でいちやくどう、蒲葵笠触  
らち、蒲葵笠ん熱えーねーんしえーやー。熱ぬあり  
わるんんちーわかいさに。あんさくどう、

「んちや、死に者どーやさやーーんち。うんにーか  
らー、うぬ耕地かじーがー夜ー行かんたんでい。ゆー  
なんぎーでいしーとー。

あんさーにや、

「いやー死に者やくどうや、私つたーとうまじゅん  
まーぬまーんかい清ら女ぬうくどうや、うりが生ち  
肝取いがやくどう、いやーんまじゅん行き」んちや  
くどう、なーならんでい言やらんしえーやー。足

ん触らつとーい、頭ん触らつとーい。熱えーねーら  
んぐどうなー化き者でいちかちみらつとーしえー

やー、向こうに。あんさくどう、行じやくどう、う  
ぬ清ら女ぬうんでいる家んかいよー、家ぬ前んじ

立つちょーたんでいくどう、しぐ、血んだらだらつ  
しょー、肝かんし取いで、うりんかい抱かちえー

ぐとーんよーやー。うれーなーかんし肝ー抱ちまー  
まーーーなー。さくどう、「あぬ女ーなー明日葬式」

※1 ナナユフイー 那覇市天久に伝わる地名。「道老洞」に見える「七与平利窟」か。

※2 安謝 那覇市の字名。安謝川をはさんで浦添市勢理客と接する。

※3 按司お墓 按司は琉球国初期頃までの琉球各地の政治的支配者。

承される古い墓が按司墓と呼ばれる。

※4 シチニンヨーテー 魔物の名と思われるが詳細不明。

※5 蒲葵笠 竹ひごで骨を組み、蒲葵の葉を張った浅い円錐型をした笠。主として農民用。

※6 後生 あの世、死後の世界。

者——鶴歌——ね——やむるま——んかいがはいら——わから  
んでい、必——なじ——鶴歌——すんち、はちら——歩かん、う  
れ——。うれ——や——生——くと、人——うやくと、

鶴歌——くと、はちう——んだん——でい。うれ——な——

夜——明——き通——し起——きど——るば——て——、うぬ——女——ぬ肝——持——

ち——よ——くと、あんさ——にから、夜——ぬ明——きたくと、

うま——葬——式——ぬ準備——やくと、あんさ——くと、入——つちん

じ——や——に、

「うぬ——女——私が生——ちき——どうんさ——私——にんかい妻——

み——しえ——み——んでいちぬ——しきたくと、

「と——、あん——しえ——死——じよ——る女——生——ちき——ていから

妻——しみ——るする——んち、向——こうや、あん——し、かんし

持——つちよ——しえ——、女——ぬ胸——んか——うす——でい、な——

肝——しりん——ちよ——んば——て——や、しりん——んちやく

と——うぬ——女——け——生——ちちよ——るば、ちよ——どう、

うり——がナナユヒ——妻——など——るば——。

### 〈共通語訳〉

ナナユフィー——といつてね、安謝の近くに坂がある  
だろう、那覇に向かつて。その坂の北のほうにナナ

ユフィー——という煙があつたつて。そのまた南のほう  
に、ナナユフィー——という人が入つておられる按司  
墓があつたよ。

それで、昔はシチニンヨーテー——といつて、化け物  
が、人の魂を取る化け物がいたそだ。それで、そ

のナナユフィー——といつては、人の家に奉公している

んだから、日中は。(自分の)烟はもらつていたので、

「夜にその仕事をしよう」といつて(烟を耕して

いたら)、シチニンヨーテー——といつて化け物は人を喰

う化け物なので、

「おまえは生者なのか、死者なのか」と聞くので、

ナナユフィーは烟を耕しているんだけど、こう答えたつて。

「私は死者である」と。そうしたら、「どちら、それならおまえの足を触つてみよう」とい

うので、鍼をさかさまにつかんで、シチニンヨーテーは柄をつかまされたので、柄は温度はないんだ

よね。

「おまえの頭を触つてみよう」というので、蒲葵笠を触らせて、蒲葵笠も温度はないからね。体温があつてこそ生きた人間だとわかるだろう。それで、「ほんとだ、死者なんだね」といつて。そのときから

らはその烟での畠仕事には夜は行かなくなつたつて。夕暮れてからは。

それでね、  
「おまえは死者だからね、私たちと一緒にどこそこ美人な女がいるからね、そいつの生き肝を取りに行くから、おまえも一緒に来い」というと、もうできないとは言えないんだよね。足も触られていて、頭も触られていて。体温がないからもう化け物と思

金城寅良（明治四十年生）古謝

表 1 田場大工 具志川間切田場出  
身の伝説的な名工。沖縄市の伝承  
をたずね、正城伝説編「二六一  
ページから二六六ページに田場大工  
の伝承が複数話掲載されている。

## 方言原話)

われて捕まえられているんだよね、化け物に。そして、行つてみると、その美しい女のいるという家にね、家の前で立つていたら、たちまち、シチニンヨーテーが血もだらだらした肝をこう取つて、ナナユ

フィーに抱かせたみたいなんだよね。ナナユフィーは肝を抱いたままね、「あの女はもう明日は葬式だ」と考えた。そうしたまま、一向に歩こうともしない。

い。あの世の者は鶏が鳴いたらみんなどこに行くのかわからぬと、必ず鶏が鳴くまではと、一向に動こうとしないでいた、ナナユフィーは。この人は生きている人間であるから。

鶏が鳴いたので（化け物は）いなくなつたつて。

ナナユフィーは夜通し起きていたわけだよ、その女の肝を持つていてるから。そうして夜が明けたので、その家は葬式の準備をしているから、入つていつ

て、

「その女を私が生き返らせたら、私の妻にさせてくれますか」と肝を差し出したら、

「ああ、それなら、死んでしまった女を生き返らせたら妻にさせよう」と、そこの人には。

それで、こう持つていてるものを、女の胸に押さえつけ、もう肝を押し込んでるわけだよ。押し込んだら、その女は生き返つてしまつたわけ。まさに、その女がナナユフィーの妻になつたわけ。

「乾きていい水欲さぬしみてい、しーねー」言ち。うぬ後生ぬ者ん、むる習一ちえーたんでいくどうてー、聞ちじううくどう。  
うぬわらばーんかい水飲ましーねー、夜なーや、うぐどうーつし、あんし飲ますしんむる化き物一習一ちえーしーさ。また、「くすくつくえー」でいしん化き物一習一ちえーしがよー。あんし、うぬ一ち、うりねー、今一鼻ひつちやいぬーさいしーねー「くすたつくえー」でいしえーや、ありん、化き物一習一ちえーし。また、わらばーんかい水飲ましーに、そーひちさーに『ふい、ふい』、うぐどう飲ますしえーやー。ありん化き物が習一ちえーし。

シチニンヨーテーが、

と。

「田場大工の命を取つてこい」と言つたらね、その道端で用を足そうと思つて座つていたそつだ。そう

したら、(シチニンヨーテーの)別の友だちがね、「そしたらそいつが『くすくつくえー』と言つたら(命を)取れないよね」というと、

「それまでは知らないだろう」といつて。それで、あとからまた、「(のどを)乾かせて水が欲しがらせて、命を取れ」と言つて。そのあの方の者も、(厄をはらう方法を)

みんな教えているわけだけどね、(田場大工が)聞いてたわけだから。

その子どもに水を飲ませるとき、夜だと、水に息を吹きかけて飲ますよね、「ふい、ふい、ふい」、このようにして。そうやって飲ますといふこともみんな化け物から教わつたことだよ。また、「くすくすくえー」というのも化け物が教えたものだよ。

だから、この二つ、これは、今はくしゃみをしたりなんかしたら、「くすくえー」というよね、あれも、化け物が教えたこと。また、子どもに水を飲ますときに、水に息を吹きかけて『ふい、ふい』、そのように飲ますんだよね。あれも化け物から教えてもらつたこ

表1 マーシジョーマシー  
亡くなつたばかりの人 ほどの意  
か

### ③ まじむんと牛

島袋次郎 (明治三十四年生) 知花

方言原話

なー、畑から上がりていぢやーに、牛ぐわー、太陽ぬ落ていめーしん牛すんち、川んかい涼まし行ちーに、牛ん、うり見じにし、ふいつたまやーに、歩かんよー、あれー。あんしーねーやー、またわつたー親ぬ、鼻綱かんしさーはていがいちみしえーいや、「うまぬ後えーぬーやらわん、左ぬ足ぬ下櫛どー、どうちらーしむん、どうかん、またしぐ左ぬ足に蹴りくるすんどー」んち、かんし三回り蹴やーにやすんちふあや、うりがはつちゅしえー、ながねーふいつたまやーによ、前んかいうつていくどう。  
牛ぬ見ーんどー、あれー。あれーマーシジョーマシーン人が立つちゅたんでい。

共通語訳

もう、畠からひきあげてきて、牛を、太陽の落ちるまえに牛を連れて、川に涼ませにいったときに、牛がそれ(まじむん)を見たとたん体をたわめて、歩かないんだよ、あいつが。そうしたらね、またうちの親が、牛の鼻綱をこうやってひつぱりなさつてね、

「その後ろはなんであつても、左の足の下は槍だ

ぞ、退けばよし、退かなければ、またすぐ左の足で  
蹴りころすぞ」と、こうして三回蹴つてね、(牛を)

ひっぱつたら、牛があるくんどう、背中はたわめて  
ね、前に進んだので。

牛が(まじむん)を見るんだよ、牛は。あれは、マー  
シジョーマシーの人が立つていたんだつて。

#### ④ ひーなーまじむん

仲宗根盛雄(明治四十三年生)登川

方言原話

仲門ぬ門どうやひがや、昔、まじむん、「ひー」  
というのはまじむんどううくどう、あんし追やー  
に、人ぬ歩きーねーうぬ足んけー追ていちゅーが、  
けーくらみーねー、うぬ足んけーたつちかやーに、  
すすていん落ていらんたん、ぬーぬーんでい。

共通語訳

仲門の門のところなんだけどね、昔、化け物  
『ひー』というのは化け物のことだからね、そして  
追いすがつてきて、人が歩いたらその足に追いす

がつてくるが、踏んでしまつたら、その足にまとわりついて、さすつても落ちなかつた、とかなんとかつて(聞いた)。

#### ⑤ 裹いかかる白雲

安次彌ツル(大正六年生)嘉間良

隣の兄さんがね、少しあれ、十九歳のときから頭  
少し変なつていたけど、あれが十七歳ぐらいかね  
え。ちがつていていたかねえ。どのくらいだったかねえ。  
烟から帰つてきて、くむい「溜め池」があつたか  
ら、あつちに手足、夕方、手足洗つたり、歛洗つた  
りなんかしにいつたらね、海のところからごろごろ

ごろーつしょ、白雲、白雲、黒雲みたいに高ーくなつ  
て、とろろろろーつして、飛行機が通るみたいだつ  
たつて。どろろろ、こっちに倒れたから、この兄さ  
んはもう、片足に走つていてね、高いところに階  
段があつたから、そこに上つてきて、また、おうち  
にきて、また、棒持つて、みんな棒持つていつたら  
なんにもなかつたって。あれから一、三箇年してか  
ら、頭、ばかなつていたわけ、このお兄さんは、う  
ちのすぐ隣だつたよ。

黒い雲みたいにね、もう、立つてよ。こんなだつ  
たつて。襲つてきたらしい。まあ、襲われまではし  
なかつたかもわからないけど。

## 二 崇り

### ① 喜屋武まーぶの崇り

城間文子（大正七年生）比屋根

〈方言原話〉

戦争前やむる工事、まーんくいーんやたしえー。  
うりんかい使いんでいやーない、だい入りやーな  
かい、石壙さーやたんよー、うぬ人たーや。あんさ  
かう、喜屋武まーぶぬ、仲喜洲学校、今のが江洲  
学校のうしろに、岩があるでしよう、丘が。あまぬ  
喜屋武まーぶぬ石、石壙すんでいやーない、だ  
い入りやーない、二人さーなきいふがちから、ま  
たうぬ石取てい、うぬわじや。うぬわじやしみしえー  
するむぬ。

戦争前。

あんするむぬ、うぬ神さまが私じーじやんか  
いかきていてー、あかるーたる人、三人ぬ神さま  
が、うまから歩ちゅん、歩ちゅんつし、なー寝たつ  
きりし、どーーしん起きうーさん人どーーなー。あん  
するむぬ。

「うまかいあかるーたる人ぬ、女ぬ、うまから歩ちゅ  
ん、歩ちゅん」さーない、しぐ飛び起きやーなか  
い。昔えーむる家ぬ後や学ぬあたしえー、うぬ学ぬ  
みーんかい入づちはぢ。あんさーない、じゅんに  
ん。  
「若女ぬあかるーふたるそーるー、三人、うまんか

毛ぶる立ちやーつし、うり見じーねー。うまいつべー  
なーつし、  
「外おんかい出じーんーち、喜屋武まーぶんかい指差  
さーに、

「あまんかい行ちゅん、行ちゅん」さーなさいなー、  
しぐ、うつさぬ人さーなきいかちみていいしーし

が、いしうーさん。なーうれー神さまぬしがてい  
どううくどう、いしうーさん、あんしやたしが。あ

んさーに、しぐうぬ日うてー判じぬ家かいはつちや  
くどう、

「うれー喜屋武まーぶぬ神さまぬどうかかとーく  
とう、早くなーうさぎーるんしえー、いーむんない  
くどう」んでいち、あんしやたしが。言んねーんち、

うりうさぎたくどう、しぐ落てい着ち、むぬん食  
でい、あんしそーたんどー。うすまたんよーじゆ  
んになー、あぬざく。

やつちーが。しーじやんかいかかやーない、なー  
寝たつきりつしなー、どーーしん起きゆーさん人  
ぬ、むぬむる食まん、三日むる食まん人ぬ。ありかー  
や愛情ぬ深さぬ、うんぐどう病気かかとーしがうい  
ねー、うるうつさうまんかいうしちりていちゅー  
ん、家ぬみー。うつさぬ人さーなさい、いしうーさ

※1 だい 未詳。テコのことか。  
※2 仲喜洲尋常小学  
校(のちに仲喜洲国民学校)のこと。  
※3 高江洲学校 うるま市立高江  
洲中学校を指すと思われる。  
※4 喜屋武まーぶ うるま市具志  
川にある喜屋武マスクのこと。現在  
は喜屋武マーブ公園。  
※5 苗 植物の系芭蕉のこと。糸  
芭蕉の茎から取った繊維やそれを績  
んで作った糸も芋(う)ー」という。  
※6 判じ 易者 占い師、靈能者  
などの診断。ここではそうした診断  
を行う靈能者のことを指している。

いえよーん、来よーん」つし。『うれーぬーがらどう

やるむん』で、思てい判じかい行いくどう、  
『喜屋武まーぶぬ神さまぬ、早くなーうりからしー

ねーしん』ちさーなかい。あんざーにうぬうさぎ屋ー  
頬まーにうさぎらちやくとう、うんにんにからやー

やーどうなどーたん。

けー壊ちあどうから。壊ちやくとう、戦争に、  
海岸んかいむるうり積むしえー。うりさーやたん  
よー、私つた『いの』親ー。だい入りやーなかい、壊  
さーなかい、石えー作らやーに、また、あまんかい  
かやーつち。ばんじ、うりしーに、うさぎらんぐー  
とうーしえーんてー、なー、ちやーしん。だー、う  
まー城ーけー壊さりーるばーやしえー、喜屋武まー

うといつて、戦争前。

それで、その仕事をしていたのに、ちょっと、喜  
屋武まーぶの神さまがうちの、私の兄にとりついて

だよ、『光り輝く人、三人、三人の神さまが、そ  
で起き上がりれない人がだよ。そういう状態なのに、  
歩く、歩く』といつて、もう寝たつきりで、自分

「そこに光り輝く人が、女が、女が、あの、そこを  
歩く、歩く」といつて、たちまち飛び起きて。裏手  
に、昔はどの家のものも裏手に糸芭蕉の煙があつたんだよ

ね、その芭蕉烟の中に入つていって。それで、すぐ  
く鳥肌を立てて、神さまを見たら。そこらじゅう歩  
いて、「外に出る」と、

「あつちに行く」、喜屋武まーぶを指差して、  
「あつちに行く、行く」とあばれて、たちまち、た  
くさんの人でつかまえて座らせるけど、座らせられ  
ない。もうこれは神さまがとりついているので、座  
らせられない、そんな状態であつたけど。それで、

すぐその日のうちに占い師のところに行くと、  
「それは喜屋武まーぶの神さまがとりついているの  
で、それを、早くおそなえをしたら、良くなるから」  
と、そういうことだつた。言われたとおりに、神  
さまにおそなえすると、すぐ落ち置いて、ごはんも  
食べて、そういうことがあつたよ。どんでもなかつ  
たよ、ほんと、あのときは。

※1 うさぎ屋 直訳は「お供えをする人」。神仏、祖廟などに祈願をする  
上げ、靈障を除く祈福者。

（共通語訳）  
戦争前はみんな工事、どこもかしこもだつたよ  
ね。海岸に使うといって、そこを入れて、石を壊す  
仕事をしていたんだよ、その人たちは。そしたら、  
喜屋武まーぶの、仲喜洲学校、今の高江洲学校のう  
しろに、あの、岩山があるでしよう、丘が。あそこ  
の喜屋武まーぶの石を、石を壊すといつて、あの、  
てこ、てこを入れて、そして二人で穴を開けてから、  
また、またその石を取つて、そういう仕事。そういう  
う仕事をなさつていたよ、あの、海岸通りに石を使

兄が。兄さんにとりついて、もう寝たつきりになつ

て、自分でも起きあがることができない人が、ものもまったく食べない、三日まつたくものを食べない人が。あのあたりは愛情が深くて、このように病氣にかかった者がいたら、来れるだけ連れだってやつてくる、家中で。それだけの人で、座らせられなかつた。

(兄は) 家の裏手に飛び出して、

「若い女の光輝いてらっしゃる人が、三人、ここに来ている、来ている」と。「これは何があるのだろう」と思つて、占いに行くと、

「喜屋武まーぶの神さまが、早く祈願をしなさい」と言われた。そして、その祈願をする人を頼んでおそなえしたら、そのときから穏やかになつた。

(兄が病気になつたのは喜屋武まーぶを) 壊してしまつたあと、壊したので、戦争で、海岸にかたつぱしから石を積むよね。その仕事をする人だったんだよ、うちのおとうさんは。こてを入れて、壊して、石を加工して、また、海岸に運んで。その仕事の最盛期に、おそなえをしないで仕事をしたんだろうねえ、どうも。ほら、それは城が壊されてしまうわけだから、喜屋武まーぶの城を。

と言よつたそうですよ。私たちのほんとは、この『じゃーむ』の昔の字は山の上にあつたそうですですよ。山の上に、上比嘉というところがあるわけ。上比嘉。そこには『じゃーむ』の元字だから、殿内とう幸とう宇根とう、三か所の家が、今も残つてゐると思うんですよ。山暮らしして、字全部の元所だから。

で、その前には、大きな松があつたわけ。松ね、大木。昔は、臼ね、米をつつく臼。これを作るほど大きな松があるわけさ。で、これ、沖縄県がね、この各大きな松は切り倒すという計画になつたわけ。そしたらうちの部落は、

「はい、これはもう私つたーがもう、字比嘉のものだからね、字比嘉のみんな、元祖のうちが植えた松だから、これは切られたら大変だ」と言つてね、嘉で切ろう」と。字比嘉で切ることに決めてね。

村吉とう、村吉ぬすーど、『すー』というのはおとう「おとうさん」。それから、西ん我那覇小ぬすーど。この二人は鋸引きの名人であるわけ。で、この二人にね、この木を切らすわけね、区長さんが命令して。切らしたら、切つてあとからよ、この二人の家族の、娘さんがね、私たちが七つ、八つのことだから、もう、女は髪がなければ大変さね、黒い髪。もう一本も残らず、つるつるに飛げてるわけ。両方

※1 比嘉 久米島町の字名。久米島中央部、東海岸にひらけた平野にある集落。

※2 順内とう名幸とう宇根 それ比嘉集落の屋号。「久米島の地名と民俗」に昭和初期まで上比嘉には三軒の家があつたと記述がある。

※3 元所 宗家。本家。家系の大元となる家。

※4 部落 沖縄の口语で村落、集落を指す。差別的な語義はもたない。

※5 元祖 先祖、祖先のこと。初代を持った場合と、代々の祖先全体を指す場合がある。ここでは後者か。

※6 村吉 比嘉集落の屋号の一つと思われる。

※7 西ん我那覇小 比嘉集落の屋号の一つと思われる。

の娘が、禿げちゃびんなつてね、熱病かかつて。どこの人も熱はかかるのに、この木切った二か所の家族の娘がね、二人、坊主になつていよ、つるつるになつてい、禿ぎてい。あんすどう、坊主になつてね、つるつるになつて禿げて、それで、「なー、くれー、大事などーん（もう、これは一大事だ）」。もう、区長さんも心配してね。

「もう、これは大変なことになつた。これ、なにかなしぬればいけない」と。

私たちの字は祝女いわめがたくさんいらっしゃるわけ。祝女いわめというのが。祝女いわめーんかいたかぐとう（祝女いわめ）の字は祝女いわめがたくさんいらっしゃるわけ。

女のおばあさんに報告したら、祝女いわめーんかいたかぐとう（祝女いわめ）がね、「これはね、私たちの部落のものには名幸御嶽なまゆきごくという御嶽ごくがあるわけ。その御嶽ごくの松やつたらしいよ。

あの大きな松は。

「名幸御嶽なまゆきごくにお詫びしにいこう」と。この二人を真茅まやで綱を縛とうてね、縛とつて、うぬすーぐわー二人、縛とてい、「娘たちのお父さん二人を縛とつて、二人、泣なきだけ殴たたつて、それで祝女いわめたちがね、毛はどんどん生えてしまつてね、真つ黒くろしみー

ていいよー（真つ黒くろ毛が生えてきてね）。

それから話聞いたたら、この松にはね、私たちのおじいさんたちの話では、もう、船の入ると、船の歩くところ、真下つて見えるよ。山だからね。その船、はじめは帆前船ふなまへせんだつたが、あとからポンポン船ポンポンせんだつたでしょう。このポンポン船のことをおじいさんは、「火車ひしゃ」と言いつたよ。火を燃やして走る船と言つて。で、これを乗つて歩いているときに、この松の上に「ちーのうらんさん」というの、かかつていていたらしい。「ちーのうらんさん」とはなにかって聞いていたら、神さまが着ける着物らしいな。うりがいーくるさがいたんだいよー（それが自然に下がつていたんだいよー）。あんひ神木かみのきつち（それだけの神木だつて）、神木かみのきを切つてね、こんななつたんだと言つて、あれだつた。

この娘さんたち、私は覚えてるんだがね、私よりも五つぐらい年上の娘たちだから。全部毛禿かぶいておる（まるまる毛が禿げてね）、びかびか、一本もみーん（一本も生えてない）、びかびかーよ。二人の娘さんたちが。これ御願ごねん（祈願）したらまた毛がどんどん生えてきてね。元通り、髪生えていたな。向こうではこの御願ごねんよ、祝女いわめぬ御願ごねん、とつても盛ん。これは私たちの部落の話です。

※1 祝女 琉球国王府に任命された女性の神職。村の祭祀を司る。

※2 名幸御嶽なまゆきごく 久米島町比嘉にある聖域。比嘉集落から後方の台地にあり、松林に囲まれている。

※3 真茅まや イネ科の植物。チガヤの方言名。日当たりのよい原野、山地などに生える。茅蓋屋根の材などに用いる。

※4 ボンボン船 焼玉エンジンを動力とする小型船の俗称。  
※5 「ちーのうらんさん」 漢字で表記すると「黄の御涼傘」か。御涼傘は国王の外出時の飾りとして使われる大傘。「球陽外卷 遺老説伝」に、かつて神の出現の先触れとして今帰仁のクバの御涼傘などに赤や黄色の御涼傘が立つことがあったという記述がある。

上根ウサ（明治三十一年生）宮里

## 方言原話

「私つたーがうたるとうくるなかい、うま、むる山やしが、石ぬみーなかい山やしが、跡継じえーうらんぬぢやーなやーに。あんさーに、うぬふーじー人ぬぢやーがる、むる巡て、むんぬはつちえーうちゅ喰えーんてい言ゆんどー。うぬふーじーぬ人ぬぢやー、後繼じんうらん。あんさーに、むんぬはつちえーうちゅ喰えーくとうや、あんし、「うまから歩ちむぬ食みよーやー、はりーんでい、しぐ来ちはつちえー喰えーんてい、あぬ人ぬぢやーが、跡継じうらぬー人んぢやーが。あんすくどう、私つたーゆかーちえーうつどうやたしが、うま隣やたしが。うまなかいうぬ人ぬぢやーめんしえーい。また、くまー道やしが、うま上やしが、十三日、御迎ぬ日に、門や草刈いたくどう、「えー、あぬ、聞き取りできず。早くうざぎやーなかい」んぢやくどう。きつさうん人んぢやーがうちゅ喰わて。かかて、なーまうじやくどう、かかて。さーなかい、私つたーしていぬあんまーねーまんなーちーが行じよーちが、『聞き取りできず』が、治らん。エタ呼だくどう、祀る子孫のない靈が集まる場所だった。それで、そ

「跡継じうらーぬー一つちえーい」。あんさーい、  
「とー、うん人ぢやーやむぬ食まんでいるやくどう  
や、重箱ぬみーうまんかい持つちんじ、御香うひ  
七尋七階うさぎで、うりむるいー返らち、くれー  
からーいやー落てーんどー」言い言たんてい。やつ  
たから、まーんかい行じらー、ねーんなたんてい。  
あんし、

「むぬ食みよーやー、はりーんでい言ゆんでー」。

うぬ人ぬぢやー、池味、私つたー字ぬ池味じゅー

ひーでいたるまでいん、一か月なかいビンシーうさぎで、いみれーからー、池味ーゆー米ゆんでいう

しが。池味人よーわからんなやーい、うまぬしりー  
や、くん人んぢやーがるきじやーすしが、うまー悪

さん、悪さんすしが。うまぬ下私つたー家やしが、  
あ、むる、うまから家壊ちうらんむん。うまぬユタ

の一、

「うまぬうん人んぢやーや跡継えーうらんくとう、  
今ねーうとういむちしえーからー徳くいーん」でい

言ゆんどー、池味ー。親あんまーがあんち言ゆたん  
どー。

## 共通語訳

私たちが住んでいたところに、そこはみんな山だけ、石だらけのところにある山だけど、(そこは)祀る子孫のない靈が集まる場所だった。それで、そ

表1 跡継じえーうらん人 義をする子孫が絶え、さ迷う靈のこと

とを指した言葉。

表2 むんぬはつちえー 「むんぬはつちえー」は無縫の靈に供える食物、あるいはその精を指す。惡靈が食物の精氣を取ると味が落ちたり腐ったりするといわれる。

表3 十三日 盆の初日のこと。旧

暦七月十三日。表4 まんなーちー 「沖縄語辞典」にmānnaheは「のろう」という語意で記載されるが、ここでは

信者に害をなす意はない。惡靈の被害に対しなんらかのまじないで処置をする、ほどの意味と思われる。

表5 ユタ 雷力が強く、靈の世界を見抜く力を持つ宗教的職能者。神

ばかりとなつて託宣や占い、病氣治療などをおこなう。

表6 池味 うるま市宮城島にある字名、また宮城島にある屋取集落のこと。

表7 ビンシー 酒を入れる鋲製の器を指す語だが、ここでは銅製の瓶を含む祈願道具一式を用いて祈願を捧げることを指す。

のような靈たちが、みんな回つてきて、食べもの精を食つてしまうと言うよ。そういう感じの靈たち、後繼ぎもない。

そうして、食べものの精を食つてしまうからね、それで、

「そこで食べものを食べなさいね、どうぞ」と（言うと）、すぐ来て食べものの精を食つたって、あの靈たちが、跡繼ぎのない靈たちが。

そうすると、私たちより一歳は年下だつたけど、その（山の）隣にある家の門で草を刈つていたら、「ねえ、あの、『聞き取りできず』。早くおそなえに行きなさい」といったので。さつきこの人たちが（おそなえのものを）食べて、祟りがかかつて、道理のわからない者だから、かかつて、そうしたので、うちの姑が、呪文を唱えに行つたけど、『聞き取りできず』治らない。ユタを呼んだら、「おまえたちの隣に餓鬼となつた人がいるのか」「後繼ぎのないものたちがいます」。そうしたら、『じゃあ、この人たちは食べものを食べていないのでは、重箱いっぱいに御馳走を詰めたものをそこに持つていつて、お線香を七尋七階おそなえして、それを全部ひっくり返して、それをやつたらあなたの埋めなければ架からない』んでい、言うたらしい

※1 真玉橋由来　沖縄芝居『真玉橋由来記』が意識された発言か。『真玉橋由来記』は平良良勝作の戯曲。

一九三五年頃の初演で、真玉橋の人柱物語はこの作品により本島地域に広まり、伝化した。

※2 真玉橋　那覇市と豊見城村の境界を流れる国場川に架かる橋。

一七〇七年、木橋から石橋に改修。沖縄戦で破壊され一九六三年に再建築された。

※3 奥武山　那覇市にある奥武山公園のこと。

※4 真玉橋　那覇市と豊見城村の境界を流れる国場川に架かる橋。

一九三五年頃の初演で、真玉橋の人柱物語はこの作品により本島地域に広まり、伝化した。

※5 真玉橋　那覇市と豊見城村の境界を流れる国場川に架かる橋。

一九三五年頃の初演で、真玉橋の人柱物語はこの作品により本島地域に広まり、伝化した。

※6 真玉橋　那覇市と豊見城村の境界を流れる国場川に架かる橋。

一九三五年頃の初演で、真玉橋の人柱物語はこの作品により本島地域に広まり、伝化した。

#### ④ 真玉橋由来の芝居の祟り

佐渡山夏枝（大正七年生）室川

の姉が、呪文を唱えに行つたけど、『聞き取りでき

ず』治らない。ユタを呼んだら、

「おまえたちの隣に餓鬼となつた人がいるのか」「後繼ぎのないものたちがいます」。そうしたら、

『じゃあ、この人たちは食べものを食べていないの

で、重箱いっぱいに御馳走を詰めたものをそこに持つていつて、お線香を七尋七階おそなえして、そ



ピンシー

さー。そして、それでね、一生懸命ね、探すけどね、絶対探されなかつたって。そしてあとはね、この人が現れてよ、自分の口から出して、自分のこと言うてるさーねー。もう仕方なくてね、この女をよ、生き埋めにしてね、それからあの橋架かつたらしいさーねー。そしてよ、やっぱしその人も神さまさーねー。だから自分でもう、あれしたんでしょう。

んでよ、あれからあとどよ、これはね、昔の話だから、本当か誠か知らないけどね、やっぱしね、うちらが考えたら、それはそうだつたはずと思つている。

うちら、フィリピンから引き揚げてきてね、私は豊見城にいたから。自分の実家に引き揚げてきたからね。そしたら、うちらあつちの奉仕作業だからよ。アメリカにこの橋つぶされてね、橋架けるけど絶対架からない、絶対架からなさい。そして、今、七回目に架かっているさー。

これよ、またね、石積んでもね、補強しても壊れてよ。これ本当の話やんばー。だからよーひー、それでよ、もう七回目にはね、ようやくよ、こっちのあの、部落の区長さんがよ、ユタぬ家行つてね、あれしたらよ、この七色元結のね、あれをこっちになもしてないのよ。祀つてないの。それからね、それを出て、今はきれいに祀つてあるさー、そばぐわーに。あれね、あれ終戦後、ずっとあとから、

七回目によくあれした（橋ができる）らしいさー。そしてね、そつちに神さまをかざつてね、したから、あんなにして、今の通りできているの。鉄橋架けてもね、どんどん壊れたんだよ。風の吹くたんびに壊れでよ、あの橋は。うちらはね、引き揚げてきてからのあれしたから、本当の話さ。今、きれいでね、祀られているさー。

そしてよ、終戦当時は村遊び<sup>むらあそび</sup>ってあつたさーねー。この村遊び<sup>むらあそび</sup>のときには、真玉橋でね、この七色元結<sup>しちいろくわい</sup>のよ、芝居<sup>しばゐ</sup>したからよ、区長さんはね、倒<sup>たお</sup>されでよ。役所でよ、真玉橋<sup>まことひき</sup>、七色元結<sup>しちいろくわい</sup>のよ、芝居<sup>しばゐ</sup>したからよ、区長さんはね、倒<sup>たお</sup>れてそのまま死んだよ。それからよ、これにね、拌<sup>はん</sup>んでね、

「あんたのあれをね、実現させてね、みんなにあれするから」と言つてよ、拌<sup>はん</sup>まないとできないって。それから七色元結のあれはね、全然、豊見城村でしないよ。

だから、「人先はもう、あの、するな」という、これからね、出でいる話らしい。ほんと人に間を生き埋めにしたかどうか、それは昔のことだからわからんけどね、この橋の壊れているの、うちらはよく、奉仕作業行つているからわかるさ。これ、本当の話よ、終戦後の話は、うちらももう、橋造るたんびに、部落から何名いうて出るからね、奉仕作業行つていいのに。今日は何名、今日は何名つて、村から。六

\*1 フィリピンから引き揚げ 話者  
は民としてフィリピンに暮らした経験があり、戦後に沖縄に戻ったものと思われる。

\*2 奉仕作業 ここでは米軍によつて真玉橋に関わる土木作業に勤務されたことに言及しているものと思われる。  
\*3 村遊び 農村で行なわれる豊年祈願の奉納舞踊。出演者と観客とともに踊を楽しむ。旧暦六月末の豊年祭や旧暦八月十五夜などに行なわれることが多い。

回まで架けてね、七回目にあの橋はちゃんと架かつた。あのときまだ祀つてなかつたさー。今よ、お宮ぐわー造つてね、きれいに祀つてあるさー。

### 三 幽靈、靈魂

#### [1] 幽靈の言い伝え

##### ① 逆立ち幽靈

辻士名ナベ（明治三十七年生）池原

〔方言原話〕

女一清らか一ぎーやたんでいくどう、

「いやーや私かけー死にーねー夫持とうのはじやくとう」、鼻うつ削じよーしえーたんだいい、うぬ妻えー

清らか一ぎーやんち。あんしさーなかい、「どーなー、あんしーならんむん」でい。けー死じやくとう、また、綱つし絡まちやーに、逆送いさーによー、うりがまじむんなでいどうやんでいんどー、うぬ話や。

あんさーにさくどう、なー、うりがまじむんなでいてー、女ぬ。だー、逆送いさつて、鼻うつ削がそんでもいるむぬ、「ぬーんでいる家庭んかい、あんがんつし私ねー用事やしがやー、私が一人ゆーさんくどう、あま

ぬ符札たづくわーちえーし剥じどうらさんなーんち、生ち人んかい頬だくどうや、

「はつさみよー、あんしからでーじやる」んでい。

えーりん病どーる人ぬうてーんてー。

「いーいー、うれーならんむん」でい言ちやく

とー、あんしえー、うぬ符札一必なじどうみーら

ん見ーらんぐどうつし私がかくごーすぐどう、うぬ

符札、うまにはじえーしん、あまにはじえーしん、

またうまんじはじえーしん、四ーとうくまからたつ

くわーちえーし剥じどうらし」でい言ちやくとう、

「あん、わんねー見ーらりーねーでーじするむん

なー」でいちやくとう、

「いーいー、見ーららんぐどうつし、いやーが

出でていちゅーんまでー見ーららんぐどうつし私が

かくごーすぐどう」でいちぬくとうやんでいいる

話やした。あんさーにや、

「じゅーやわらばーが鼻ひーねー「くすたつ

くえー」でい言ねーや、返すとーいんなーんちや

くどう、

「いーいー、返さんわん返すん。また鼻ひーに

どう、「くすたづくわー」でい言くどう、またうりし

ねーちやーすが」んちやくどう、

「あー、ちけーねーらんそーでい、剥じどうらし」

※1 逆立ち幽靈 渡嘉敷守良作の怪談劇。一九一四年初演。劇の内容はおむね話者の語りのとおりの筋立てで、美貌を犠牲にしてまで夫に尽くした妻が裏切られ、殺されておぞましい姿に変に成り果てるもの。

※2 符札 湿荷 木札や紙に呪文を書いたもので、門や家の四隅などを貼り付け魔除けとする。

※3 しじや 普通の人。または亡夫に対する生者。



符札

んち。うりが剥じ、出ていちゅて—さくどう、うぬ病どーる人よーけー亡そーたんでいる話どうやんどー。あんじう言たんどー。うぬ話どう私ーうすうそー聞ぢやる話やる。

〈共通語訳〉

その女の人は美人だつたといい（その夫が）、

「おまえは私が死んだら再婚するはずだから」（といふので、自分の）鼻をそいでいたというが、妻は美人だということで。そこまでしたのに、「夫は病気が治ると、鼻のない妻を）『こんな妻はいやだ』と思つていた。妻が死んだので、綱で巻きつけ、逆さまにして葬つたので、妻が化け物になつて現れたということなんだよ、この話は。

それで、もう、死んだ妻が化け物になつてだよ、女が。ほら、逆さまに葬られて、鼻も削がれているんだからね。そして、道中に立つていらっしやるというのに、

「どそこの家に、かくかくしかじかの経緯で私は用があるのだが、私では家に入ることができないので、あの家にお札が張られているのを取つてくれませんか」と、生きている人に頼んだらね、「なんとまあ、それは大変なことだ」と。おそらく（元の夫の家に）病んでいる人がいたんでしようねえ。「いや、そんなことはできない」と断つたら、

「そう、ならば、あのお札は（取るときに）、必ず見えないようにするから、あなたが入つても見えないように、生きている人が入つても見えないように私が隠してあげるから、そのお札を、そこに貼つてあるもの、あそこに貼つてあるもの、またそこに貼つてあるもの、四箇所に貼られているものを剥がしてください」と言うので、

「ああ、私が見られてしまうと大変なことになつてしまんだがな」と言うと、

「いえいえ、見えないようにして、あんたが出てくるまでは見えないように私が隠してあげるから」というような話だった。それでは、

「生きている人は子どもがくしゃみをしたら、『くすぐつくれー』と言つてね、返すでしよう」という、「いやいや、返しても返す。また、またくしゃみをしたときに『くすぐつくれー』」というので、それをしたらどうするか」と言うと、

「ああ、心配なさらないで、剥がしてちようだい」と。生きている人がお札を剥がして、（家から）出てきたりして、いろいろうちに、その病んでいた人は「くなつてた」という話なんだよ。そういうていたんだよ。その話は私がうすうすに聞いた話である。

昔、とつてももう、自分の村の中でよ、今言ったらあの、ミスさなミスの美人。清らか一ぎーの女（美女の女）、もう一緒に夫婦になつてよ、二人若いのが夫婦になやーに「夫婦になつて」。もうしょつちゅうその男はよ、自分の妻はとても美人でしよう。仕事に行つても、おうちに行つてももう、妻の美人ばつかし考へてね。

「私妻やかなーひん清らさる女ーうらん（私の妻よりもちよつとも美しい女はいない）」言うてね、そればつかし頭に考へてよ。あとはなんだかもう、ちよつと恋の病みたいになつてね、この男は。病氣したつて。しょつちゅう、妻が清らか一ぎーやくとう（妻が美人だから）、いつまでも清らか一ぎーばつかし考へて。恋の病ふじーなやーにや「恋の病氣みたいになつてね」、もう寝たからよ、この妻は心配して。「なんで、どこも痛みもなんにもないのにね、なんでこう自分の夫はこんなに倒れてね、もう病氣にするかねえ」、思つて、もう心配で、二人仲良くしながら、頗るぐわーすしえーやー「看病するんだよね」、もう急病みたようになつてゐるから、男は。そしたらね、「なんであんたはどこも痛くもないのに、ぬーんちあんし、ありやが「どうしてこんな、病みついてい

るの」「言うてね、妻がよ。言うたら、「もし私が一今<sup>なまこ</sup>」しーねー、いやーや人ぬ妻なやーに行ちゅさやー（もし私が今死んだら、おまえは人の妻になつて去つてしまふよね）」言うとつたつてよ、妻に。そしたら、「いやー、うり毎日うり心配するやー、かんし病作<sup>アヤシマツク</sup>とーんなー（あんた、それを毎日心配して、こうして病になつているのですか」と言うてね、「私ねーなーうりどうやつさー。いやーややー、私が亡しゆかねー、いやー人ぬ妻なで行ちゅさやーんでー（私の病はそうなんだよ。おまえはね、私が死んだ瞬間に、他の人の妻になつて去るんだよね」といつて、こればつかし考へたら、「あきさみよーなー、これでこんなに病作とーんなー（なんてことなの、これでこんなに病氣になつているのですか）。じゃあ、あんたの前でね、絶対に、一人は別りらん証拠<sup>シヨウブ</sup>でね「別れない証拠でね」、言うて、この美人の女が鼻を、先ね、切つて見せたつて、夫に。人間、鼻が無くなつたらかつて見一らんしえーやー（目を向けることができないんだよねえ）。顔の真ん中に鼻があるから、ねえ誰でも。これ切つて見せてね。

あれからも、やなか一ぎなやーにや（不美人になつてね）。毎日一緒に住んでるけど、ぼつぼつまた元気になつてね、この男ー（男は）。元気にな

るけども、妻の顔見たらもうかつて悪くてもう、見  
だらんなやーにや、「目を向けられなくなつてね」、  
ひつちー「しょつちゅう」、いやになつてゐるわけ  
さな。見だらんなやーに「目を向けられなくなつ  
て」、もう愛が別れていくわけやー。

この男や、ずっと昔はあの、辻つじんちあしやー、  
辻町つじまち。あまんかい通とおやーに、辻遊びやーい、「辻に  
通つて、辻で遊んで」、じゅり遊びしてね。この女  
はまたなー、外にも出られんでしょう、鼻がないか  
ら。ねえ、人にもかつこう悪くともう、この鼻見ら  
れたら人も怖がられるから。まーんかい出じらん  
や、今度、反対にこの女がよ、もう病氣して死んだっ  
て。

死んだらね、お墓にもう、なにするでしよう、昔  
はや、葬式。入れたらね、この女はしょつちゅう出  
てきてね、この男追つかけて歩いてね、幽靈になつ  
て。そしたらこの男は、  
「こいつはもう、足があるからね、幽靈になつてね、  
僕を追つかけるから」言ゆうて、お墓からひっぱり  
出して、足のこの真ん中にね、五寸釘ごじんぢょう言うてね、大き  
きな釘を二つ打つてから、またお墓に入れたつて。  
そしたら歩かれんでしよう、もう、いくらでも、釘  
があるから。  
それでもこの女はね、もうやすまんで「しづまら  
ないで」、今度、逆になつて出てきてね、しょつちゅ  
う

う、真嘉比道まかひどよ、この真嘉比道という道に立つてね、  
全部、あつちから通る人によ、見られたつて、「頬む」  
言ゆうて。  
「僕のこの釘を抜いで、この釘抜いでちょうどいい」  
言ゆうてね。全部の人に見られてよー。全体に見ら  
れて、したらみんなもう怖がつてね、逆に立つて  
から。もう怖がつてびっくりしてね、気絶しよつたつ  
て、みんな、男も女も。そしてな、もうたいへんつ  
て、首里の村中ね、評判になつて、  
「真嘉比道まかひど」にね、逆立ち幽靈ゆうれいが立つて、みんなね、  
こんな気絶させるから、これ困る。こんなしてはい  
かん」言ゆうて、ある侍の、とつても意地のある侍  
がね、この人は今でも池城殿いけじやう内うち言うてね、大きな  
殿内のお侍さんさ。この人、意地もあつて、頭もあつ  
たさー。この人が歩いてよ、

「じゃあ、僕が行つて見てみよう、ほんとかなあ」、  
言ゆうてね。そしたら、ほんと立つてね。  
「おまえか、もう世の中の人全部ね、びっくりさし  
て、なんでおまえ、人と似らんねー「他の人とちがつ  
て、逆に立つてるか」言うたら、  
「お願ひしますやー、私がこうこうで、もう歩きも  
できんね、この釘を抜がすためにみんなに頼むけれど、誰もみんな、私を見てね、自分で気絶してびつ  
くりしてあんなだから、どうか、あんたしか頼まれ  
んから、あんたにお願いすさ」

表1 辻 現在の那覇市辻にあった

遊廓、料亭街。

表2 ジュリ 游女、娼妓、宴席で

の芸や車の披露も務める。

表3 真嘉比道 那覇市真嘉比を通

る道で、首里への裏道として利用された。

※4 僕

幽霊となつた妻が発話主

体であるため、「私」の語り違いと思われる。

※5 首里

琉球國の都。王が居住する首里城を中心とした街。現在の那覇市首里地区。

※6 池城殿内

首里士族、毛姓池城殿家を指すか。沖縄芝居「逆立ち幽

靈」で亡靈に手助けをする豪胆な侍

は池城里之子という名前で登場し、

この人物が亡靈から恩返しとして權

運を授かつたために後の毛姓池城家

の繁栄がなつた、という筋が語られることがある。

※7 殿内

土族のうち、脇地頭以上

の家柄で士族の中でも格が高い。

御殿よりは下の家柄となる。

「いん〔うん〕。じゃあ、僕が抜いてやろう」言う

ね、この釘はこの人が抜いでやつたらね、まっすぐ歩いてよ。それでもう、(幽靈は元の夫を)追つかけて歩いてね。

それでの昔、あの、お正月なつたら、十六日<sup>※1</sup>言うてあるでしょ。ね、これがこれ、この話さ。十六日に行つて、お墓の前に行つて、この男を仇に取るわけよ。こんな話で、逆立ち幽靈<sup>※2</sup>である。

真嘉比川原ぬ逆立ち幽靈<sup>※3</sup>。

小さいときにおばあさんた一が「おばあさんたちが」話するのを、うち聞いてね、今に覚えていたんでです。逆立ち幽靈<sup>※4</sup>つていうのは、みんな知つてはずよ、もう、年寄りは。

そんでその幽靈がね、「恩返しはどんなするかなあ」とつてね、この池城殿内<sup>〔おとぎや〕</sup>のね、殿んかい助きらつとしえいやー、釘抜じやーに「殿さまに助けられていなんだよね、釘を抜いてもらつて」。

この幽靈の恩返しはね、人のわからん大きな穴の中には、鯉がよ、ものすごく太った鯉がね、七匹、十匹ぐらゐね、住んでいたつて。これ誰がもわからんところね、この幽靈が探してよ、「これをね、あんたにね、恩返しです」言うてね、あげたつて。この鯉のある大きな洞穴の中によ。太つた鯉がよ、七匹、十匹ぐらゐある水穴をね、幽靈があげたつてよ、この人に、恩返し言うて。

そしたら、この人の歩くところはね、提灯だけみ

んな明るくしてね、夜歩くときは、人は見らんけど「人は見えないけど」、提灯だけがみーんな明るくしてね、道は。これがもお供して歩くわけさ、この逆立ち幽靈が。だつたつて。これは恩返しさ、五寸釘<sup>〔ごじゆうぢや〕</sup>がつたるね〔五寸釘を抜いてもらつたね〕、恩返し言ゆうてよ。

※1 十六日 旧暦正月十六日に行われる祖先祭祀の行事。亡くなつた人が初めて迎える正月に親族が墓参りを行ない、死者の供養をする。

※2 下げ足 緊制などで足を地面につけないでたらすこと。  
※3 ハブ 神縛に生息する陸生毒蛇のうちのハブ・ヒメハブ・サキシマハブの三種の総称。毒性は非常に強い。

### ③ 縁から足を下げるわけ

上根ウサ (明治三十一年生) 宮里

〈方言原語〉

人ぬ家歩ちーねー下ぎ足すなよ。下ぎ足しー  
ねー床下からハブにくらりーんどーんでい。下ぎ  
足やすなよ。

「夫の亡<sup>〔おとこ〕</sup>さわ妻<sup>〔めぐみ〕</sup>探めーらぬ、妻ぬ亡<sup>〔おとこ〕</sup>さわ夫持た  
ぬー」でい約束ーさーに。あんさーに、ある人ぬう  
まんかい下ぎ足そーーくとう、

「いえ、私足ーくんだつとーしが、友んちやー、  
外し<sup>〔ほか〕</sup>しー、外し<sup>〔ほか〕</sup>ー」んちやくとう、  
「はー、床下<sup>〔ゆか〕</sup>のみまじむんぬうーん」でいやーい、  
友んちやー逃<sup>〔と</sup>】ぎていちやー、

「はー、とーきえー命けーがー取いんでい、友ん  
ちやーや逃<sup>〔と</sup>】ぎていいちゅさやー」んでいあーい、  
どうーぬ見じやーい、

「ぬーが、いやーうまうる」んでいやくどう、

「なーやすぐ、私なかい頼まり。私つた一家行じ、  
夫ぬ亡ざわ妻ん探めーらん、妻ぬ亡ざわ夫持たん」  
でいやー、夫ー妻探めーやー、私んばかちよーく  
と、私つた一家行じ、なーや符札外ちくーん  
でい。幽靈ぬ妻ぬ。

「いつた一家わからんむん」でいちゃくどう、  
私が連ていいぢやびーは」んでい。とー、門ひぢや  
くどう。

「うまやいびーさ」んでいあーい、頼まつとーる  
人よー内んかい行じやくどう、酒飲いで友んぢやー  
と、寝じやーに。あんさー、うぬ人ぬ符札外ぢやく  
と、魂や取たんてい。

「夫ん持たん、妻ん探めーらん」でいあーに約束ー  
さーに、「男ー妻深めーやーに、私ばかさーに」、あ  
んぢやたんてい。

### 〈共通語訳〉

人の家を訪ねるときは縁側から下げ足をするな  
よ。下げ足をすると、床下から出てくるハブに囁ま  
れるからつて。下げ足はするなよ。

(ある人が)『夫が亡くなつたら妻を探さない、妻  
が亡くなつたら夫は持たない』と約束をして。そう  
して、ある人がそこで下げ足をしていたら、  
「おい、私の足はとらえられてしまつたぞ、友だち  
よ、外して、外して」と言つと、

「うわあ、床下に化け物がいる」といつて、友だち  
は逃げていって、  
「ああ、いざ命を取られるというときに、友だちは  
逃げていくんだねえ」と言つて、自分で(床下を)  
見て、

「なんだつて、おまえはそこにいるんだ」と聞いた  
ら、

「あなた、私の頼みを聞いて。私の家に行つて、『夫  
が亡くなつたら妻は探さない、妻が亡くなつたら夫  
は持たない』といつてたのに、夫は新しい妻を探  
して、私をだましているから、私の家に行つて、あ  
なたは魔除け札を外ってきて」と。幽靈になつた妻  
が。

「おまえの家をしらないのに」と言うと、  
「私が連れていきますよ」と。いざ、門に着くと、

「ここですよ」といつて、頼まれた人が内に入ると、  
(夫は)酒を飲んで友だちと寝ていて。そこで、そ  
の人が魔除け札を外したので、(死んだ妻の靈が夫  
の)魂を取つたんだけ。

「夫も持たない、妻も探さない」と言つて約束はし  
ておいて、(妻が死んだら)男は妻を探して、私を  
だまして、そういうことがあつたつて。



島袋次郎（明治三十四年生）知花

〔方言原話〕

識名真地ぬ墓ぬ庭やまた、じゆりぬ屋やたん

でい、後生ぬじゆりぬ屋。後生ぬじゆりぬ屋ぬくわつ  
ちや紙んでーやー。豆腐んどうやら、紙でーん  
どー。

親ぬちやーまじゅーのーどうしるやんやー、ま

じゆーの一勤みつ。職就ちよーるばーてー。あん

そーるむのー、一人やけー死じやくとう、くぬ生ち

ちょーしがや、くりが娘子、いぬぐどう職就きやー

に。あんしまじゅんんしうりさくどうや。くりが、

「そーしがてー、

「私ねー先うりさしが、私嫡子んまたうぬぐどうつ

し、いやーどうまじゅん歩かち、ありがたいやくどう

や、今日やや、いがたーや二人ぬ者辻ん歩ち、じゆ

りぬ屋ん歩ち、まじゅんんし楽しみんさしが、後生

ぬじゆりぬ屋つし行じえーんーだんぐどうや、今日

やあまんけー私が通ていちゆくどう、まじゅん行

じとうらしえー」んでい、

「はーやー、後生ぬ屋んけー、私ねーうりそーい」

「いやーがうふあすらーどう行ちゆる」んでい、

「あー、私がうふあすさ」んち。

あんさーなかい行じやくどうや、識名真地ぬや、  
墓ぬ庭などーん。行ちーねー本当ぬじゆりぬ屋どー  
やたんでい。しぐ、ホヤダンブちかていよー、くわ  
らないつしなー、しぐ、入つちんじてー。あんさー  
になー、くわつちーぬー出じてい。あざまぬむんでー  
やー、「ちばなー」てー。ちばなーのしらぐちやー  
よー。とー、うんねーるー、むる、豆腐んでー紙どー  
やたんでい。

やたんでい。

うりがよー、なーちゅふあーら遊でい、うまな  
けーけー寝んとーるぐどーん。酒飲まーに、うぬ

人よー。後生ぬ者むるうらんなーるばーてー。

太陽ぐわーぬ上がり今までいさくどうや。「くぬくわつ  
ちーやぬーやがやー」んでいち、側んかい置ちえー

たんでい。あんさーにうんねーるー、あざまぬしる

ぐわやーんーでーぬーんでーんやか、うりなどーた

んでい。

食でいんちやーんねーんくどうや、食みよーん

でい、うぬ、うりが言たんでい。

あざまぬよー、ちばなーぬ若さしや、あれ、かん

し、あかしらー、葉やよー、しるぐちやぐわーぬあ

くどうーー。しるぐちやーんしえー野菜ぬばーどう

やんどー。ちばなーんでいる言えーさに。いつたー

「ちばなー」んでいる言えーさに。『あざみ』んでい

言ーさ。

※1 識名 那須市字名。首里城

の南西に所在。※2 真地 那須市字名。大正五

年に識名から分立。

※3 あざま 植物名。きく科のシマザミの方言名。チバナとも言う。調査時に話者および同席者が、チバナは他の地域での呼び名で知花集落では普通アザマと言うと説明している。

識名真地の墓の庭はまた、遊女屋であつたって、あの世の遊女屋。あの世の遊女屋のごちそうは紙なんだってね。豆腐なんかは、紙なんだというよ。

親同士は一緒にいて友だちであつてね、一緒に勤務していく。公職に就いていたわけだよ。そうして

いたのに、一人は死んでしまって、この生きている人がね、亡くなつた人の長男を親と同じように公職に就けて。そして一緒に仕事をしていたのでね。この人が、亡くなつた人がね、

私は先に死んでしまつたが、私の長男もまた私同様、あんたと一緒に働かせてもらつて、ありがたいのでね、今日はな、われわれ一人（生きているときには）辻にも行つて、遊女屋も行つて、一緒に楽し

みもしたけど、あの世の遊女屋というのは行つたみたことがないからな、今日はあそこへ私が連れていくので、一緒に行つてくれ」と、

「ええ、後生の店に、私が行くのか」「私が考えるからね、行こう」

「あんたがおぶつてくれるなら行く」と。もう、行かない考え方だよね。（亡くなつた友人は）

「おう、私がおぶるよ」と。

そうやつて行つてみると、識名真地のね、墓の庭に着いた。行つたら本当に遊女屋であつたって。ホヤランプをつけてね、煌々として、そのまま、入つて

いつたつて。そうしたら、ごちそうなんかが出できて。あざみのものだつてね、（他の地域の方言で）「ちばなー」だよ。あざみの若くて白いやつね。そう、こんなもの、みんな、豆腐というのも紙であつたそうだ。

その人がね、もう思う存分遊んで、そこに寝てしまつたみたい。酒を飲んで、その人は、あの世の者はみんななくなつてゐるわけだよ。太陽が上がるまで遊んだからね。『このごちそうはなんだろうな』と、側に置いてあつたつて。そしてこの食べ物なんかは、あざみの若い白い葉だとかなんとか、そういうものになつていてたつて。

「食べてもなんでもないからね、食べなさいね」と、あの世の人が言つたつて。

あざみのな、あざみの若いものは、あれ、こうして、引き裂くと、葉はね、白い部分があるからね。白いところがあるのは野菜なんだよ。「ちばなー」と言つただろう。あんたたちは「ちばなー」と言うんだろう。（話者の集落では）『あざみ』と言ふよ。

## ⑤ 石嶺の三叉路に出る幽靈

山内三郎（明治四十一年生）知花

（方言原語）  
石嶺（しのね）から西原（にしづか）んかい行ちゆるとうくるんかい、

※1 石嶺 那須市町名。那須市に接する。

三叉の、うりがあしえー、くんぐとーるさる道、やー。こつちは宜野湾、こつちは西原という。うまんかい『女ぬ幽霊ぬ立ちゆたんどー』つしえーやー。うぬ女一年えー若さてーんてー。あんしがアメリカーんかい強姦さつてい、あんそーしがなー、どうーぬ愛する男ぬうたしがや、うりんかい知りやーに、『なーアメリカーとうでーんてーあんしえーしえー妻えーさん』でいるふーじーさーに。

うまうどーい、うぬ、アメリカー待つちよーたんでいよー。あんさくとう、逃ぎーんでいさーに、アメリカーんかいさつていよー、あんさーにうまうとーい自殺さーに。あんしうぬ後ーうまや『幽靈ぬ立ちゆんどー』つし。

あんさーに、あるタクシードライバーが『ひるまーしーむんやつさー』んち、うまんかいながれ、うてーざさんてー。うぬ交差点んかいうてーぎさしがや、うまうとい待つちよーてーぎさんてー、幽靈出じゅし待つちゆんち。うり見じゅんち待つちよーてーぎしがやー、待つち出じらんなやーに、うまりかー調びてーぎさんてー。櫛ぬ落てーとーたんでー、櫛。女ぬ櫛ぬ。あんさくどう、うぬ櫛落てーたくどうや、男ぬ愛人んかい見したくどう、

【うりがむんやたっさー】ーでーい。あんし、うんにんから、うぬ櫛えー取つてい、どうーぬあれつし。昔えー沖縄ぬ風俗どう、どうーぬ妻えーんち、

どうーぬ元祖廟、元祖どうなーまじゅんありしえーんてー。うんにんから幽霊みーんなとーたんでー。

#### 〈共通語訳〉

石嶺から西原に行くところに、三差路になつてゐるところがあるだろう、こうなつてゐる道ね。こつちは宜野湾、こつちは西原という。そこに『女の幽靈が立つよ』といわれていた。

その女は年は若かつたんだつてよ。だけどアメリカ人に強姦されて、そういうことなんだけど、女には愛する男もいたけどね、そのことを知られてしまって、

「もうアメリカ人とだといつてもそういうことがあつては妻にはしない」というふうになつて。

そこで、その、アメリカ人が待ち伏せしていたんだつてね。それで、逃げようとして、アメリカ人に強姦されてね、それでそこで自殺して。そしてそれからはそこは『幽靈が出るよ』と(うわさになつた)。それで、あるタクシードライバーが『めずらしいこともあるものだ』と、(幽靈を見ようと)そこにいたらしいんだつて。この交差点にいたらしいけどね、そこで待つていてらしいよ、幽靈が出るのを待つといつて。幽靈を見ると待つていてみたいだけね、待つていても現れないでの、そのあたりを調べてみたらしいんだよ。櫛が落ちていたつて、櫛。女

の櫛が。それで、その落ちていた櫛を恋人の男に見せたら、「彼女のものだったなあ」と。それで、そのときから、(恋人の男は)その櫛を取って、自分の家内のこととして処分して。昔は沖縄の風俗として、自分の妻に墓に納めんだってね。そのときから幽霊は現れなくなつたつて。

## [2] 幽霊を見た話

### (1) 後ろ向きの女

島袋次郎(明治三十四年生) 知花

〈方言原話〉

白川ぬ竹下会館かい、うい越ーていぢやーきねー、洞穴ぬ掘らつとーしえーやー。あまぬ前なげよー、前兼久ぬアキラーたーがー、あれー夜明きがたあたる、あまぬガードさーにや、飛行場ぬ。夜明きがたぬうまから来ゆーたんでいよー。若さる女ぬや、後なち、やがていなー夜明きがた、午前一時、二時頃、あつたーやー自転車から来ゆーたんでいよー。うまなかい、どうーちゅい女くいちょーんでいるばー。

「とーひやー、うれーそーむのーあらんくどうてー」、私が言ぢやるばー。

「むぬ言やんよーなー、知らんふーなーつし来ゆーんどー」んでい。

前向かてい來ゆーしえーむぬ言らわんや、後なち人よーちやーんするむのーあらんでい。あんしえーたんでいやさ。

〈共通語訳〉

白川の竹下会館に、それを越えてすぐのところ

に、洞穴が掘られているよね。あっちの前でね、前兼久のアキラたちが、あれは夜明けごろだった、あちらの警備員をしていてね、嘉手納飛行場の。夜明け頃にそこを通って帰ってきたつてね。若い女が

ね、後ろを向いて、もうすぐ夜明けという頃、午前一時、二時頃、アキラたちは自転車で戻ってきたつてね。そこに、一人で女がいたつていうわけ。

「なんだつて、それはこの世の者ではないからね」、私が言つたわけ。

「声をかけないよう、そ知らぬぶりで戻るんだよ」と。

前を向いて来る者には声をかけてもね、後ろを向いている人はなにかするものではないつて。そういうことだつたよ。

※1 白川 沖縄市の字名。米軍嘉手納飛行場の北、飛行場第三ゲート付近から池武道交差点付近一帯に広がつてゐた屋敷集落。

※2 竹下会館 現在の池武道交差点近くにあった民官の式場。結婚式や同窓会などに利用されていた。

※3 前兼久 知花集落の屋号の一つ。飛行場 米軍嘉手納飛行場のこと。

大工 鶴朝真（大正十三年生）吉原

※1 金城 知花集落の屋号の一

つ。

※2 下道 沖縄市美里集落から東

に向かい、仲原屋取集落に至る道。

※3 じゅり墓 沖縄市の美里集落

から東に向かう道沿いにあつた古い

墓。首里から婆として連れられてき

た遊女が死後、葬られたという言い

伝えがある。

※4 星ぐわー 兵士の襟につけら

れている階級章、あるいは軍帽の星

章を指すか。星章は日本帝国陸軍の

マーク。

※5 高江洲 うるま市の市名。

※6 製糖工場 うるま市川田にあ

〈方言原話〉  
 あー、うーしがうーいるはじどー。金城ぬエイちゃん、あの下道ん墓ぬあいびーへーやー。じゅり墓があるから。とー、あまんけー、竹ぬ子てー、うり取りが行じやるばーよー、友軍ぬやいびーんよー、一等兵やたんでー、星ぐわーまでい見ーみんじるむんぬ、うれー。あんすか、あれー、長靴ぐわー、うれーさーになー立つち、  
 「お願ひします」んでいそーるばーやんでー、エイちゃんぬんかい。うぬふーじ立つちよーたんでー。あまや、エイちゃんがやいびーん。

## ④ 死んだ娘の靈

浜比嘉宗次（明治四十三年生）住吉

〈方言原話〉

ああ、（幽靈は）いるにはいると思うよ。金城のエイちゃん、あの下道の墓がありますよね。じゅり墓があるから。ほら、あそこに、竹の子だよ、それを取りに行つたときには、友軍のですよ、一等兵だつたつて、星章まで見えたのに、これは。それで、友軍の靈は、長靴で、そうして立つて、「お願ひします」となさつたんだつて、エイちゃんに。そういう様子で立つていたつて。あつちは、エイちゃんがです。

〈共通語訳〉

亡くなつた人はね、きれいに着物つけて、葬式やるでしょ。これ、一週間になつたら、生ち戻やーはね。これを、こんなことをみた。  
 七時ぐらい。夕方の。それで、うちに夕ごはん取りにくるといつて帰つてくる。これ、見たさ。  
 「あんたは、お父さん、お母さんが、人に見ないでと言うても、あんたは人に見えるから、今から見たらもう、お父さんお母さんから注意して、誰にも見えないようにしてくれ」と言うたら、そのあとからは見えない。

そのときはね、もう二十歳ぐらいで。墓地からすぐ帰ってきてね、これは、はいるよといつて。うちの前を通るもんだから。

言やんたん。

「なー一回見ーね、娘出すんどー」んでい。

「親んかい言ゆんどー」んでい。

立つちよーちゅてー、はつきり見ーしぇー。見ー

しぇー見ーしが、うれー（見えるのは見えるけど、これは）。（それを言つてからは）見ーらんたん、絶対。あんすくどう、わーが二十歳ぐらいやくどう。ありが、二十二か三歳ぐらい。

ない。

そのときはね、（話者が）二十歳ぐらいで。墓地からすぐ帰ってきてね、娘の幽霊は、家に入るよといつて。うちの前を通るもんだから。

（娘の親には娘の靈のことは）言わなかつた。

「もう一回姿を見たら、報告するよ」と。

「親に言うぞ」と（脅した）。

立つていて、はつきり見えるんだよ。見えるのは見えるけど、これは。（父母をひきあいに諫めてからは）姿を見ることがなかつた。絶対に。私が二十歳ぐらいだから、彼女が、二十二か三歳ぐらい。

### 〔共通語訳〕

亡くなつた人はね、きれいに着物をつけて、葬式やるでしょ。これが、一週間経つたら、幽霊になつて戻つてきた人がいてね。これを、こんなことをみた。

七時ぐらい。夕方の。それで、うちに夕ごはん取りにくるといって（亡くなつた娘の靈が）帰つてくる。これを見たよ。（話者は娘の靈に話しかけて）「あんたは、お父さん、お母さんが、幽霊の姿で人に見られないと言つても、あんたは人に見える姿で来るから、今から見かけたらもう、お父さん、お母さんから注意してもらうから、誰にも見られないようにしてくれ」と言つたら、そのあとからは現れ

### 〔方言原語〕

占翌宗信（大正五年生）安慶田

ユタが来て、御願うさぎていうばーやー。御願うさぎていうーと、ぬんりが、御香火よ、ぱちぱちつし、だていん飛ぶたんで、ぱちぱちつし。ぱちぱちぱちつち、むる飛ぶたんで。花火みたいぱちぱちーして、ユターちゃん御香うさぎーしぇー、しーいつべーなー。あんひ、ぱちぱちぱち一つし、飛んだらしいよ。家族が病氣して、御願うさぎたら、飛んだらしい。そしたらユタがね、「どーどー、来よーるむん、白びつち、まつ白い色をしたね、若い妊娠した女がね、来ている」と。

### ⑤ 身こもつた女の靈

「取り替へらつと一さー」と、取り替えられてい  
るんだよと、ユタ言いよつたそうですよ。若い、  
二十歳ぐらゐの女ぬや、身持ち一やしがや、うへー、  
すこし肥えたひと、うすぶつちび一ぐわーと、  
「うりが来よーさー、替へらつと一さー」と言つよつ  
たらしい。

そしたら昔はね、わたしたちの部落では、人が死ん  
だら、撃ち鐘言うてね、持つてあるく鐘、むるぐわ  
んぐわんぐわんぐわんして、村中出て全部葬式し  
よつたんですよ。で、ぐわんぐわんぐわん、鐘を、  
道で鳴つたもんだから、

「なー、今日誰が死じよーが、誰が亡さが」と言つ  
たらね、二十歳ぐらゐのね、女がよ、妊娠している  
人が、死んでたらしい。それがこのユタが見ていた  
らしいよ。御願うさぎていうていや、んまぬ家御  
願うさぎていいよ、御香ばしばばちーしたんでい  
よ。

「来よーさ、來よーさ、來よーさ。肝苦しーむんやつ  
さーやー、くれー身持ち一やしがやー、今、歳えー  
二十歳ぐらゐないはじやしがやー、身持ち一や  
しがやー、ぬーん言ちよーいびーが、聞ぢやぐどう  
や、白ぐつちみーぐわーがや、うすべーぐわーそー  
しが、女ぬ、若い女ぐわーがやしが、くれー替へらつ  
と一さー」と言つたらしい。明日ね、この、撞  
ち鐘ごんごん打ちよーていや、もう部落の人全部出

るわけさ、葬式全部出るから、田舎では。誰が死ん  
だかと聞いたら、妊娠している若い女が亡くなつた  
らしいと。

#### （共通語訳）

ユタが来て、祈祷を上げているわけだよね。祈祷  
をあげていたら、なんていうか、線香の火だよ、ば  
ちばちして、とても飛んだつて、ばちばちと。ばち  
ばちばちといつて、みんな飛び散つたつて。花火み  
たいにばちばちと、ユタはどれだけでも線香を捧げ  
るからね、あるぶんだけ。それで、ばちばちばちーつ  
と、飛んだらしいよ。家族が病氣して、祈祷したら、  
線香から火花が飛んだらしい。そしたらユタがね、  
「ほらほら、来ているのに、白い色をして、まつ白  
い色をしたね、若い妊娠した女がね、来ている」と。  
「取り替えられているよ」と、取り替えられている  
んだよと、ユタが言つたそうですよ。若い、二十歳  
ぐらゐの女のね、妊娠だけどね、ちょっと、すこし  
肥えた人、うすすらふくよかな人と、

「この女の靈が来ているよ、病氣の人と取り替えら  
れているよ」と言つたらしい。

そしたら昔はね、わたしたちの部落では、人が死  
んだら、撞き鐘と言つてね、持つてあるく鐘を、思  
いきりがんがんがんがん鳴らして、村中が出て全員  
で葬式しようつたんですね。で、がんがんがん、鐘

※1 撃ち鐘 手持ちの銅鑼か鍾を指すか。戦前は、死亡した者が出る  
とすぐに集落の区長などに伝え、法  
螺や太鼓、鐘など大きな音の出る鳴  
りものを鳴らして、死者が出たこと  
を集落中に通知した。

が、道で鳴ったもんだから、

「もう、今日は誰が死んだか、誰が亡くなつたか」と言つたらね、二十歳ぐらいのね、女がよ、妊娠している人が、死んでいたらしい。それをこのユタが見ていたらしいよ。祈祷をしていてね、その家の祈祷をしてね、線香がぱちぱちぱちとはじけたつてよ。

「来てるよ、来てるよ、来てるよ。心痛いものだね、この人は妊娠しているけどね、今、歳は二十歳ぐらいいになるだろうけどね、妊婦だけどね、なにを言っていますか、と聞いたらね、白い見た目でね、薄く透けた人が、女が、若い女だけど、この人と替えられているよ」と言つたらしい。次の日ね、この、撞き鐘をごんごん打つてね、もう部落の人みんな出るわけだよ、葬式にみんな出るから、田舎では。誰が死んだかと聞いたら、妊娠している若い女が亡くなつたらしいと。

#### (6) 竹やぶに消えた首

山城照代（大正四年生）室川

子どもが死んでですね。三つぐらいなる子が死んで。あのとき、うちは十歳、十一か。その子が、葬式の夜ですよ。昔は、「ふーる」（豚小屋）言うであつたんですね、そこに、便所に行きたいうから、この子（死んだ子とは別の子ども）を連れて、お母

さんが。昔は玉ランブぐわー持つて、便所に連れて

いつならぬ、馬の屋（馬小屋）のうしろから、出てくるんですよ。この、死んだ子がよ。足は見えないんですね。ただ首だけ。瘦せて、死んだ面影で

こんなして歩いてる。「ふーる」の上から、「豚小屋の上を」。馬ぬ屋ぬちび（馬小屋のはじ）から出て、

そんで、「わーふる」（豚小屋）つてあるから、こつから歩いてね、死んだ子がよ。あれはもう、全部見たんですよ。んで、竹やぶのところまで、みんなランプやらなんやら持ってきてね、提灯持ってきて、したら、竹やぶの中行つたら、もういなくなつてた。

#### (7) 自殺した同僚の靈

稻嶺盛英（明治四十三年生）山里

（ある人がその部屋で自殺して亡くなつたあとに、話者がその部屋を借りたあとのこと）すぐ、頭をこんなかんじする。もう、ほとんど毎晩というほど夢を見るもんだから、ここは、気持ち悪いなあと思つて。そつから私、もう出てね。仕事よそに変わつてね。そのあとから、大島（大島）の人がね、散髪屋借りてね、散髪営業やっておつたさ。そういう、そこで死んだということは知らないで店を借りてね、店をやつていた。ある日に、散髪の奥さんがタオルを洗つてね、二階に干しに行つて、わしが寝ていたそこの

※1 ふーる 便所。沖縄在来の便

所は石廻いをして中に豚を飼う様式で、人間の排泄物を豚の飼料として利用する。

※2 玉ランブぐわー 未詳。ガラスを用いたランブ、ホヤランブのこと。

※3 大島 奄美大島のこと。沖縄島の北東に連なる奄美群島の主となる島。

部屋に入つて、その物干し、そこにタオル洗つて、干しに来て、子どもも上がつてきてね、お母さん先に下りていったもんだから、子どもが急にね、「お母さん、ここに知らんおじさんがおるよ」言うてね、押し入れにさ、「知らんおじさんが立つてゐるよ」言うて。下に行つて、どこに行つたとお母さんが開けてきて。

「そこに立つていたよ」と。子どもには魂が見えるものという。昔の人はね、昔の人が子どもには、まぶやー〔魂〕とか幻とか、ああいうの見えるらしいですね。私は見たことないんだけど。で、そのあとからそういうことがあつたよと言つて話しそうたんだがね。その人もあとは店やめてね。

それで、今度は、この死んだ人の友だち、この人は首里の人だがね、私もまたこの人にはいつも厄介なつておつたからね、同じ散髪屋の職人でね。そこ人が、死んだ断髪屋〔だばつや〕、「理容室」、店借りてね、「んーんー、わんねー友ぬぢやーやくどう、ちゃーんねーん〔ううん、私は亡くなつた人とは友人だったから、どうもない〕」と思つてね、店借りて、この人がやつておつたさ。この人も魂、まぶやーとか幽霊とか見えないんだがね。ぼくみたいに「長嶺さん、長嶺さん」言うてね、いつも起こしてね、夢見る。夢で起されつてね。

んでい思ひしがよー〔さあ、ここではむりだよ、盛英。やつぱりこの借家を出ようと思うけどね〕、夢でね、起こされて、もう寝られんからね」、その人もそこをやめたんだが。だから、そういう。魂が残つておるから。やつぱし、靈感というのがね、やつぱし残つておつたかもね。

⑧ 救えないと教える靈

〈方言原話〉

平田ウト（明治三十二年生）松本後生んかい魂ぬ行けーからー、道んかんかいとう笑ていんかい、人んかんかいしえー、教らんでい。うつちんちよーしえー救らりーんでい。うつちんちよーしえーよー、魂ぬ墓んかい行じよーしん、ユタぬそーいんちる、うま。ユタぬ話くどう。笑てい向かいんでい、人んかい。ぬー、うれーやー、ユタぬ見じゆるんでーむのー、わかいんなやー。

（共通語訳）

あの世に魂が行つたら、道にこう向かつて笑つたり、人に向かつて（笑つたり）するのは、救えないって。うつむいている者は救えるつて。うつむいている者はね、魂が墓に行つているものも、ユタが連れてくれるつて、そこに。ユタの話だから。笑つて向かつてくるつて、人に。なに、これは、ユタが見るとい

うものだから、私にわかるものかね。

〔共通語訳〕

〔3〕 音であらわれる幽靈

① 赤道の法螺の音

川上亀（明治二十九年生）美里

〈方言原話〉

「私つたまじ、ずっと、まじむんぬ話るびかー、  
話びかー聞ちえーんーだんしがやー。  
私つたーが捕てていうそーろー、夜集まつて、か  
ん泊まいたしが、あるまーがなぬあさぎ家に。く  
ぬ『赤道法螺ぐわー』んでいち、くまなかい赤道ん  
でいる部落ぬあしがや、うまぬ前ぬ田ぶくぬ多くあ  
しがよー、うぬへんうてい法螺ぬぶ一つし鳴ひが  
やー、夜中しりないねー、うり鳴いしえー聞かりー  
たっさー。うり、法螺ぐわーんでい言たつさがやー、  
うれー本当あたっさー。うれー聞かりーたんどー。  
見くーあていてい聞ちんでいわるやつきー」んでい  
ち行ちゆる人ぬんやー、くまんけー行ちーねーあま  
んじ鳴ゆいや、あまんかい行ちーねーくまんじ鳴  
てい、むるさとうやーていゆーはんたんでい。あん  
鳴いしえー鳴いたんだー。うれーちゃんとうくぬ、  
くまうていあさぎ家に、くまぬあさぎに泊まいたし  
がや、聞かりーたん、あんし、ふーすし。約なー、  
二時、三時まんぐら。

私たちはずつと、化け物の話だけ、話だけ  
しか聞いたことがないけどね。

私たち（友だち）が捕つてているとき、夜集まつて、  
こう泊まっていたけどね、あるどこだかの離れに。  
この『赤道法螺ぐわー』といつて、ここに赤道とい  
う部落があるがね、その前に田んぼがたくさんあ  
るんだが、そのへんで法螺がぼうと鳴るのがな、夜  
中過ぎになると、それが鳴るのが聞こえたよ。これ  
を（赤道）法螺ぐわーと言つていただけどね、これは

本当にあつたよ。これは聞こえたんだよ。  
「音の出所を探し当て聞いてみよう」と行つた人  
もね、ここに行つたらむこうで鳴るしね、あちらに  
行けばこっちで鳴るし、まつたく探し当てることが  
できなかつたつて。ああして鳴るのは鳴つてたよ。  
これはちゃんとこの、部落の離れ家で、こっちの離  
れに泊まつてたけどね、聞こえたんだ、ああして、

使うことができる。集落でなにか起  
きたときの報知用具の一つとして利  
用された。

② 赤道の法螺の音

平亀（明治二十八年生）美里

〈方言原話〉

「あれー赤道法螺ぐわー。あれー、今一むる鳴ら  
うれー赤道法螺ぐわー。あれー、今一むる鳴ら

率1 あさぎ家 離れ座敷のこと。  
母屋の一番座と軒で接続されている  
ことが多い。

率2 赤道 うるま市赤道付近の集  
落名。沖縄市明道に隣接。

※3 法螺 法螺貝のこと。大きな  
巻貝で、加工して吹奏楽器として用  
いられることがある。

卷貝で、加工して吹奏楽器として用  
いられることがある。

んなと一つさー。へーくどうんやれー、夜入れー、  
タ飯食でいからあとー、歩ちや一步ちや一つしいつ

ペー鳴らすたん。誰がん聞ちよーるんやー。

うれーゆーさねー遺骨取つていんじよーる人ぬあ

ん。うれー、わらばーが法螺法螺いられさーに、わら

ばーそーるえーだー。うり吹ちなれーしぐそーてー

やーんち話やあしがや、今一むる鳴いる音んねー

んどー。これは遺骨遺骨しーていーちゅけー一つはつ

ちえーらやー、島尻島尻んかい。うぬ島尻島尻ぬ話ぬあてー

くどう。ゆーさねー、あれー島尻島尻んかい行じよーる

はじどー。  
くままでいちやーき聞かりーてーるむんぬ、夜な

れー。

#### 〔共通語訳〕

これは赤道法螺法螺ぐわー。あれは、今はまつたく鳴  
らなくなつていてるねえ。以前であれば、夜になる  
と、夕飯を食べたあとは、歩きながらとても鳴つて  
いた。誰でも聞いたよね。

これはひよつとしたら遺骨遺骨を取つていった人がい  
る。これは、子どもが法螺に熱中して、子どもの頃  
に、法螺をいつも吹いていたんだろうなあという話  
はあるけどね、今はまったく鳴る音も聞こえない  
よ。これは遺骨遺骨といつしょに持つていかれたんだろ  
うね、島尻に。その島尻の話があつたから。もしか

したら、あれは島尻に行つてゐるんだと思うよ。  
そう、ここまでいつも聞こえていたのに、夜にな  
ると。

#### ③ 赤道の法螺の音

金城五郎（明治三十五年生）松本

#### 〔方言原話〕

北からや、かん東東んかいかんし回て、くぬひん  
までいや、わつたーが十一、三ぬ頃頃までー、夜や  
入つちちゆーしーねーよー、ぶーぶーぶーぶー  
しょー、じこー清ら吹ちぐわーすたんよー。『まー  
やがやー』んち行ちゅら、また、きつさ回ちよーる  
ばー、うり切つちねーんなどーしえー。

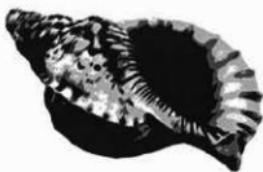
うれなー嘘嘘むにーあらんさ。清ら吹ちやんよー。  
本当よー。

兼箇段がやらわからん。  
うれなー昔事昔事、うり本当。私ねー覚覚とーる。

#### 〔共通語訳〕

北からね、こう東にこう回つて、このへんまでね、  
うちらが十二、三歳の頃までは、夜がふけていつた  
らね、ぼうぼうぼうぼうとね、とてもきれいな音で  
鳴つていたんだよ。『どこかねえ』と行つたら、また、  
さつき回つているわけ、それが途切れなくなつて  
いるんだよね。

※1 兼箇段 うるま市の字名。  
稚市池原に隣接。



これは嘘つばちじやないよ。きれいな音だった

よ。本当だよ。

(鳴っていたのは) 兼葭殿だかわからない。

これは昔のこと、これは本当。私は覚えている。

## [4] 遺念火

### ① 譲名坂の遺念火

国吉キヨ（大正元年生）中の町

（方言原話）

あれんよー、識名坂ぬ遺念火言うてね、識名坂といふわけ、あのへん、昔、識名坂。識名んかい上いる橋なやーに、識名坂ぬ遺念火言うて、夫婦ぬ火が出来よった、毎晩。昔は一日もかけないでね、もう夕方すぐ、日が暮れたらすぐ「ちぬ火が出てね、必ずこの橋から、遺念火や。あれ昔、いつべーな一円満に暮らちよーる夫婦ぬうたんでい、識名ぬ村んかい。なー毎日、あまから豆腐売ひがてー、首里ぬ市んかいてー、首里市んかい賣いが行ちゅたしがやー。清らかーぎー女なやーに、侍がうぬ橋んかい待つちょーていやー、うぬ女望でいよ。望んで、自由ならんだくどう殺ちえーるばーてー、うぬ橋うてい。あんすどう、『今でいーん來ーん、來ーん』つし、夫ー待ちかんていーさーに、火ぐわーちきて迎いがくるばー、うまー橋ま

### （共通語訳）

あれにね、識名坂の遺念火と言つてね、識名坂といふわけ、あのへん、昔は、識名坂。識名に上の橋で、

で、毎日橋までうぬおとう、迎いに来よつたつて。殺さる前から。毎日もう、夫婦は売つて、帰りは必ずおとう待つち、すたしが。ある晩に、うぬ、あぬ女ー殺さついてーなー、侍に。あんさー殺さつとーし、うまが來やくどうなー、殺さつとーし、えーやー。見じやーになー、すぐ、うぬ夫もこつちで死んだわけさーなー、ねえ。

あんさーにもう、毎日うぬあとうからーや、夕飯時分ないねー、日が暮れたらすぐ、すぐ二つの火が出てね、必ずこの橋からあの、ずーっと前にこう、行つたり来たりしよつたつて。だー、ここのが金城町にうちのおばがいたからよ、言いよつたさー、

「あい、また、あね、もう晩がたいくどうやー、また火が二ち出じーんどー」して言うのを。もう、みんなに見られての、毎日。火が二つ、ずーっと上つたり。また、時間が終わつたらまたなくなりよつたつて。早い時間にさー、すぐ。うんぐどうやたんでい。あの橋ぐわーは有名なつてるよ、あれば。

※1 譲名坂　那覇市首里金城町の金城橋から紫田川に通じる急坂。  
※2 遺念火　無念の死を遂げた誰が火の玉として現れるときされるもの。  
※3 首里ぬ市　首里で開かれている市場。現在の首里池端町で開設されていた町端市を指すか。  
※4 金城町　那覇市の町名。首里城南西斜面に位置する。



譲名坂から金城町を望む

識名坂の遺念火といつて、夫婦の火が出た、毎晩。

昔は一日も欠かさないでね、もう夕方すぐ、日が暮れたらすぐ二つの火が出てね、必ずこの橋から、遺念火は。

あれは昔、たいへん円満に暮らしている夫婦がいたそうだ、識名の村に。毎日、識名から豆腐を売りにだよ、首里の市場にだよ、首里市に売りに行って

いたんだけどね。きれいな女だったんで、侍がその橋に待つていてね、その女を手に入れようと望んでね。望んで（いたが）、自由にできなかつたので殺してしまつたわけだよ、その橋で。そしたら、「今になつても帰つてこない、帰つてこない」と、夫は待ちかねて、火をともして迎えに行くわけ、そこの橋まで。毎日橋までその夫は迎えに来ていたつて。

殺される前から。毎日もう、夫婦は豆腐を売つて、帰りは必ず夫が待つて、そうしていたらしいけど。ある晩に、その女は殺されたんだってよ、侍に。そして殺されているのを、夫が橋に来てみたら、殺されているんだよね。見てもう、すぐ、その夫もつちで死んだわけだよ。

それでも、毎日そのあとからはね、夕飯どきになつたら、日が暮れたらすぐには、すぐ二つの火が出てね、必ずこの橋からずつと前にこう、行つたり来たりしたつて。ほら、こここの金城町に私のおばがいたからね、おばは言つたよ、

「おや、また、ほら、もう晩になつてきたからね、

火が二つ出るよ」と言うのを。もう、みんなに見られているよ、毎日。火が二つ、ずつと上がつたりして。また、時間が終わつたらまたなくなつたつて。

早い時間にね、すぐ。そういうことがあつたって。あの橋は有名になつているよ、あれは。

小さい橋が今もあるんだよね、そう、あれだよ。識名坂の遺念火つてね。昔、そういうことがあつたんだつてよ。

## ② 識名坂の遺念火

高江洲昌保（大正二年生）センター

あれは識名の遺念火といつて。あれは寅演かもしらんがね。若い連中が、夫婦関係してやつてるんですよ。そして女の、奥さんのほうは、首里の市に豆腐を売りに。また男のほうは山に薪を取りに。そして夜になつても（妻の）帰りが遅いもんだから、（夫は）今度、松明を着けて、識名橋といつてあるんですよ。今の識名園のト側の川が通つているの、そつちに橋がある。その橋を通りかかるわけさ。侍や待ち伏せしているからね。その人は、男のほうは殺されてるよ。それを殺さんと、その女は（侍が自分のものに）できないからね。そして殺してしまつたもんだから、また女のほうがもう、やつてくるでしょ。やつてきたら、見つけてしまうさ、その、殺さ

案1 實演 おそらく実話を再現し

た芝居の意。

案2 識名橋 那覇市首里金城町の金城橋のことか。

案3 識名園 那覇市真地にある庭園 琉球王家の別邸で、冊封使の歟待などにも使われていた。国の特別名勝に指定。

れてるの。そしてそこに、一人とも死んでしまつてよ。二人とも、もう。男が先に殺されているからな、自分(女)は自書するわけさ。侍に横取りされるより、自分で死んだほうがいいといって。そして遺念火になつて、侍を今度(呪い殺して)やるわけさ。

幽霊になつてね。

ま、それも実話かも、実話、昔の。

### ③ 講名坂の遺念火

知念真章(明治四十二年生) 胡屋

首里の近くじゃないかなあ。それは、仲のいい夫婦がな、豆腐売りにしてよ、いや、豆腐作りやつて。女は豆腐売りに行つてよ。男はいつもその迎えに行きよつたそうだ。その(途中で)、侍によ、その男、切られたんだ。それから遺念火といつて。女が男を探すのに松明をつけて。識名坂の遺念火、あれ、有名よ、識名坂の遺念火。

昔は、なにさ、百姓なんか、もう草、畜生みたよう、草みたよう、(侍たちは)すぐ切りよつたさ。あれは有名よ。識名坂の遺念火は、芝居もあるよ。

### ④ 久高祝女の遺念火

島袋直榮(明治四十一年生) 知花

〔方言原話〕  
御城んかいてー。遺念火ぬ、久高祝女の遺念火

ぬ、ちやー行ちゅたんでいどー。桑江ぬ前ぬ桑江坂

うてい、しぐよー、十五夜に見らりーたんでいん

どー。遺念火ぬ、久高から、首里城んかい。久高

祝女ぬ。

※1 沖縄 王城である首里城のこ

と。※2 久高祝女 知念半島東方沖に

位置する久高島の女性の神職。この

語りは「尚徳王の蒲葵扇の歌」(沖

縄市伝承をたずねて 広域伝説編

### 〈共通語訳〉

この首里城には遺念火が、久高祝女の遺念火が、いつも通つたそだよ。桑江の前の桑江坂で、ほんとに、十五夜に見ることができたそだよ。遺念火が、久高から首里城に(むかうのが見えた)、久高祝女の。

### ⑤ 伊江島から伊平屋へ向かう遺念火

上間清英(大正六年生) 胡屋

遺念火の話や、先生お話しなりましたが、これもですね、実際私は見たんですよ。小さいとき、部落者は本部町貝志堅の出身。貝志堅集落は北側に海が開けた立地で、集落後背の山地からは伊江島、北に伊是名と伊平屋の兩島を見渡せる。

※3 桑江坂 現在の北谷町桑江を結ぶ県道二四号線の一部に接続する。

※4 桑江坂 謝薈にあつたジャーナルビラと呼ばれた急坂を指す。沖縄市山内と北谷町桑江を結ぶ県道二四号線の一部に接続する。

※5 部落のですね、うしろ側 話者は本部町貝志堅の出身。貝志堅集落は北側に海が開けた立地で、集落後背の山地からは伊江島、北に伊是名と伊平屋の兩島を見渡せる。

※6 伊江島 沖縄島北側、本部半島の西北約五キロメートルにある島。

※7 伊平屋 沖縄島北側、本部半島の北約三〇キロメートルにある島。近接する伊是名島とあわせて伊平屋と呼ぶことがある。

ですね、火が、海のほうに火がつくんですよ。しばらくするとまた消えるんですよ。それを実際に見て、これがマカテーの遺念火だということと言つてい

たんですがね。<sup>伊江島の傳説</sup>仲村渠マカニーという人が、なにか

こう、恋人に裏切られたなんとかいうふうなことで、この人が死んで、その遺念火が上がるんだといふ話をしておりましたですね。

伊江島から、伊江島の備瀬崎側のほうから、向こ

うに、伊平屋なんですよ。こっちに、ちょっととこう離れたところですね、点々とこう、つきよつたですよ。これが遺念火だと言つておったんですよ、実際かどうか、私、小さいときにですね。まあ、船であつたかどうかわからんが、これを遺念火といつてみんな信じておつたわけです。

## ⑥ 伊江島の遺念火

瑞慶山良明（明治四十二年生）室川

二十五歳ぐらいのときですね。伊江島ハンドー

ぐわーの遺念火と言うんですよ。海の上で、字根路銘<sup>ヨウロメイ</sup>というところから上原行くときですね、

この道を登るときに、晚<sup>タ</sup>たいがい七時頃だったかな、八時頃だったかな。

この遺念火<sup>イニシヤ</sup>というのは、国頭<sup>クニツチ</sup>のほうから、上がるときはわからん。火が来るんですよ、海の、

らひとつ来てですね、古宇利島<sup>コウスリマ</sup>の約百メーター右ぐらいで一緒にになって、こっちで消えよつたですよ。

二つ。この海の真ん中で会つてから消えるわけで

す。うちが見たわけです。

これはもう、うち一人がでない、他の人たくさん見ておる人はいる。見ておる人はたくさんいるが、もう、うちが見ただけでしか話ができないからね。

## ⑦ 仲順坂の遺念火

比嘉永昌（大正七年生）山内

仲順坂<sup>ヨウシンザカ</sup>。井戸があつたんですよ。実際見てきたんだがね。そこで昔ね、若い美人が髪を洗いよつたそ

うだね。これ、人から聞いた話だから、あの、ほんとの話かわからんよ。髪洗いよつたって。で、悪い

男が来て、うしろから抱いてしもうたらしいつてね。尻立つちゅー「尻を突き上げた恰好で、たと

えば、こんなしてさ。井戸水は低いもんだから、洗いよつたらしいつて。で、うしろから気ちがいみた

いなきて、うしろから抱いてしまつたつて。それでその女が、「もう、自分はこんなされてね」、強姦

だつたんだろうな、生きているより死んだほうがいいつて、井戸に飛びこんで死んだらしいつて。自殺。

で、その女が、そういうふうに迷つてから、火の玉になつて行つたり来たり、右往左往しておるとい

う。ちょっとそういう話を聞いたことある。遺念火ね。

表1 仲村渠マカニー 伊江島に

いたという美女。祖母「牛仲渠真」の主人が、伊平屋の美男湯男

子西の松金に恋して伊平屋島に渡り、伊江島に身を寄せ、思案する仲となるが、真鶴戸に臥せつてはいる。

嘉戸<sup>カト</sup>は伊江島に帰る。

表2 備瀬崎<sup>ビセザキ</sup> 伊江島北部、本部

半島の北西に突出する崎。

表3 伊江島ハンドーくわー 真

鏡芝居<sup>ヨウジヨウ</sup>「伊江島ハンドー小」の主人公

公<sup>ハム</sup>、辻士<sup>ハタシ</sup>の音ハンドーは源仲<sup>ヨウジ</sup>が

した伊江島の昔<sup>ハタシ</sup>を助け、恋愛仲<sup>ヨウジ</sup>になるが、加那<sup>カナ</sup>には妻があり、ハハハンドー<sup>ハハハンドー</sup>は加那を追つて伊江島に渡る。

が冷たくあしらわれ、絶望して亡が現れて死ぬ。

那を病死する。やがて亡が現れて死ぬ。

表4 標路銘<sup>ヨウロメイ</sup> 上原 大宜味村の字名。

一九四六年、標路銘の一部が分立してできた字。

表5 国頭<sup>クニツチ</sup> 沖縄島全体を指す語として使われるが、ここでは國頭村を指している。

表6 古宇利島<sup>コウスリマ</sup> 沖縄島北部、本部半島の北東端二キロメートル海上に位置する島。

表7 仲順坂<sup>ヨウシンザカ</sup> 北中城村仲順にあ

る坂を指す。仲順集落は段丘の半ばにあり、段丘下の渡口集落との間の道は長大坂となつていた。

表8 人に対し差別的に用いられることがある語であるが、本報告書における性質を重視して、発話のまま掲載した。ただし本報告書へのこの語を使用する行為に対するなんらかの肯定

(8) 热田の遺念火

儀保ヨシ子（大正三年生）比屋根

※1 热田の上から、遺念火というのがあつたよ、夕方。  
热田の上の、あの小さい道からね。どこまで行くか  
わからん。遺念火。現在見たらね、ないですよ。やつ  
ばし、みんなが明るいから、見えないかもしない。  
男と女さーねー。これが会いに行つて、毎晩  
毎夜、こうして連れていつたり、連れてきたり。こ  
うする火だと言つていた。热田のこの、『しるび  
ぐわー』というの、道に、恋の忍びでね、連れていつ  
たり、連れてきたりして。

(9) 真謝の遺念火

上原ツル（大正七年生）東桃原

※2 久米島の真謝部落に、染み屋という着物を作る  
ところ、染めるところ。あつちの会社があるから。  
阿嘉部落というところから、真謝部落にきて、これ、  
染めるさーねー。染めて、また夜になつたらかいて  
いくさ。

女人の人が、まあ、どこだつたかな。大和から。男  
の人は大和から来て、道中さねー、阿嘉部落とい  
うところは、離れているさーねー。あつちを、今は道  
が清らくて「整備されていて」あれだけど、昔はも  
う、こんなほーやーほーやーして「違うようによ  
く」行く道だつた。あんて、あつち行つたら、あの

大和から来ている男の子が強姦して、捕まえて強姦  
して。こつちに死んでいた。あんし、あれ探した。  
※3 灰火（たいまつ）つけてくるさーねー。で、部落の  
人がみんないて、灰火つけてくるから、あの火が、  
すぐ、あつちから走つてくるわけよ。こつちばつ  
とみて、下落ちたらまたまた、「あ、こつちに落ちよつたよー」つて、こつちみる  
うちよ、またさー、あつちからまた、この火が走つ  
てくるわけ。こんなにしよつた。

(10) 遺念火

屋宣盛助（大正元年生）嘉間良

遺念火だつたつて。どつかの戻りにね、真つ黒い  
夜だけどね。前見たら、なにか行くのが見えたつて  
ね。よく急いでいつたらね、その火が絶対、あの、  
同じ間隔でね、追いつからなかつたと言つたよ。

(11) 遺念火

龜島忠賀（明治三十五年生）室川

毎晩、それもね、遺念火と言つてね、わかるで  
しょ。そういうの毎晩見たです。毎晩七時頃。（今  
は見ることは）ないです。見たことない。きじむ  
なーももうないです、いつべんもない。

※1 热田 北中城村の字名。村の

南東部にあり、南は中城村に接す  
る。

※2 するびぐわー 北中城村然田

の上原にあつた丘。仲順に行く道沿  
いにあつた。「北中城村の民話」に  
は、熱田のカナーという美女と大城  
集落の美男子が恋仲になるが、親に  
許されず二人とも恋に病んで死に、  
遺念火がシルビグワーの付近に出る  
ようになつたという語りが掲載され  
ている。

※3 久米島 那覇市の西方約

100キロメートルにある島。

※4 真謝 久米島町の字名。久米

島袖の染色を行う染屋が設置されて  
いた。

※5 阿嘉 久米島町の字名。久米

島北東部に所在。

玉城シズ（明治三十八年生）久保田

どんなときうか、必ず夏なつたらよ。夏に必ず  
あつた。夏に、

「でいか〔さあ〕、遺念火見に行こう」言つてから、  
友だちとか、またおばさんたちとか、丘にいつて、

よく見えよつた。ふた一つ、こんなして、あつちか  
らもこつちからも来る。ふた一つ上がって、また、

行くのはよくわかる。これだけ覚えていて。でーーー  
だいたい」七、八月くらいやないかな。

遺念火はね、遺念火いうのは見た。あれ、八月なつ  
たら、姉さんたち、またおばさんたちと、

「でいか、また遺念火見じーが行かー〔さあ、また  
遺念火を見に行こう〕」言うてから、方言でよく言  
いよつたから。私はよく行つてたよ。こんなして、

こつちから来るでしよう、両方から、すぐ、合わつ  
てからまた離れていく。

生きた人間といぬむん〔同じ〕、いつたんいちや  
ていから、分かりるの、あれ、知らんなー〔ひつた  
んぬ、いちやんだ〕話聞く、これ。『遺  
念火』また、夫婦、また思やーぐわーさーていけーさ

この人と、男といぢやいでから、離りていとか〔男  
と出会つてから、離れてとか〕。これはむるおば  
さんぬ、いちやんだ〔ただ〕話聞く、これ。『遺  
念火』また、夫婦、また思やーぐわーさーていけーさ

りーん〔遺念火はまた、夫婦、また思い合う同士が  
触れあつてもどに戻る〕」いう言葉が。

これ、おばあちゃんたちから聞いた話。遺念火、  
あり、またあの、

「二人いぢやいが来ゆーさー〔二人出会いに来る  
よ〕」言つてから。

（現代では）これが全然ないね。

## 四 予兆

### ① 上江洲のたまがい

上江洲マカト（明治三十八年生）比屋根

〈方言原語〉

ぬーが、上江洲んあんやたんどー。八月よーか  
びーんち、十一日。十一日でいやらやー、よーか  
びーや。うにーによー、かーま集落ぬ前んかい登やー  
に、なー、うほーくなー集までい、青年ーぬんむる  
集まやーに、あんし見じゅたしがよー。『たまがい  
火見じゅん』でいか、そーしが、出じらんばーんあ  
たんよー。

ちょーどう、村からかんし東んかいやるばー  
てー。上江洲ほんた、あまやしがよー、ちゃー登  
てー。

ちゅまーろー、仲田ぬ獅子置ちゅぬとうくま

表1 上江洲 うるま市の字名。

表2 よーかびー 沖縄島に広く分  
布する習わし。旧暦八月八日から  
十一日前後、不吉を知らせる火の玉  
(タマガイ) が上がるとき、集落  
に出で人々を見守る。

表3 集落ぬ前 上江洲パンタを指  
すか。上江洲集落は南側が急な傾斜  
地になっており、傾斜地の縁辺上部  
には上江洲パンタと呼ばれる松林の  
丘があつた。

表4 たまがい火 夜、丸い光の玉  
が上がる怪異。タマガイがあがつた  
場所は近日に火事や病などの災厄が  
起きるとされ、恐れられた。

表5 上江洲ほんた うるま市宇上  
江洲の南側の崖壁の景勝地。

表6 仲田 上江洲集落の屋号のひ  
とづ。集落の開祖となつた七軒の家  
のひとつと伝承される。

この人と、男といぢやいでから、離りていとか〔男  
と出会つてから、離れてとか〕。これはむるおば  
さんぬ、いちやんだ〔ただ〕話聞く、これ。『遺  
念火』また、夫婦、また思やーぐわーさーていけーさ

て。獅子置ちゆぬとうくまんかい、うりが、知らし火んでいち、たまがいたんよ。

「あり、あり、あり」つし、しぐ、かんし、上んか  
い上あがて、落おちていて、上あがて、ういすたん  
よ。

「と、うれ、うれ」んでいやーに。

また、知らしんでいちて、翌日あさひ。

「まーやたが、まーやたがーんち、提灯とうどうかんしさーに、  
明あがらち、提灯とうどううりさーに、  
「まーやたんどー」んちうりさーに、また、村中むらなかむ  
る集あつまやーに、あんし物もの知りかい行ゆきちゅたんどー。

が、知らせ火といつて、火の玉が上がつてね、  
「あれ、あれ、あれ」とさわいでいたら、たちまち、  
こう、上に上がつて、落ちて、上がつて、そうして  
いたんだよ。

「さ、これは、これは」といつて。

また、知らせといつてね、翌日は、

「どこだつたか、どこだつたか」と、提灯とうどうをこうやつ  
て、照らして、提灯とうどうを掲げて、  
「どこだつたよ」と目安めあんをつけて、また、村中むらなかみん  
な集あつまつて、そして占い師うみのところに行つたよ。

## ② たまがい

川上亜（明治二十九年生）美里

〈方言原話〉

なんで、上江洲もそだつたよ。『八月よーか  
びー』といつて、（旧暦八月の）十・日。十一日だ  
よね、よーかびーは。そのときには、とおく集落の  
前の高台に登つて、もう、たくさん人が集まつて、  
青年たちなんかもみんな集まつて、そうして見ただ  
けね。『たまがい火を見る』といつて、集まつたけど、  
出ないときもあつたよ。

ちょうど、村からこう東になるわけだよ。上江洲  
ばんだ、あの、なんでいうかな。あつちだけどね、  
いつも登つて（見ていた）。

一度は、仲田の（獅子舞の）獅子を保管している  
ところだよ。獅子を置いてあるところに、たまがい

※1 知らし火 「知らし」は予兆やきざしのこと、「不吉な前兆を示す火の玉のこと」。

※2 物知り 易者、民間療法に長けた者、「すむち」「三世相さんじんそー」とも呼ばれる。

※3 西森 沖縄市越來集落の南西にある丘。



越來の西森（中央の丘陵）

あと一うま、あの近辺、ちやーきこの上がいてー

るとうくるぬ近辺から、亡くなる人がいる。

よく八月えーゆー出じゅたんやー。

〈共通語訳〉

大工の人が、箱を作るんだよね。(死者が)入る棺桶。龜といつて、削るものがあるだろう。切れっぱははそこににおいて、ちょっと夕方に燃やすから、みんな燃やしたりするからね、それが先づれになつてそこに明かり(火の玉)が前もつて出るというから、それで厄事(の兆し)がああして上がつたんだけどね。

それは、西森のところでこうして見て、(たまがいが上がる家を)確かめるんだけど、どこだかわからぬよ、すぐには。竿の先に線香をつけてね。どこどこにとそれを立てて、それから(たまがいが上がった家は)どこだったとひきあてて。そんなようなことがあつたねえ。

しまいにはそこは、あの近辺、(火の玉が)上がつたところの近辺に、亡くなる人がいる。

(たまがいは)八月はよく出たねえ。

③ たまがい

川上亀(明治二十九年生) 美里

〈方言原話〉

うりが、越來ぬ、グシチ小なしがや、うまぬ亡くななるばーやはしがや、うりが亡くななる年ぬ、うふえー、一箇月前ぬあてているごろ、むる越來ぬかーま、むるまつ赤ーらーつし、むるなー、焼きむんなていなー、じこー大火出でてい、くれー今、あぬ、「火事どー」つし、騒動ないんてーんでいちやたしがや、やっぱうれー、見ーちん、じゅんに明がていいー、じゅんに火事などーしがえー、今、騒動ないたしが、しぐ消ーていねーらんなどーるくどう、うれーあたさ。むるねーなどーたん、うりが。むる明がていいねーらんとー、あとうしえーなー、うまぬんじやきなくどう、

「はー、うりが厄ぬあてーさやー」んでい、うりわかいるばーぬあたん。うれーなー、実際、だてーん大火燃ーとーたん。うれー実際なーあたん。

〈共通語訳〉

これが、越來の、グシチ小だつたけどね、その家の人気が亡くなつたときだけどね、この人が亡くなつた年の、ちょっと前、一箇月前ぐらい、越來の向こがまつ赤になつて、みんな焼けたみたいになつてね、たいへんな大火事が出て、これは今、あの、

※1 越来 沖縄市の字名。コザ十  
字路北西側の高台に広がる字。  
※2 グシチ小 越来集落の屋号の  
ひとつか。

「火事だ」と、騒動になるだろうといつてはいたけどね、やっぱりこれは、見ても、本当に明るくなつてね、ほんとうに火事になつたけど、今、騒動になつたけど、すぐ消えてなくなつていてこと、こういうことがあつたよ。みんななくなつていて、これが、みんな明るくなつていて、これが、みんな明るくなつて、あとになつて、

「はあ、これは厄があつたんだね」と、これがわかつたときがあつた。これはね、実際、たいへんな大火事が燃えていた（ようだつた）。これは実際にあつた。

④ たまがい

川上亀（明治二十九年生）美里

方言原話

夜ぬ一時過ぎがらー、一時、二時まんぐらー起きていいちゅんよー、製糖小屋んかい。夜中に。うんにんからー製糖小屋んかい行ちゅんたしがや、宮里んでいちわつたー親戚ぬ人がや、うまとういぐーなー、一緒に作業まじゅんすしがや、うぬ宮里ぬ家から出じてい、フイージャーゲムイんけーぬ、今ぬ公民館ぬ前通いでいちゅたひが、わつたー公民館ぬ前んかい。越來んけーんかい通どーる、あぬ公民館ぬ前ぬつきあたる向こうんじなー、しかつどうなー、むる、まつ赤一らけーなどーたんよー。

共通語訳

夜の一時過ぎだか、一時、二時ぐらいに起きていつたよ。製糖小屋に。夜中に。その時間に製糖小屋に行つたけどね、宮里といつてうちの親戚の人がね、その人と一緒に、作業を一緒にしていたけどね、その宮里の家から出て、フイージャーゲムイへ、今の公民館の前を通つていつたけど、我々は公民館の前を、あの越來に向かう道を通つていたら、あの公民館の前につきあたるところの向こうで、はつきり、もう、みんな、まつ赤になつてしまつていたんだよ。みんな、まつ赤になつてしまつていたけどね。宮

むるまつ赤一らけーなどーたしがや。宮里ぬおじい、わつたー牛そーい、牛車どうやくどう、牛そーいんじとーたひが、牛んけーくんじヌーむるてーどうーぬ家んかいんじる、立派んまた、うかまぬ前や水うさぎてい、手うさーつしんでいち、家人んかい言ち。あんしから、またおどうたーまたフイージャーゲムイんけーかんし下りてんじやしがよー、くぬアシビナー前から。うりてんじやしが、えー、わつたーあぬ製糖小屋きるまんぐらんかいんなたくどう、ねーんけーなでいよー。むるあとうていねーらんなどーたつさー。

※1 製糖小屋 黒糖製造のために設置された製糖場。砂糖きび压搾機（サーターグルマ）で絞った汁を集めて釜で煮詰める作業を行なつた小屋。

※2 フイージャーゲムイ 美里集落にあつた池。美里公民館東側、ヒージャーガーの近く。

※3 アシビナー 農村にある広場。集落の諸行事や会合に利用される他、若者たちが集まつて夜な夜な歌い踊つて楽しむソーアシビと呼ばれる集いの場ともなつた。

里のおじいが、うちの牛をつれて、牛で回す製糖機だから、牛をつれて出かけていたけど、牛も縛ってしまって、みんな自分の家にいつて、立派にまた、かまどの前には水をお供えして、手を合わせると

いって、家人に言つて。それから、またおとうたちはまた、ファーリヤーゲームにこうして下りていったけどね。この、アシビナーの前を。下りていったけど、あの製糖小屋につきあたるあたりになつたので。みんなあとでなくなつていたよ。

これは珍しいよね。本当にこれは自分に当たつていたんだよ。

### 〈方言原話〉

あんしん、今ねーねーんなどーしーえー。  
見たことはある。西森んじ見ちやるばー。越來行  
じ。

見えるよ、あれは。上がるときは見えるよ、誰が  
も見える。上がつて、また下がる。上がつて、下がつ  
て、また、なくなる。  
人の門にね、石垣のこっちまんぐらに上がるそ  
だ、あれは。人が死んでね、それでこっちに、ちり  
焼ちゅしえーやー、うまに焼ちゅたるばー。

### 〈共通語訳〉

それでも、今は（たまがいは）なくなつているんだよね。

見たことはある。西森で見たわけ。越來に行つて。  
見えるよ、あれは。上がるときは見えるよ、誰でも見える。上がつて、また下がる。上がつて、下がつて、また、なくなる。人の家の門のところにね、石垣のこっちらへんに上がるそうだ。あれは人が死んでね、それでこっちに、ごみを焼くよね、そこで焼いたわけ。

### ⑥ たまがい

平龜（明治二十八年生）美里

たまがいするのにはなんと言ふかね。『たまがい』  
言うてからに、火が光つて上がるでしよう。こっち  
では『たまがい』言うけどね。

これはね、下のほうから上がつていて、落ちる  
ところに厄があるって、厄。こっちに落ちるところ  
からなにかが、不幸が出るらしいね。火玉は、上がつ  
ていくところはなんでもないって、厄は、下がると  
こ、落ちるところに厄があるって。

自分の娘の病気のときに、ジフテリーだからわか  
らないわけよね。これを、みんなにしらしらにして  
いるんだけど、私が勘つかないわけよ。これは完全  
にもう、「まやーさつとん」〔悪霊にまどわされてい

※1 ジフテリー 病名。ジフテリ  
アのこと。ジフテリア菌による感染  
症で、発症すると喉頭や気道が腫れ  
て呼吸困難に陥ったり、神経の麻痺  
や心筋障害が起きて、重症になると  
死亡することがある。

る』というでしようねえ。『家の主えーまやーさつていわからんしが『家の主はまだわされてわからないけど』、他から騒ぎたてる』言うてからに、他の人がみんなもう、あちこちユタぬ家行つたりするんだけど、私はその日に限つて、  
「あーなー、うんじゅなー出じ、うきみそーれー〔あもー、あなたがたがおいでください〕、私はもう」、  
上陸してのあとだから、道が怖いから、子ども連れで道が怖いから、  
「うんじゅなー出じめんそーれー〔あなたがたがユタのところにお出かけください〕」つてから、人に頼んでゆかして、自分は行かなかつたわけよ。私にもう災難が来たわけ。子どもが死んで、この子が死んで。  
たまがい上がるのも、私のいどこが見ているし、  
この日は私に、  
「ねえさん、ねえさん」言つてから、  
「たまがい、たまがい見たよー」言つてゐるわけさ。  
あんすくどう〔それで〕、  
「えー、たまがいー?なー、あの、あんたはろうそくつけて」、このときはもう上陸しなかつたねえ。  
戦時中だから。とにかくろうそくつけて魚売りに來た人が、ろうそくつけて秤のみーみー〔秤の量を〕、見るために、ろうそくつけたんですよ。して、光が私の前の、私の住んでる前にいとこがいたんです

よ、いとこの。あの人が、わたしの娘があれだから魚買つてあげてみなさい」言つたもんだから、魚買ひに行つたら、こっちの家の後ろでろうそくはつけて、秤のみー、いくらあるかねつて見たわけよ。『これを見て言うのかねえ』と思つて、私が叫つたんですよ。  
「あんたはこのろうそくの光見たんでしよう」言うたから、  
「ちがうよ。ろうそくは下であれするでしよう。あれは上に上がつていくのに」言つてからによ。あんさーに、落ちたところはわたしのところに落ちよつたつて。このいとこが言つてます。いとこは、なでかつて、言えば恥ずかしい話になるんだけど、いとこは母親に叱られて、こつちに大きなふくぎがあつたんですよ。上りやすいふくぎ。このふくぎに乗つておつて、親が寝てから私のところに寝つもりで、こつちに乗つていたらしい。そんでこの木の上で見たらしいのよね。だから、この火が落ちるところは厄言つてゐるから、  
「どこに落ちよつたのよ」  
「落ちるのは見なかつた」言つてゐるわけさ、もう。見たはずだけど。して、これをまた、この隣の人が、私の前隣のまた兄さんが、一番最後の召集兵を送別会するところに、踊りするところに見に行つてから、帰りにまたこの人が見つてゐるんですよ、たま

※1 上陸してのあと 上陸は、沖縄戦での米軍上陸のこと。米軍は、一九四五年四月一日に沖縄島中部西海岸に上陸。戦線を南北に広げ日本軍との戦闘を繰り広げたが、戦闘の最前線やその近接地域に取り残された住民も数多く、戦闘を避けながらの生活を余儀なくされていた。

※2 ふくぎ オトギリソウ科の高木。幹は直立し、高さ4から7メートルほどになる。屋敷垣として利用される。

諸見里マツ（大正二年生）美里

※1 すむちぬ家 「すむぢ」は易者のこと、『書物』からくる。易新以外に風水の見立てや民間療法による病氣やけがの治療も行う。

※2 カミー名 昭和の初めころまで沖縄では童名（わらびな）とい

う習いがあり、子籍名とは異なる方

言風の名で家族や近所の友人からの

呼び名を持つことがあった。この語

りでは、火玉が上がるという怪異に

ついて易者の判断を仰いだところ、

カミーという名を持つものがいる家

で難事が起るこという凶兆だと回答

があつたが、果たして童名がカミー

であつた話者のものに不幸が起きた

ことが説明されている。

※3 ヤブー 飲食や民間療法を用

いて病氣やけがの治療を行なう治療

師。

※4 鳥も鳴いて 夕方に鳥が鳴いて飛び立つのを見るのは不吉の兆しとされた。

がいと言うのを。あんし、うしろのほう、光についてからに、こっちに落ちよつたということを。この通りはもう、十軒、十一軒あつたかね。あの人見たところから私のところまで、両方、みんな、「すむちぬ家」「易者」に行つたんですね。三世相<sup>さんせい</sup>言うでしょ。行つたら、私の名前言うて、「このカミー名のいるところから騒動事<sup>ざうどうじ</sup>が出る」言うてから。騒動<sup>ざうどう</sup>いうたら、騒ぐ、騒ぎたることでしょ。これが出てる言つてからにしたんだけど、子がまた、ジフテリーでもう騒ぎたてたんですよ。一日はもうみんなで集まつてあれするとか。なー「もう、離島だから、ヤブー。ヤブー医者を呼んできてもう治療するんだけど、お医者さんもそのときになくなつて、薬局しかないから。あの人はもう、つきそい、座り込みしておつて、あれしたんだけど、だめだつたんです。これで、

「あはー、たまがいと言うのは、上がるところには厄ないんだねえ。下がるところに厄はあるんだねえ」自分はもう考てるわけよ。もう、ほんどうが見てるらしいですよ、このあれまた、「鳥も鳴いてからに、あつちに行きよつたって、墓のところに行きよつた」言つてているからによ。こんなのも教えるさ。死んでからしか話さないさーね。わからないわけよ。

「あはー、明るく上がつて落ちたよ」と言つて、そしたら、じゃあその立つているところに印を結んで、そうしてから、向こうの、ちょうど上がつたところで、この火が真っ赤にして上がつてから、真っ赤にして行ぢゆるむの「行くもの」、これも、こつち、どこといつてわかりよつたから、そしてから、あつちに連絡して。で、こっちからね、ちょっと、二つ、今は家は一つだけど、むかしは大きい家と小さい家、あつたからね、炊事場と上は、わかれ、二つおうちがあつたから。そのあいだに、あいだの

とこから落ちて上がつてから、こつちのあいだんと  
こ落ちるの、両方のとこ、見えよつたわけ。そうし  
たから、「火が上がつたよ」と言つたら、またその火はその  
まましてから、次の晩にさ、んだ「ほら」、私はこつ  
ちに立つて、向こうの人はまたこの提灯みたいで  
ね、上げて、  
「こつちであつたか、こつちであつたか、こつちで  
あつたか」と言つて、これを確かめてね、上げたこ  
と、ただ一回だけある。  
したらね、そこはね、そこでまたなにかがあつた  
と言つたら、その家はね、豚養つていたから、そ  
の豚がね、飛びだしてしまつて、もう、一週間あ  
とぐらいに。豚が豚小屋から飛びだしてしまつて、  
炊事場のほうに入つちゃつたのよ、豚が。そんなの  
は昔はいけないというのであつたから、この家から  
ね、こつちの家族の人は出て、三日ぐらいい、自分の  
家から少し離れて、三日ぐらいいあつちに泊  
まつてから、また三日したらね、こつちも厄払い  
して帰つてくるつて、あつたからね。「ああ、たし  
かこの火」火が上がつてから、またこの豚が出て、  
自分の炊事場のほうに入つてしまつて、入つたから  
もう、「ああ、これはなにかの厄払いだ」と言つて、  
で、こつちの家はね、出でいたから、またあの三  
日ぐらいいしてから、この厄払いはもう、あれしてか

らさ、塩まいて、まいてからまたこつち、やつて、  
塩べーるといつのね、塩やつて。あんなにしてから  
こつち、また、生活の、暮らさつて。  
すぐ隣、わたしたちはこつち同じ部落だから、あつ  
ちだから、江州のほうであつたから、すぐ見えよつ  
たから。先に連絡して。ただ一回だけ。  
わたしが十三ぐらいであつたかな。ちょうどどこ  
にも行かないで、学校歩いている（通つてている）時  
期であつたから。そんなに夜遊びでも出るぐらいで  
はなかつたからね、お母さんと一緒に行つたとき  
が。

### ⑧ たまがい

仲松荪仁（明治三十七年生）美里

火がこうして、上にあがつたようになるよ。それ  
をたまがいと言つたんだ。人の家に、アンテナ、上  
がるときにはもう厄出している。

その家にいて、  
「あー、たまがいが上がとーんどー」んでいねー「あ  
あ、たまがいが上がつているよ」といつたら、また、  
その家にな、案内かけて、別に歩かんといかない「別  
の場所で過ごなさい」と言つて、また出  
るほうがいいよ。また出るそうですよ。

「あー、当たいめーぬあたんどー」んでいち「ああ、  
厄の当たりがあつたよ」といつて。大変だよお、

もう、昔は。

⑨ 火の玉

名嘉真タケ（大正四年生）明道  
その家の人が、誰でも、死ぬときには火の粉上が  
るようにして、やりよつたとかなんとか。死ぬ前に  
ね。

⑩ 火玉の恩返し

比嘉貞信（昭和二年生）中の町

あるところで、川があつて、橋架かつている。そ  
の橋のたもとに、うずくまっているのがある。そ  
こを通りがかった人に見たら、何者かがうずくまつ  
ているつて。そしてこれがね、

「申しわけないけどね、この橋を渡らしてくれ」と。  
「おんぶして渡らしてくれ」と。

「私、橋渡るの怖いんだ」と。この人は、

「まじゅん」「一緒に歩こうじゃないか」と。

「歩けないんだ」と、

「どつても歩けない。おんぶしてくれ」

「しようがないなあ」と言って、これをおんぶして

ね、橋を渡つたら、下りると同時に、

「ありがとう。実えー私ねー火玉。今からいいつた

家焼ちーんちやたしが、橋越ーらん、いやーが渡

ちやくとう、ありがとう。「ありがとう。実は私は  
あつたよ。

火玉だ。今からあなたの家を焼きに行くところだつ  
たが、橋を越えることができないのを、あなたが渡  
してくれたので、ありがとう」とや。

「私ねーなー、うれーなー、いつたー家焼かんとー  
ならん、私勤みやくどう。是非焼きわるやくどう。  
うぬかわい、いやーやありがとーやぐどう、早くなー  
行ちやーにや、家め道具むる出じやしよー。あんし  
から、私ねー焼ちゅくどう「私はね、これはね、あ  
なたの家を焼かないといけない、私の勤めだから。  
是非焼かないといけない。そのかわり、あなたには  
感謝しているので、早く家に行つてね、家の道具を  
みんな出しなさいよ。そうしてから、私は家を焼く  
ので」

あんさーに「それで、この人は一生懸命走つて  
いってね、家財道具をひっぱりだして、家は焼けた  
けども中身は助かつた。これは、いいことをすれば  
そういう報いがある。もし、あのときに火玉を渡  
さなかつたら、この火玉はなんらかの方法で渡つて  
きて、わからんうちに全部焼けてるさ。おんぶして  
あげたおかげでね、どうせ焼かれる火事の中でね、  
中身は助かつたという、火玉の話ね。

これはね、子どものときに、この、僕の母が、母  
の世代が話するでしょ。夜の仕事終えたあとね、  
そこで聞くと怖くなつてね、もう、眼れない場合も  
あつたよ。

(1) 人の死を予知した猫

安次富主堅（明治四十四年生）照屋

<sup>※1</sup> 南洋群島、<sup>※2</sup> サイパンでのことですがね。

夜中、もう十二時過ぎてから町に遊びに行つて、もうちょっと町外れですかね。うちには、町から一里

ぐらいのところに住んでいたんで、町から遊んで帰るときにですね、町外れに、大きな、たくさんある墓場があるんですよ。その墓場通つたらですね、もう

月夜で、なんですよ。道から四、五間向こうに、墓の碑文がですね、立つているのもわかる、わかるん

ですよよ。月明かりで。そこにですね、猫が、何匹か、何十匹かわからんぐらいですね、みやあみやあ

して、もうしょっちゅう鳴いておるんですよ。『あれ、これ、珍しいなあ』と思つて、そこで立つて、

もう、あの墓の、あの碑文でないということはわかつ

てですね。それで、もうあんまり珍しいもんだから、

三時間ぐらゐそこに立つて、それ聞いていたんです

よ。それでもうその猫が鳴くの止まないから、もう

家帰つてですね、あくる日はもう、なんですよ、

のこと、夕べのことがきにかかるつて、仕事にも行

かんですね。朝は送つて、またそこ行つてみたん

ですよ。行つてみたらですね、そこに、碑文の（場所にあつた墓）、人埋めよつたんです。葬式してた

んですね。

## 五 厄除け、魔除け

### ① くしゃみしたときの厄除け

平田カマド（明治三十三年生）登川

〈方言原話〉

わつた一や行じよーるばー、普天間からむる

やー、前刈ぬカマルー、今バーマ当てい屋そーひが、

ぐーなーはつたらー皆あまうてい話そーひが、

「皆あいかーはりよー、あまうひ儲きらつとー

へーやー」、あいかーはつてい、吉元んフリビ

ぬんけー行じよーへーやー、樽藏根んありん

西雲小おとう、ペルーけーへーやー。

「あいかーらーはりよー」んでい言ちやくどう、う

ん前刈ぬあんまーが抱ぢよーる、カマルーがやら、

赤ん子でー、

「はーいっしえーん」でい言ーるばー。

とー、違どーひんどー、見たんどー。言んねー

すんねー、西雲小うーとう、樽藏根けーまーふん

やー、うーらんないー。またわつたんけー病んでい

とーいや、むーるむる、けー病んでいてるふー

じ、下門ん。うれー、今やていん、ぬしきばなーま

※1 南洋群島 南洋諸島を指す。

※2 サイパン 北マリアナ諸島のサイン島のこと。日本の委任統治領時代は南洋開発株式会社による製糖業の中心地で、多くの沖縄県出身移民が居住していた。

※3 一里 約四キロメートル。

※4 四、五間 間は長さの単位。七から十メートル弱ほど。

※5 普天間 宜野湾市の字名。市区の最北部にあり北中城村と接する。

※6 前刈 登川集落の屋号のひとつ。

※7 吉元 登川集落の屋号のひとつ。

※8 樽藏根 登川集落の屋号のひとつ。

※9 西雲小 登川集落の屋号のひとつ。

※10 下門 登川集落の屋号のひとつ。

しえーあらんでい、今ん。『はーいつしえー』んでい  
る言葉よー、私ねーひーへーましーあらんでい。いー  
話そーていん。『はーいつしえーん』んでいーねー  
ちじやんでい。うれー昔から、今ん。返ふん。あん  
くどう、覚とーろーあん言ひがや、だー、知らんく  
どう、ぬーんでい言やんしえー、とー、くれー違てー  
ねーなーあがい。

て。いい話をしても、『はつくしょん』とやる  
と運勢をさえぎるんだって。これは昔から。今も(く  
しゃみは運を)返すよ。それで、覚えていればそう  
言うけどね、ほら、知らないから、なんにも言わな  
いでいたから、これは(運が)狂つてしまつたんじゃ  
ないかな。

### （共通語訳）

私は行つたわけ、普天間からみんなね、前戻の  
カマルー、今バーマ屋をしているのが、一緒になつ  
たら皆あつちで話をしたけど、  
「皆あやからせてもらひなさいね、あの家はとても  
儲けなさつていてるからね」あやからせてもらつて、  
吉元もフィリピンに（移民で）行つてゐるよね、樽  
蔵根もあれど、（移民先は）ベルーだからね。  
「あやからせてもらひなさいよ」といつて、その前  
の、赤ちゃんがだよ。

「はつくしょーん」と言つたわけ。

うん、（福連が）変わつてしまつたんだよ、見た

んだよ。そうこうするうちに、西雲小と樽蔵根の家  
人は「くなつて、いなくなつて。またうちに病人  
がでてね、みんなんな、病氣してしまつてゐるみ  
たい、下門も。これは、今でも、出だしは良くないつ

### （② くしゃみしたときの厄除け）

金城カナ（明治三十八年生）登川

### （方言原話）

「くすぐー」んでいーねーよー、くまぬいー話な  
んちー返ふくどうや、あんさーに  
「はーいつしえーん」でいへー、すぐ  
「糞たつくえー」んでい、くまーあん言るばーてー。  
うつさしえーよー、返ふるじやんでい。い言葉  
どー。  
「いー話そーひが、あまぬ『はーいつしえーん』でい  
言ざーに返ちよーるじなでーくどうや、くまの一  
また『糞たつくえー』んでい言ねー、ちょーる、あ  
まの一返ちよーる、くまの一かんし返ちよーる話や  
たん、昔から。

### （共通語訳）

「くすぐー」と言つたらね、こここのいい話も返し  
てしまふからね、それで



「はつくしょーん」とやつたら、すぐ  
「糞くつつけろ」と、ここではそう言うわけだよ。  
そうしたらね、返すことになるつて。まじないこと  
ばだよ。

いい話をしているけど、あちらで「はつくしょん」  
とやつたら返していることになったからね、ここは  
また「糞くつつけろ」と言つたら、ちょうど、あち  
らのは返つてくる。こちらのはこう返している話  
だつた、昔から。

(3) くしゃみしたときの厄除け

榮野比トヨ（大正六年生）知花

〈方言原語〉

あれーうりやたんでいへーやー。鼻ひつぢやく  
どう、あんねー言やんよーい、ちよーる風邪ひちー  
ねー、んぢゃ、あんふしえーやー。あんさくどう、  
うぬやなむんがるはなひらちえーるんぢ、ちゅいぬ  
わかいる人ぬ、うりがはなひつぢやくどう、  
「糞たつくえー」んでい言ぢやくとう治とーたひ  
が、米くえーんでい言ぢやる人よー治らんだんでい。

いたら、ほら、くしゃみをするよね。それで、その  
魔物がくしゃみをさせるといって、ひとりのわかつ  
ている人が、この人がくしゃみをしたので、  
「糞くつつけろ」と言つたから治つたけど、  
「糞を喰らえ」と言つた人は治らなかつたつて。

(4) くしゃみしたときの厄除け

喜納兼増（大正二年生）登川

〈方言原語〉

ぬーやーくいーやー人のー信用さん、悪い人間が  
うやーに。うれー地上アカシ上んかいうらん、亡モローぢやく  
どう。くぬひやーがる悪いくどうつし、自分ぬわら  
ばーんあんしはなひらんぶいん、はなひらふるん  
でい言ち、  
「糞たつくわーさりーんどー」でい言るばーれー。

〈共通語訳〉

なんだかんだと人を信用しない、悪い人間がい  
て。その人は地上にはいない、亡くなつたので。こ  
いつが悪いことをして、自分の子どももそうしてく  
しゃみをさせて、くしゃみをするといつて、  
「糞をくつつけられるよ」というわけだよ。

〈共通語訳〉

あれはこうだつたつていうよね。くしゃみをした  
ら、そつは言わないようにして、ちよび風邪をひ

⑤ くしゃみしたときの厄除け

座間味マカト（明治四十一年生）住吉

「くすたつくえー」というものある。赤ちゃんた  
ちが、くしゃみ、鼻ひらすでしょ。「くすたつくえー  
ひやー」、こんなに言いよつたつて。

風邪引くの、あれが、悪口の意味やるばーと〔悪  
口の意味なわけ〕。くすたつくえー。今はどこも子

どもたちは打つたり、転んで打つたりすら、「ふつ  
とべー、ふつとべー」して、こんなにするさーねー。

昔はみんな、くしゃみがしたら「くすたつくえー」と。  
こう言つた。風邪引いて、風邪引くあれに、悪口ぬ

意味にばーと〔悪口の意味であるわけだよ〕。

⑥ くしゃみしたときの厄除け

瑞慶山千代（大正六年生）照屋

この「くすくえーひやー」言うのはね、あの、く  
さび〔くしゃみ〕したら、「かぜ」が来るでしょ。  
この、「かぜ」に、「糞をなめれ」言うて、相手に、「か  
ぜ」に言うてるつもりじゃない。「かぜ」に言うて  
るわけ。男連中でもねえ、あの、「くさー」言うさー  
ねー。面白いよ。

⑦ くしゃみしたときの厄除け

島袋トメ（大正二年生）松本

やなむんぬ〔魔物が〕、くしゃみをさせるらしい

わ。だからそんときは「くすたつくえー」「くそくら  
え」言うたらね、すぐ逃げていつてしまふという意  
味で、

「はー、くさくえー、くすたつくえー」、「はくさ  
くえー、くすたつくえー」これ、まあその、部落に  
よつての言葉。

## 【2】サン結び

① 厄除けのサン結び

吉田（島袋）タケ（大正七年生）知花

〈方言原語〉

後生くんぬなー、手たつくまーにうちゅ食いで、  
うり食みねーなー、ちょーどう腹痛さいぬーさい  
しーがふらーわからんむんでいやーになー、でいー  
ちぬ厄除けふーじーぬじしてーなーやー。あんしん  
サノー入りーちさんでいる話やしが。うりきじやー  
しーねー、またどうーなーが食みーねー腹痛すーく  
とうんでいる話やたるばー。サンぐわー入りーちさ  
んでい。

言んねーなー やなむのー夜どう出しーしえー  
やー。屋はいないさーねー。だから夜はどこかにな  
にか、くわっちーなんか持つていくときは  
「サンぐわー入れてよー」と言いよつたわけさ。あ  
んさーにまた烟んかい、烟んかいぬーがら持つちー

※1 かぜ 悪い霊氣、悪霊。方言  
でカジ。悪い靈氣と遭遇すると、ふ  
いな発熱やできものなどの病気になり  
舞われるされる。

※2 サン 厄除け。すきなどの  
葉を結んで作る。



すすきのサンとサンぐわー。箸袋のサンぐわー

ねーサンぐわー入りーしえーやー。とー、烟んでー

② 魔除けのサン結び

んなーゆーぬーやーくいーやー歩ちゅくどう、あん

さーにうぬサンさーに避きりんでいるふーじーやる  
ばー。うぬサヌン恐るむんやんでい。

〈共通語訳〉

あの世の人がね、手をつつこんで（食べもの）精  
を、食べてしまつて、それを食べたら、腹痛したり  
なんなりするかわからないからといって、ひとつ  
魔除けみたいなことなんだつて。だからサンは入れ  
ておきなさいという話なんだけど。（死者たちが）  
食べものをひつかきまわしたものを、自分たちが食  
べたら腹痛をおこすからという話だったわけ。サン  
を入れておきなさいつて。

言つてみたう魔物は夜にこそ出るよね。昼はいな

いんだよね。だから夜はどこになにか、ごちそう  
なんか持つていくときは

「サンを入れてね」と言つたわけだよ。それではまた  
煙になにか持つていくときはサンを入れるよね。ほ  
ら、煙というのはよくなんやかんや歩くから、それ  
でのサンで避けるというふうなことだつたわけ。  
そのサンは（魔物には）恐いものだつて。

栄野比トヨ（大正六年生）知花

せす。

まんでーがなら 未詳。説出

〈方言原話〉

ぬーやていんうり入つと一きーねー、すばなー  
のー、どうーなーが持つちょーる弁当やていん、う  
ぬサンぐわー結でい入つと一きーねー、すばなー  
りーむぬ欲さふしが、食みゆーさんでい。うり入り  
らんねー、ちよーるまんでーかなら抜きてい歩ち  
なー誰がんなーしきかじやいつし食むふる人んうら  
ん。なーやーは苦はし、なー水んぬーん飲まはん、  
うんぐどうーぬ人が欲さしけー触いねーうぬ弁当  
やていん今支度てーしえーてーぶるぶるないたん  
でい。うぬたみにサノー入りーんでい。

〈共通語訳〉

なんでもそれを入れておけば、魔物は、自分が  
持つてある弁当でも、そのサンを結んで入れておい  
たら、そのそばで食べたそなにするけど、食べられ  
ないつて。サンを入れなければちようど化けてうろ  
ついて誰でももう腐った臭いがして食べさせる人も  
いない。もう飢えて苦しんで、もう水もなにも飲め  
ない、そんな人が（食べものを）欲しがつて触つて  
しまうと、その弁当も今支度したもののがいたんでし  
まつたつて。そのためサンは入れるんだつて。

③ 魔除けのサン結び

城間カマ（明治三十二年生）知花

〈方言原話〉

ぬーんあらんていん、やなむぬかいけー出じー  
なーや、かんけーきじやしーねー返しんちよー、必  
じサノー入らはりーたんでい。うれが入ちよーる

えーかーや、んじしきたんてー、受きとらんていん  
どーひやー。墓んじやでー。あれ取らんえーかー  
よー、受きとらんでいくどう。ありなー、いちば  
んふん返しやんでい。むんぬき。

〈共通語訳〉

なにもなくとも、魔物が出てしまうと、こう（食べものを）ひつかきまわされたら返すといつてね、必ずサンはお入れになつたつて。サンが入つているあいだは、出して据えてあつても、受けとらないんだつてよ。墓であつても。サンを取らないでいるあいだはね、受けとらないことなので。サンはね、いちばん悪気返しだつて。魔除け。

④ 魔除けのサン結び

金城ナベ（明治三十六年生）松本

〈方言原話〉

後生ぬ者ぬ、むんぬはち、うりが喰いねーなら  
んち。あれ、あんどうやんどー。むんぬはち喰ー

が來ゆーんでいやーに。ぬーならんぬーたーでー  
なー、ぬーならんぬーたー。なんでーからする。うつ

たーうんねーるーあんふんでい。むんぬはち喰ーん  
でいよ。あんしサン入りーんどー。あぬ、清明んでい  
ん、なー、重箱つしれーむるサノー入でいどー。

〈共通語訳〉

亡靈は、供えものを、亡靈が喰つてはいけないと。あれ、そなだよ。供えものを喰いに来るといつて。なにもできない連中だつてよ。なんにもならない連中だつてよ、なんにもならないやつら。あの連中はそういうふうにするつて。供えものの精を喰うつてね。それでサンを入れるんだよ。あの、清明だつて、もう、重箱というのにはみんなサンを入れてだよ。

⑤ 魔除けのサン結び

照屋ツル（明治四十二年生）照屋

〈方言原話〉

手たつくみーねーましまーねーんだん。  
不孝ぬ子ぬちやーがいるわけよ。あんさーい、ひ  
もじいさ。あんさーい、人のもんに手をつっこんだ  
ら、あんさーい、うれー、サンぐわー、入れらりーん。

※2 むんぬき 魔除け。お守り。未詳。訛

※3 清明 二十四節の一つ。清明節に行なう祖先供養の行事。親族が集まって、重箱料理や酒、紙銭などを墓前に供える。

〈共通語訳〉

手をつつこまれたら良くないんだよ。

(親より先に死んで餓鬼となつた) 親不孝の子たちがいるわけだよ。それで、ひもじいよね。それで、人のものに手をつつこんだら(食べ物が悪くなるので)、これは、小さいサンを(添えたら、餓鬼は手を入れられない)。

⑥ 魔除けのサン結び

平龜(明治二十八年生) 美里

〈方言原話〉

あれーむんぬきむんち、さの一作ていいちゅる。  
くわつちーうさぎーねーまーんかい持つちちー  
ねーうり上に置ち、また、取てゐるえーさつさぬ  
やー、うぬふーじーやるふーじやしが。

〈共通語訳〉

あれは魔除けといつて、サンを作つていく。  
ごちそうを供えるときにも、どこかにもつっていく  
ときもこれを上に置き、また、取つて、そのように  
やるようだけど。

⑧ 魔除けのサン結び

内間シモ(明治四十四年生) 城前

悪靈がいたわけよ。悪靈とよ、今はいないけどさ、  
人を病氣させるぐらいの悪魔がいるわけさ、道端によ。  
で、こんなものに当たらないようにとか、サン  
ぐわー結ぶるわけさ。昔人は皆、サン結ぶつちて。  
これ外すんでいち〔悪靈を逸らすといつて〕。  
この悪魔は。いることはいるよ、今はもうあんな

⑦ 魔除けのサン結び

上原ウシ(明治四十二年生) 住吉

〈方言原話〉

けー入れて、あれするといつて、これ結んで入れ  
たら、あれといつて、やなもん除ける、うり。  
まーからがうれー、だー、昔からうんぐとうー、  
うりうるするたる話えーぬーから出したんち、うれーわ  
からんさ。

〈共通語訳〉

(サンを) 入れてしまつて、魔除けをするといつ  
て、サンを結んで入れたら、魔除けといつて、魔物  
を除く、これ。  
どこからだかこれは、ほら、昔からそのように、  
そうやつてきた話はなにから出たかつて、それはわ  
からないよ。

ことはないつてわかるよ。遠道にや、赤ちゃん連れていかれてなかつたよ。必ず風邪引いた。悪魔といいうものが着いてくるわけよ。むる悪魔、後生通らん人（まるつきり悪魔、成仏できない人）、あれが悪魔なるわけさ。こんなのが当たるかーと思ってからよ、サンは結ぶわけよ。厄を外すわけ。これに入つたら、（悪魔は）あれに、結ばれるという意味でないか。出す、あの、悪者除けるという意味よ、悪者は。やなからじや、やなからじといふ。これを当たらないうつていつて。重箱さーぬーさー、サン結ぶわけさー、昔。今もくめきやーん人（細かい気配りをする性質の人）が結ぶさ。今の人もね、必ずね、七月のね、しんで一食べたらさ、腹壊すわけ。意味があるんだよ。ごちそう食べたら、今ではないが、昔はさ。七月の盆のごちそう食べたらよ、腹壊すわけよ。もういろいろ、あの、雪がさ、混じつてくるらしいよ。後生のとのあれが。必ず腹壊す、食べる腹壊すさー、大方は。神さまのお供えものはなにもしないけどさ、七月盆の食べすぎたらすぐ腹壊すからよ。靈があるといつて、昔は話していた。

人が亡くなつてからに、幽霊みたいなものがあるさー。あれがね、ごちそう見たらね、食べようとしたとえばごちそうでもよそのお家にもつていくさー

たら、みんなこれ、ごちそうが腐れてね、今で言えばなんというか、餓<sup>う</sup>いてい食まらんしねーやー「いたんで食べられないんだよね」。これは、サン入れたらね、亡くなつた靈のあれがは手つけないから、このサンで押しのけていくから、お払いしていくから、サンはみんなの、お墓に清明なんとかに行くときは、サン結んでこれに入れてよーという。悪いのは、靈みたいの押しのけるお守りというわけさ、あれ、サンは。

#### ⑩ 魔除けのサン結び

高江洲節（明治三十五年生）松本

あの、わかるという、ということでもないがね、昔のあしはん（屋食）はね、烟に持つていくでしよう、ごはん、烟にね。持つていくときなんか、「サン結んでい入つてーみ（サンを結んで入れたか）」というのを言われるのも聞いたがね。この意味まではしっかりとわからないがね。やっぱりサンというものはもう、除けでしよう、むんぬきむん（魔除け）でしょう、サンでいしえー「サンというのは」。

#### ⑪ 魔除けのサン結び

仲宗根初子（大正七年生）越來

あれはですね、だいたいサン入れるというのは、たとえばごちそうでもよそのお家にもつていくさー

※1 やなからじ 悪い靈氣、悪魔。この話者は成仏できずにさまよう靈気がなると説明している。ヤナカジと遭遇すると病気見舞われるときされ

ねー。無縁仏と言つてですね、亡くなつた人が、あの、焼香と言うから、沖縄で。お祀りなんかやつてない方が無縁仏になつておるからよ。あれーものほしさして「彼らはもの欲しがつて」、このごちそう、手を入れて、言えば、盗むというかね。そのために、サン入れたら盗みきれないから、サンは入れるようになつてゐる。

#### ⑫ 魔除けのサン結び

喜納クニ（大正六年生）東

うん、あのう、無縁仏。こんなもの、ほら、うようよ、なんか幽霊とか周囲にはいると言うさーねー。だから、ほら、サン入れるということは、これが怖がつて手入れきれないという。そんな話じやないですかね。

#### ⑬ 魔除けのサン結び

玉城シズ（明治三十八年生）久保田

やなむんが、サン、これ、昔の方言書にサン言うわけ。これしたら、このやなむんやこっちに来いきりんという。四隅で囲るから。四隅なつてゐるさーねー。一、二、三、ここに、四隅にあれするから、こつちにやなむんが入つてきりんの意味でこんなした。そいつた話。

サンやとつても、怖い、幽霊の怖いもんだから、

必ずなにかのときにはサン結うて、ものにはなににも入れよつたさ。言えば、やなむん言うてあるさーねー、まじむん、まじむん來らさんために、このサンや結うて置く、だつたみたいだけど。これ、私は自分で考えたことない。親祖先から聞いた、昔言葉から聞いた話だから。サン結うておけば、やなむんやこつちに来いきりんいう意味で、あれしたみたい。

#### ⑭ 魔除けのサン結び

金城ナベ（明治三十六年生）松本

〈方言原話〉  
やなむのーくまんけー入らんか考ーつし。あまんけーくまんけー。木やまたや、古ぬ木や、またぐしちつし、うま作いてー。あぬ、木ぬ精があるさ。  
あぬ、味噌漿ぬ口よ。ありんけーむるくんちんどー。やなむんぬ人らはん考ー。あんすどうやんどー。味噌漿ーうりしえーやー。うりむるくんでいんどー。昔、あんぐどうやたがなー。

#### 〈共通語訳〉

魔物はここに入らせない考え方。あつちこつちに。木はまた、古い木は、またすきで、そこに（サンを）作つてだよ（古い木にすすきを巻いた）。古い木には、木の精がいるよ。  
味噌漿の口ね。あれにみんな（すすきを）くぐり



つけたよ。魔物を入れさせない考え方。それでだよ。味噌鹽はそうしたよ。味噌鹽の口をみんなしばつたよ。昔、そういうふうだつたけど。

### [3] ひとさし指の魔除け

#### ① ひとさし指の魔除け

新屋ヨシ子（大正八年生）越前

豚。<sup>うな</sup>豚ぐわーまじむんぬや、ねえ、そういう話聞かなかつた？

古屋敷なんかね、古い屋敷があるでしょう。そ

ういうとこなんかね、さびしそうにしてるでしょ。そこらあたりはね、夜は豚ぐわーまじむんが通るらしいよ。そういう話をよく聞かされたよ。見たことはないけどそういう話は聞いたことがあるよ。

おつかいにどこかに行くさね、そのときには、夜、電気もついてない、まづくらしん「真っ暗闇」だから、怖いでしょう。だから怖いときは、指人差<sup>さし</sup>指<sup>さし</sup>と言ふよ。これ（聞いた）話よ。

「えーじゅーさ、一<sup>え</sup>一<sup>たつ</sup>ち」んでいや、「一つ

は強く、「一つは断ち」と言つてね」、そしてこんなにして走つたら、絶対この、幽靈、まじむんというのは敵わんから、こんなにして。人差指<sup>さし</sup>と言ふけどね、こんなにして出してね、怖いときには。こんな

にして歩きなさいと言つて教えられて。いつたいくれ一習<sup>まな</sup>ーさらんていー「あんたたちはこれは教わらなかつたの」。

#### ② 柏の角の魔除け

宇良芳子（大正十三年生）中の町

昔、墓場から幽靈が出よつたって。それでね、角<sup>つの</sup>があるでしょ、折<sup>ほ</sup>は、角<sup>つの</sup>。この角でこう、あれ（幽靈）を追いはらう。角のあるものは、こんなの（幽靈）にいいという。まつすぐじやなくて角であれしたら、幽靈は逃げていつたって。

人間の指<sup>さし</sup>というのも、とっても不思議つて。昔、幽靈が出たら、こう指をさしたら、この指のあれで逃げるという話を聞いたからね。墓のそばから歩いたら、必ずこうして指出して歩きよつたのに、子どものときは。

### [4] 豚小屋、便所の魔除け

#### ① 便所の豚を鳴かせる魔除け

比嘉貞信（昭和二年生）中の町

悪い「かぜ」って言うんだけども。その意味は、幽靈に出会つたとか、あるいは見ぢやいけないもの見たとか。ようするにそういつた、靈を見たとかね。そういう「やなかじ」あたつて帰つてきたときは、

そのたたりがずっと、その悪いものがついてきてるときは、自分のうちに不吉なものを持ってきてやられる恐れがあるから、それはついてきてるかどうかが確かめるためには、自分のうち帰っていったら、自分のうちの豚小屋に行つて、豚が起きていれば、この悪い、途中で見た、途中で会つた、いわゆるまじむんとか幽霊とかいうものはそこで終わつて、うちまで来てない。ところが、うち帰つてきて、豚が寝て、起きなかつたら、確実にその幽霊、まじむんがうちまでついてきて取りついているから。その人に取りついているから。これはもう大変だから、必ずまた、ユタは一めー「ユタのおばあさん」呼んだり、いろいろ、坊主呼んだりしてこれを追つぱらわないといけないという迷信があつて。

だから、よそから自分のうちで帰つてくるときは、戦前は、自分のうちにいる前にまず必ず豚小屋に行つて豚を起こす。要するに家畜に合図かけて、家畜が元気よくはねたり跳んだりしておれば、自分がよそでおこつたいろいろな問題のなかでの、そういった悪いものに取りつかれてはいないといふあからだから、安心しておうちに入つていい。

② 便所の豚を鳴かせる魔除け

知名タケ（明治四十一年生） 起来  
昔はよ、告別式に行つてからさ、今は塩撒くさーねー、今はさ。この塩もない、なにもないさーねー、昔は。だから、すぐあの、豚養つておるさ。そこに行きよつた、必ずそこ行きよつた、豚のところに。これは豚はさ、魔除けであるはず。まじの必ずし豚ぬかんな前に行

てから、ほんで豚がうおうおうして（鳴いて）、いわゆるあの、餌をねだつたりすると、安心して足洗つておうち入る。これは昔の農家のしきたりでありました。絶対にね。これは記録に残しておいたほうがいいな。

で、本来は夜遅くの話だけど、そういうことから、毎日中でもいつでも、烟の行ち戻いは別として、用事とかなんとか、逗留したあとは、必ず豚小屋に、まああの、夕方ね、夕方以降の場合には必ず、豚小屋にいつて、豚を起こしてね、豚が餌をねだる、起きておればなんでもない。安心して、いわゆるそいつた、とりつかれてない。ところが、豚が起きない、病氣して、豚が病氣であるか、わるものに取りつかれている、悪霊にとりつかれているという証明だから、悪霊を追い払う、いわゆるお祓い、坊さんを呼ぶか、なにか読んでお祓いをさせるという。厄払い。祈祷です、祈祷しないといけない、祈祷だ。



ふーる（豚小屋兼便所）

きよつた。

### ③ 魔物の気配を感じたら

辻士名キヨ（大正七年生）明道

見じやーなかい「魔物を見たら」、  
「便所一けー廻ていから、どうーしぬみーぬ石けー  
踏みていから家内んかい入りよー」んでいち、うれー  
習一ちゃんたん「便所をひと廻りして、しゃがむと  
ころの石を踏んづけてから家のに入れよ」といつ  
て。それを教えられた。

「魔物が」着いてきているかもわからんから、あれ  
踏んでからおうちにには入りなさい」つてから。おば  
あたちに言われたことある。

「まじえー低く」と言つたらね、「生者は高く、魔  
物は低く」と言つたら、あの、化け物はやつつけら  
れて去つていい。生者は格が高いわけだよ。その  
ようにすると、

「なにも、変なものがたくさんいると言つてもね、  
そう言つたら魔物は退くんなど」と、その話はお年  
寄りのかたがたがなさつていた。ご祖先のかたがたが  
「おまえたちがもし帰り道を行こうとしたら、もし  
かしてこれは化け物だかなんだか（いるようだと）  
言つたらね、そうして「魔物は低く、生者は高く」  
と言つたら、そやつて言葉をかけてしまえばね、  
その化け物はいなくなるから、こうやつて歩いてい  
くんだよ」とお年寄りの話はそうだったわけ。ほら、

※1 まじえー普通の人間「し  
じや」に対して、魔物、悪魔、ある  
人は生者に対する「若いわゆるま  
じむん」のこと。

※2 まじえー「しじや」は普通  
の人、あるいは亡者に対する生者。  
ここでは魔物に対しての人間を指す  
か。

※3 どうーぬしかし、みーぬみー  
とうんでー未詳 説出せず。

### [5] 魔除けのまじないことば

#### ① 魔物除けのまじない

金城カナ（明治三十八年生）登川

#### 方言原話

『まじえー低く』んでい言つたらや、「しじえー  
高いく、まじえー低いく』んでい言一ねー、どうー  
ぬしかし、みーぬみーどうんてー、まじむのーちひ  
らきていふあやーに。じじゃーたかはらばーてー。  
うぬふーじーふくどう、  
「ぬーん、変なむんちゃつさんでい言ーねーや、あ

## 凡例

① 話型タイトル

話者名(生年) 地域(テープ番号)

- ⑨ きじむなーにおさえつけられる  
川上亀(明二九) 美里《065A10》..... 11
- ⑩ きじむなーにおさえつけられる  
内間シナ(昭四四) 城前《205A09》..... 11
- ⑪ きじむなーと魚の目玉  
島袋次郎(昭三四) 知花《016A15》..... 12

## 一 化け物、悪靈

## [1] きじむなー

- ① きじむなーはつら  
伊礼秀(大一〇) 越米《174A02》..... 7
- ② きじむなーはつら  
金良君江(大七) 宮原田《160A08》..... 8
- ③ きじむなーはつら  
玉城ひづ(明三八) 公田《159A04》..... 8
- ④ きじむなーはつら  
知名タケ(明四一) 越来《177A03》..... 9
- ⑤ きじむなーにおさえつけられる  
金城安榮(大一) 知花《016A22》..... 9
- ⑥ きじむなーにおさえつけられる  
川上亀(明一六) 美里《036A14》..... 9
- ⑦ きじむなーにおさえつけられる  
名瀬ヤエ子(大八) 吉原《093A05》..... 10
- ⑧ きじむなーにおさえつけられる  
屋良朝良(大一) 城前《191A03》..... 10
- ⑨ きじむなーにおさえつけられる  
佐久本トヨ(昭三一九) 沢瀬《081B01-02》.. 14
- ⑩ あひるのまじむん  
久場政三(明四一) 園田《026B10》..... 15
- ⑪ 読谷の化け猫  
平田ウト(明三一) 松本・  
島里ナナ(明四三) 松本《040B12-01》.... 17

## [2] 動物の化け物

- ① 豚のまじむん  
仲宗根啓雄(昭四三) 登三《019B11》..... 14
- ② 豚のまじむん  
高江秀路(昭三五) 松本《040A08》..... 14
- ③ 一日橋の豚まじむん  
佐久本トヨ(昭三一九) 沢瀬《081B01-02》.. 14
- ④ あひるのまじむん  
平田ウト(明三一) 松本・

瑞慶賀好子(大一〇) 城前《192A18》... 10

### [3] 道具の化け物

① 化けるしゃもじ 仲宗根ツル (大六) 越来 (163A09) ..... 17

### [4] 悪霊のわざわい

ナナゴ「ハイーンシホ」(1901) ..... 逆立ち魔羅

ナナゴ「ハイーンシホ」(1901) ..... 逆立ち魔羅

田場大工とシナ二(ハヨ)一テ 金城真良 (明四〇) 古謝 (113A14) ..... 18

田場大工とシナ二(ハヨ)一テ 金城真良 (明四〇) 古謝 (113A14) ..... 18

まじむん牛 金城真良 (明四〇) 古謝 (113A17-01) ..... 20

まじむん牛 金城真良 (明四〇) 古謝 (113A17-01) ..... 20

ひーなーまじむん 島袋次郎 (明三四) 知花 (016A18) ..... 21

ひーなーまじむん 島袋次郎 (明三四) 知花 (016A18) ..... 21

襲いかかる白雲 安次鶴ツル (大六) 齋賀 (199A06) ..... 22

襲いかかる白雲 安次鶴ツル (大六) 齋賀 (199A06) ..... 22

### 一一 崇り

喜屋武まーぶの祟り

古堅宗信 (大七) 比原根 (088A14) ..... 23

名幸御嶽の松の祟り 古堅宗信 (大五) 審査 (160A03) ..... 25

宮城島泡味の餓鬼 上根ウサ (明三一) 宮里 (049A08) ..... 27

真玉橋由来の芝居の祟り 上根ウサ (明三一) 宮里 (049A08) ..... 27

佐渡山夏枝 (大七) 室川 (169A21) ..... 28

### [1] 幽霊の物語

#### 一二 幽霊、靈魂

辺士名ナグ (明三七) 池原 (008B01) ..... 30

辺士名ナグ (明三七) 池原 (008B01) ..... 30

逆立ち魔羅 国吉キヨ (大六) 中野 (229A01) ..... 32

逆立ち魔羅 国吉キヨ (大六) 中野 (229A01) ..... 32

縁から足を下げないわけ 上根ウサ (明三一) 高里 (058A16) ..... 34

縁から足を下げないわけ 上根ウサ (明三一) 高里 (058A16) ..... 34

友人の幽霊があの世で飲み会 島袋次郎 (明三四) 知花 (047A05) ..... 36

友人の幽霊があの世で飲み会 島袋次郎 (明三四) 知花 (047A05) ..... 36

右翼の三叉路に出る幽霊 山内三郎 (明四一) 知花 (023A07) ..... 37

#### [2] 幽霊を見た話

後ろ向きの女 島袋次郎 (明三四) 知花 (047A04) ..... 39

友軍の幽霊 金城賀喜 (昭五) 知花 (016A20) ..... 40

着物の模様だけ 大工稻朝真 (大一三) 吉原 (093A08) ..... 40

死んだ娘の靈 井上嘉宗次 (明三一) 住吉 (194A04) ..... 40

身こもった女の靈 古堅宗信 (大五) 審査 (160A07) ..... 41

竹やぶに消えた首 山城照代 (大四) 室川 (172A09) ..... 43

自殺した同僚の靈 稲嶋盛英 (明三一) 山里 (258A12) ..... 43

救えない靈と教える靈 平田ウム (明三一) 松本 (040B20) ..... 44

## [3] 音でおわれる幽

① 赤道の法螺の音	川上亀 (明一九) 美里 (036A05) ..... 45
② 赤道の法螺の音	平亀 (明一九) 美里 (036A19) ..... 45
③ 赤道の法螺の音	金城五郎 (明三九) 松本 (038A20) ..... 46
④ 誰名坂の遺念火	国吉キヨ (大六) 中町 (217A07) ..... 47
② 誰名坂の遺念火	高江源昌保 (大二) セハヌー (133A04) ..... 48
③ 誰名坂の遺念火	知念真章 (明四一) 胡屋 (116A05) ..... 49
④ 久高祝女の遺念火	島袋真栄 (明四一) 知花 (041A04) ..... 49
⑤ 伊江島から伊平屋へ向かう遺念火	上間清英 (大六) 胡屋 (115A10) ..... 49
⑥ 伊江島の遺念火	瑞慶山良明 (明四一) 室川 (182A01) ..... 50
⑦ 仲順坂の遺念火	比嘉永昌 (大七) 山内 (155A05) ..... 50
⑧ 熱田の遺念火	儀保ヨシ子 (大三) 比原報 (088A12) ..... 51
⑨ 真諦の遺念火	上原ツル (大七) 岩原 (092A08) ..... 51
⑩ 遺念火	屋宣盛助 (大五) 畠良 (188A02) ..... 51
⑪ 遺念火	玉城シズ (明三九) 室川 (183A04) ..... 52
⑫ 遺念火	鶴見忠賢 (明三九) 久保田 (159A05) ..... 52

## [4] 遺念火

① 誰名坂の遺念火	國吉キヨ (大六) 中町 (217A07) ..... 47
② 誰名坂の遺念火	高江源昌保 (大二) セハヌー (133A04) ..... 48
③ 誰名坂の遺念火	知念真章 (明四一) 胡屋 (116A05) ..... 49
④ 久高祝女の遺念火	島袋真栄 (明四一) 知花 (041A04) ..... 49
⑤ 伊江島から伊平屋へ向かう遺念火	上間清英 (大六) 胡屋 (115A10) ..... 49
⑥ 伊江島の遺念火	瑞慶山良明 (明四一) 室川 (182A01) ..... 50
⑦ 仲順坂の遺念火	比嘉永昌 (大七) 山内 (155A05) ..... 50
⑧ 熱田の遺念火	儀保ヨシ子 (大三) 比原報 (088A12) ..... 51
⑨ 真諦の遺念火	上原ツル (大七) 岩原 (092A08) ..... 51
⑩ 遺念火	屋宣盛助 (大五) 畠良 (188A02) ..... 51
⑪ 遺念火	玉城シズ (明三九) 室川 (183A04) ..... 52
⑫ 遺念火	鶴見忠賢 (明三九) 久保田 (159A05) ..... 52

## 五 厄除け、魔除け

### [1] くしゃみしたときの厄除け

① くしゃみの厄	平田カタヌ (明三三) 登川 (014B06) ..... 61
② くしゃみしたときの厄除け	金城カナ (明三八) 登川 (014B05) ..... 62
③ くしゃみしたときの厄除け	柴野ヒトヨ (大六) 知花 (030B15) ..... 63
④ くしゃみしたときの厄除け	喜納兼増 (大一) 登川 (020A16) ..... 63
⑤ くしゃみしたときの厄除け	座間味マカト (明四一) 住吉 (203A04) ..... 64

## 四 予兆

① 上江洲のたまがい

上江洲マカト (明三八) 比原報 (088A13) ... 52

座間味マカト (明四一) 住吉 (203A04) ..... 64

⑥ くしゃみしたときの魔除け

瑞慶山千代（大六） 照屋（148A16）

64

⑦ くしゃみしたときの魔除け

島袋ムス（大一） 松本（035B19）

64

### [3] ひよせん指の魔除け

① ひよせん指の魔除け

新屋ヨシ子（大八） 越来（174A04）

70 70

② 枝の角の魔除け

宇喜多子（大二） 中野（225A06）

70 70

### [2] サン結び

① 魔除けのサン結び  
② 魔除けのサン結び  
③ 魔除けのサン結び  
④ 魔除けのサン結び  
⑤ 魔除けのサン結び  
⑥ 魔除けのサン結び  
⑦ 魔除けのサン結び  
⑧ 魔除けのサン結び  
⑨ 魔除けのサン結び  
⑩ 魔除けのサン結び  
⑪ 魔除けのサン結び  
⑫ 魔除けのサン結び  
⑬ 魔除けのサン結び  
⑭ 魔除けのサン結び

吉田（鳥巻）タケ（大七）知花（029A16）... 64

柴野比トヨ（大六）知花（030A05）... 65

城間カマ（明三三）知花（032A13）... 66

金城ナベ（明三六）松本（038A28）... 66

照屋ツル（明四一）照屋（153A03）... 66

平龟（明二八）美里（036A15）... 67

上原ウシ（明四一）佐吉（193A16）... 67

内間シゼ（明四四）城前（240A17）... 67

仲宗根初子（大七）越來（174A14）... 68

高江洲鶴（明三五）松本（040A14）... 68

喜納兼後（大七）東（095A09）... 68

喜納クニ（大六）東（095A08）... 69

玉城シズ（明三八）久保田（159A10）... 69

金城ナベ（明三六）松本（038A29）... 69

### [4] 豚小屋、便所の魔除け

① 便所の豚を鳴かせる魔除け  
② 便所の豚を鳴かせる魔除け

比嘉貞信（昭一）中町（228B10）... 70

知名タケ（明四一）越來（177A06）... 71

辻土名キヨ（大七）明道（101B07）... 72

### [5] 魔除けのまじない

① 魔物除けのおじなー

金城カナ（明三八）登川（014B13）... 72

## 調査日誌と調査協力者

### 主要な民話調査の実施概要

1 沖縄国際大学□承文芸学術調査団による

沖縄市字池原・登川の調査

調査年月日 一九八〇(昭和五五)年五月十八日

調査地域 池原、登川

調査団 沖縄国際大学□承文芸学術調査団

調査団編成

団長 遠藤庄治(沖縄国際大学文学部教授)

調査員 大城直樹、花城洋子、小橋川生枝、喜納弘子、岡田浩、

新城悦子、島袋美奈子、大熊享、西銘千恵美、大本敬子、

西江美智、池原弘子、玉城弘美、仲宗根フキエ、仲松庸尚、

安里和子、渡慶次歟、仲宗根悦子、与那原早苗、佐渡山

美智子、椿晴一郎、湧川紀子、比嘉和男、崎原有美恵、

辻士名美智代、宮村朝夫、仲原敦子、山岸信浩、川上(以上、

□承文芸研究会)金城あつ子、上江洲リカ、緑間直美、

安田啓子、幸嘉愛(以上、美里中学校)

### 2 沖縄市民話調査

調査年月日 一九八五(昭和六〇)年~一九八七(昭和六二)年

調査地域 池原、登川、知花、松本、美里、園田

調査団 沖縄市民話集編集事務局

調査員 宮城利旭、宮城昭美、比嘉寛勝、上間和夫、辺士名初美、

金城茂雄、宮里綾子

3 沖縄市旧美里地区民話調査 第一次調査

調査期間 一九九〇(平成二)年三月十一日~十四日

調査地域 明道、美里、吉原、東宮里、古瀬、東桃原、大里、泡瀬、高原、

比屋根、与儀

調査団 沖縄市□承文芸調査団

調査団編成

団長 遠藤庄治(沖縄国際大学文学部教授)

調査員 平誠美恵子(遠藤研究室)

遠藤ゼミナール受講生、日本文学作品研究受講者有志、

沖縄国際大学日本語表現法演習受講者、沖縄民話の会

4 沖縄市旧美里地区民話調査 第二次調査・補足調査

調査期間 一九九〇(平成二)年七月六日

調査地域 宮里、古瀬、東桃原、泡瀬、高原、比屋根、与儀

調査団 沖縄市□承文芸調査団

調査員 宮城昭美、宮里信男(沖縄市立郷土博物館)

遠藤研究室、遠藤ゼミナール受講生

5 沖縄市旧コザ地区民話調査 第一次調査

調査年月日 一九九〇(平成二)年八月十九日~二十三日

### 調査地域

越來、城前、嘉間良、住吉、室川、安慶田、照屋、セントー、  
胡屋、中の町、匯田、久保田、諸見里、山内、南桃原、  
山里

### 調査団編成

沖縄市口承文芸調査団

### 調査団編成

遠藤庄治（沖縄国際大学文学部教授）

### 幹事

宮城昭美（沖縄市立郷土博物館）

### 幹事

上門博之、宣保勝、山城綾子（沖縄国際大学）

### 調査員

遠藤研究室、沖縄民話の会、綠櫻苑職員、遠藤ゼミナ-

ル受講生、日本文学作品研究受講者有志、沖縄国際大学

日本語表現法演習受講者

### 6 沖縄市旧コザ地区民話調査 第二次調査・補足調査

調査年月日 一九九〇（平成二）年十二月十四日～十六日、二十一日

### 調査地域

越來、城前、嘉間良、住吉、室川、安慶田、胡屋、中の町、

園田、久保田、南桃原、山里

### 調査団編成

沖縄市口承文芸調査団

### 調査団編成

遠藤庄治（沖縄国際大学文学部教授）

### 幹事

宮城昭美（沖縄市立郷土博物館）

石川小百合、大川清子、香村夏子、照屋京子（沖縄国際

大学）

### 調査員

武嶋昭子、仲尾由美（遠藤研究室）

遠藤研究室（）

上門博之、宣保勝、加島三史、崎山用彰、諸喜田綾子、

山城綾子、與座範秋、宮里英樹、平良真也、森草吏、粟国実、

新垣孝幸、石川小百合、稻嶺悦子、大川清子、香村夏子、  
照屋京子、通事美香、仲宗根広恵、与那嶺昭郎、謝敷勝

美（以上、遠藤ゼミナール受講生）

沖縄国際大学国文科学生有志

### 調査団編成

沖縄市口承文芸調査団

### 調査員

遠藤庄治（沖縄国際大学文学部教授）

### 幹事

宮城昭美（沖縄市立郷土博物館）

石川小百合、大川清子、香村夏子、照屋京子（沖縄国際

大学）

武嶋昭子、仲尾由美（遠藤研究室）

与那嶺昭郎、粟国実、通事美香、加島三史、新垣孝幸、

石川小百合、大川清子、謝敷勝美、照屋京子、新垣良子、

新垣純子、池原健、稻嶺留美子、犬養憲子、小橋川一、

桃原栄美子、友利幸子、仲地香織（以上、遠藤ゼミナール受講生）

以上の調査が民話資料の聴取を目的として実施された主な調査であ

る。これらの調査で得られた資料及び録音テープは沖縄市立郷土博物館が所蔵管理し、コンピュータ上でデータベースを構築して資料の整理・報告書発刊を進めている。

なお、民話資料の聴取を主目的とする調査の他に、「沖縄市わらべ歌調査」（一九八八年）「一九九二年実施」や、他の業務として実施された各種調査の際に聴取された民話や世間話等もあり、その資料及び録音テープも民話資料として沖縄市立郷土博物館が所蔵管理し、データベースにまとめている。

## 本報告書に記載されている民話の話者と調査者

### 《知花》

一九八五年九月九日

島袋次郎（明三四）辺土名初美

金城安栄（大二）辺土名初美

金城賢喜（昭五）辺土名初美

一九八五年一〇月一三日

山内三郎（明四一）照屋寛信・山本啓子

一九八六年七月九日

吉田（島袋）タケ（大七）宮里信勇・宮城昭美

一九八六年七月一〇日

柴野比トヨ（大六）宮里信勇・宮城昭美

一九八六年七月一一日

柴野比トヨ（大六）宮里信勇・宮城昭美

一九八六年七月一二日

城間カマ（明三三）宮城昭美

一九八七年七月一四日

島袋貞栄（明四一）宮城昭美

一九八七年九月一〇日

島袋次郎（明三四）宮城昭美

一九八五年八月二六日

平田カマド（明三三）仲松庸尚

金城力ナ（明三八）仲松庸尚

《松本》

一九八七年五月二八日

島袋トメ [大二] 宮城昭美

一九八七年六月二九日

金城五郎 [明三五] 宮里純子・宮城昭美

金城ナベ [明三六] 宮里純子・宮城昭美

一九八七年七月七日

高江洲節 [明三五] 宮里純子・宮城昭美

一九八七年七月八日

平田ウツ [明三二] 宮里純子・宮城昭美

島里ナベ [明四二] 宮里純子・宮城昭美

《美里》

《明道》

一九九〇年三月一四日

名嘉眞タケ [大四] 上門博之

辺土名ギヨ [大七] 上間博之

島里ナベ [明三二] 宮里純子・宮城昭美

一九八七年六月三日

平龜 [明一八] 桑江良秀・宮城昭美・宮里純子

川上竜 [明一九] 桑江良秀・宮城昭美・宮里純子

一九九〇年三月一日

平龜 [明一八] 崎山用彰

川上竜 [明一九] 崎山用彰

富山茂

一九九〇年三月一四日

仲松弥仁 [明三七] 上門千賀子・犬養憲子

諸見里マツ [大二] 平良真也

《吉原》

一九九〇年三月一三日

名護ヤエ子 [大八] 平誠美恵子

大工廻朝真 [大一三] 平誠美恵子

《越前》

一九九〇年八月二一日

知名タケ [明四二] 石川小百合・大田刊

仲宗根ツル [大六] 遠藤庄治・新屋ひづき

仲宗根初子 [大七]

喜瀬智美・知念美佳子 新垣登季子・新垣孝幸・謝敷勝美・

新屋ヨシ子 [大八]

喜瀬智美・知念美佳子 新垣登季子・新垣孝幸・謝敷勝美・

伊礼秀 [大一〇]

喜瀬智美・知念美佳子 新垣登季子・新垣孝幸・謝敷勝美・

《城前》

一九九〇年八月三日

内間シモ [明四四] 宜保勝・米盛基子

星良朝良

(大二)

加島三史・平田明子

瑞慶喜好子

(大一〇)

香村夏子・森章吏

一九九〇年二月一六日

内間シモ

(明四四)

石川小百合・宣保勝・栗国実

内間シモ

(明四四)

石川小百合・宣保勝・栗国実

安慶田

一九九〇年八月一〇日

古堅宗信

(大五)

金良君江

(大七)

島元要・崎山須麻子

星良朝良

(大二)

加島三史・平田明子

瑞慶喜好子

(大一〇)

香村夏子・森章吏

一九九〇年二月一六日

内間シモ

(明四四)

石川小百合・宣保勝・栗国実

内間シモ

(明四四)

石川小百合・宣保勝・栗国実

### 《喜間良》

一九九〇年八月二三日

星宜盛助

(大元)

栗国実・新城真恵

安次嶺ツル

(大六)

新垣季幸・有銘和江

### 《住吉》

一九九〇年八月二三日

座間味マカト

(明四二)

石川小百合・仲里香・謝敷勝美

上原ウシ

(明四二)

上門千賀子・瑞慶喜優子

浜比嘉宗次

(明四二)

宮里英樹・与那嶺昭郎

### 《室川》

一九九〇年八月二二日

亀島忠賢

(明三五)

大川清子・宮城正美

瑞慶山良明

(明四二)

平良真也・新田尚子

山城照代

(大四)

与那嶺昭郎・高良陽子

佐渡山夏枝

(大七)

上門千賀子・瑞慶喜優子

### 《宮里》

一九八九年一二月五日

上根ウサ

(明三一)

比嘉ゆり子・宮城昭美

一九九〇年三月一一日

上根ウサ

(明三一)

豊岡早苗・宮城昭美

### 《照麗》

一九九〇年八月一〇日

照屋ツル

(明四二)

新垣季幸子・翁長利江・知念美佳子・  
宮城昭美

安次富士堅

(明四四)

通事美香・萩原剛

瑞慶山千代

(大六)

上門千賀子・玉城直子

『古賀』

一九九〇年七月六日

金城良実 [明四〇] 與座範秋・仲宗根広恵・宮里英樹・

稻嶺悦子

上間清美 [大六]

知念真章

遠藤庄治・上田和子・比嘉玲子

『東桃原』

一九九〇年三月一三日

上原ツル [大七]

上門博之

『泡瀬』

一九九〇年三月一二日

佐久本トヨ [明三九] 飯田泰彦・犬養恵子

『比屋根』

一九九〇年三月一三日

上江洲マカト [明三八] 上門千賀子

儀保ヨシ子 [大三]

上門千賀子

城間文子 [大七]

上門千賀子

『センタ』

一九九〇年八月一九日

高江洲昌保 [大二]

與座範秋・知念美千代

『胡屋』

一九九〇年八月一九日

諸喜田綾子・嘉陽田尚行

上間清英

遠藤庄治・上田和子・比嘉玲子

『中の町』

一九九〇年八月三日

国吉キヨ [大元] 通事美香・宮里英樹

宇良芳子 [大二三] 平良真也・宮城昭美

比嘉貞信 [昭一] 宜保勝・宮平

一九九〇年一二月一四日

国吉キヨ [大元] 照屋京子・與座範秋・山城綾子

比嘉貞信 [昭一] 宮里英樹・香村夏子・与那嶺昭郎

『園田』

一九八五年一月一九日

久場政三 [明四三] 金城茂雄・辻士名初美・宮城利旭・

宮城昭美

『九月一九日』

真喜志康一 [大凡] 島元要・運天雪江

宮城次郎 [大三]

上門千賀子・玉城直子

（久保田）

一九九〇年八月一〇日

玉城シズ〔明三八〕

仲宗根広恵・前田英一

（山内）

一九九〇年八月二〇日

比嘉永昌〔大七〕

與座範秋・宮城加代子・知念美千代

（山里）

一九九〇年八月二一日

平田力ネ〔六六〕

加島三史・平田明子

一九九一年八月一七日

稲嶺盛英〔明四三〕

新垣良子・与那瀬昭郎

## 沖縄市民話調査報告書発刊業務の総括

沖縄市立郷土博物館 文化財係嘱託職員 八田夕香

本報告書は『池原の伝承をたずねて』にほじまつた「沖縄市の伝承をたずねて」シリーズの第九巻めであり、かつシリーズ最終巻となる。沖縄市では一九八〇年の池原地区での民話聞き取り調査にはじまり、一九〇七年までに行なわれた複数回の調査によつて沖縄市域在住の高齢者四九八名より四四三四話の語りを調査記録している。これらの民話を、語りの内容に従つて大きく以下の九つに分類し、順次パソコンを用いてデータベース化を進めてきた。

①動物昔話……動物を主人公、あるいは題材とした語り。二七五話。

②本格昔話……特定の時期や具体的な場所を設定せず、発展、展開、結果という物語の展開を持つ語り。六八六話。

③笑い話……聞き手の笑いを呼ぶことを主眼とする語り。二二〇話

④地域伝承……特定の時期、場所を舞台にし、実在の事物について説明する言い伝えのうち、沖縄市域の事物についてのもの。一六一五話。

⑤広域伝説……特定の時期、場所を舞台にし、実在の事物を説明する言い伝えのうち、沖縄市域外の事物についてのもの。一一八七話。

⑥世間話……世間の事物の見聞について語られたもの。一九三話。

⑦体験談……話者が体験した出来事が語られたもの。五〇話。

⑧歌……話者が記憶する歌謡やわらべ歌、形式詩（琉歌など）の詠唱。六五話

⑨民俗……話者が実施してきた生活上の習慣や儀礼についての説明。一四三話。

うち、①②③はいわゆる「昔話」、④⑤はいわゆる「伝説」に属する

ものとらえ、これらを沖縄市民話調査の中核をなす資料群とらえている。この①から⑤までに分類される語りを中心に民話資料を市民に公開し、さらなる研究や活用の基礎資料となることをめざし、語りをテキスト化（翻字）し、日本語共通語訳や註を付し、調査報告書として刊行してきた（ただし、同話者による内容の重複した語りやあまりに断片的なものは報告書編集の段階で掲載から除外）。その端緒は二〇〇〇年刊行の「むかしばなし（動物昔話）」であり、二〇〇五年に発刊した『池原の伝承をたずねて』からは「沖縄市の伝承をたずねて」シリーズとして順次調査報告書を刊行してきた。本報告書「沖縄市の伝承をたずねて 怪異譚編」の刊行によって、①から⑤までに属する語り全体が書籍化されたこととなり、沖縄市民話調査の報告書刊行業務は完結となる。

二〇〇〇年発刊「むかしばなし（動物昔話）」（掲載一〇七話）

二〇〇五年発刊「池原の伝承をたずねて」（掲載二一話）

二〇〇七年発刊「沖縄市の伝承をたずねて 中北部編」（掲載六二話）

二〇〇八年発刊「沖縄市の伝承をたずねて 東西部編」（掲載六五話）

二〇一〇年発刊「沖縄市の伝承をたずねて 本格昔話編」（掲載三四五話）

二〇一一年発刊「沖縄市の伝承をたずねて 笑い話編」（掲載一九二話）

二〇一五年発刊「沖縄市の伝承をたずねて 広域伝説編」（二一

## 六〇話掲載

二〇一六年発刊「沖縄市の伝承をたずねて 広域伝説編II」(一)

## 七〇話掲載

二〇一八年発刊「沖縄市の伝承をたずねて 広域伝説編III」(三)

## 三五話掲載

二〇一九年発刊予定「沖縄市の伝承をたずねて 怪異譚編」(九)

## 九話掲載

これまで当館刊行の民話報告書は、その作業の多くを文化財係嘱託職員であった宮城昭美氏が担当した。宮城氏は、一九八五年に民話調査の事務局スタッフ及び調査員として業務に携わって以降、二〇一五年三月まで、追加調査、データ入力、翻字翻訳、報告書編集刊行など民話調査に関わるあらゆる実務を担い続けた。シリーズの完結に際し、宮城氏本人に筆を寄せてもらつた。

## 「沖縄市の伝承をたずねて」 シリーズの完結に寄せて

宮城昭美

沖縄市には優れた民話が伝承され、それが「伝承をたずねて」という民話集として発刊保存された。これまでの「伝承をたずねて」には、歴史の中で埋もれて消えてしまうかもしれない多くの話が掲載されている。戦争、世替わりと激動の時代をしたたかに生き抜いてきた人々は、長い空白の時間があったにもかかわらず、伝承を語るその記憶は確かにもので語りは風化していかなかった。調査で聞き取りされたものは今ではもう聞くことができない貴重な話ばかりで、文献では

得ることのできない情報を多く含んでいる。民話集は数多く発刊されているが、聴取されたそのすべての話が掲載されることは、物理的に紙面が限られていること、民話集の編集には作業量において調査した時間の何十倍もの時間を要するからである。それを踏まえつゝ、聴取された原録音資料の情報を可能な限り最大限に収容しようとしたのが「伝承をたずねて」である。その編集方針として、

① 話者の語りを尊重し、編者の手を大きく加えることなく、できる限り話者が語ったそのままを翻字し活字化することで、学術的資料として、また文化財の記録保存という点にも耐えうる一次資料たることを重視すること。そのような資料であれば、将来、いかようにも利用が可能だと考えたからである。

② 沖縄市の話者には他地域から移り住んだ人が多く、幼少期や青年期に過ごした様々な地域の話を提供してくれた。本書ではそれも沖縄市の民話の特徴だと考え、沖縄市以外の伝承も排除することなくすべて掲載することにした。とりもなおさずこれらの沖縄市以外についての語りが、沖縄市と他地域の結びつきを示しており、他地域とのこれからつながり、また今後の交流という役割のうえでも貴重だと判断したからである。

ちなみに、これらの「伝承をたずねて」の基礎資料は、ほとんどが昭和五五(一九八〇)年・昭和五六(一九八一年)・平成二(一九九〇)年・平成三(一九九二)年の調査で聴取されたものである。

調査した時間の何十倍もの時間を要したが、ほぼすべての話を世に送り出すことができたことは、他に類を見ない財産となつた。民話資

料というものは調査に始まり調査で終わるといつても過言ではなく、本が出来るまで繰り返し、多くの皆様の力を借りてきた。話者の皆さんには貴重な時間を何時間もさいていただき、調査後にも情報をお寄せいただいた。皆さまのご協力は不可欠なものだった。また、さまざま調整に対応して下さった老人会をはじめ、各自治会、郷友会、諸団体の皆様には発刊まで大変お世話になった。調査では故遠藤庄治教授には学生の指導にあたっていただき、卒業論文として関わってくれたゼミの学生、国文学科の学生、沖縄民話の会、調査に参加してくれた皆さんには厳しいスケジュールの中、たくさんの話を聴取していくだいた。これらの結果が、沖縄市民調査報告書の刊行というかたちで結実した。

残念なのは、話者の多くの方が完結をみることなく鬼籍に入られたことである。報告書は百年後も残る資料となつたが、それも話者の皆さんの一つ一つの語りの実声なしではなしえることはできなかつた。話者の方々の声を納めた本書が私たちの住む地域社会の解明のためのひとつの手がかりとなり、また、文化創造発展に活用されることを祈る。

現在、シマクトウバへの関心が高まり、「伝承をたずねて」の完成はシマクトウバを残すという意味も含め有意義な活用に寄与するものと思う。語りを音声で聞くことは可能で、その時、この「伝承をたずねて」が生きた資料として大きな役割を果たすであろう。古老の費かな語りの世界をぜひ体験して欲しい。

## まとめ

八田夕香

宮城氏の記述にあるように、沖縄市民調査報告書刊行は沖縄市に在住していた多数の話者の方々の語りを可能な限りそのまま記録保存し、公開することをめざした。話者たちが残した豊かな語りが後世の人々の言語文化、精神文化に資することを期してのものである。報告書の刊行事業はこれで終結となるが、単に活字となり書籍というかたちをとつただけで民話資料の真価が市民に十分に還元されるものもない。民話資料がより市民に知らされ、再び語りがなされていくことが、次の段階の目標となろう。刊行された報告書がその目標に向けて活用されることを期待したい。

ともあれ本事業は、調査した民話資料全体の活字書籍化というこの地点まで到達した。話者の方々はもちろんとして、地域の方々、そして調査とデータ整理にあたつた作業者、その他非常に多くの御協力と御助言なくしてはなしえなかつた。事業にかかわつた全ての方に深く感謝申し上げたい。

# 本報告書の編集協力者および作業担当者

挿絵作成

長浜益美、八田夕香

翻字

石川小百合・上門博之・大川清子・香村夏子・宜保勝・照屋京子・

八田夕香・宮城昭美・山内智子・山城綾子

資料整理

石川小百合・上門博之・大川清子・香村夏子・宜保勝・照屋京子・

比嘉ゆり子・辺士名初美・山城綾子・星良奈那子

原稿作成及び編集担当

八田夕香・宮城昭美

業務担当

繩田雅重

## 参考文献および参考資料

『沖縄文化資料集成6 球陽下巻 遺老説傳』嘉手納宗徳編訳、角川

書店発行、一九七八年

『沖縄植物野外活用図鑑 第4巻 海辺の植物とシダ植物』池原直樹

著、新星図書出版発行、一九七九年

『沖縄植物野外活用図鑑 第5巻 低地の植物』池原直樹著、新星図

書出版発行、一九七九年

『沖縄・奄美的郵便・墓制』名嘉真宜勝・恵原義盛編著、明玄書房発行、

一九七九年

『沖縄語辞典』国立国語研究所編集、大蔵省印刷局発行、一九八〇年

『広辞苑第三版』新村出編、岩波書店発行、一九八三年

『沖縄大百科事典上・中・下』沖縄大百科事典刊行事務局編集、沖縄

タイムス社発行、一九八三年

『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』『角川日本地名大辞典』編纂委員

会 竹内理三編集、角川書店発行、一九八六年

『琉球列島における死靈祭祀の構造』酒井卯作者、第一書房発行、一

九八七年

『沖縄の御願・神グチ・民間信仰語をかがる』高橋恵子著、ひるぎ

社発行、一九八八年

『史料編集室紀要 第16号』沖縄県立図書館史料編集室編集、沖縄県

立図書館発行、一九九一年

『医学沖縄語辞典』福盛輝編著、ロマン書房発行、一九九一年

『角川日本姓氏歴史人物大辞典 47 沖縄県姓氏家系大辞典』沖縄県

姓氏家系大辞典 編纂委員会編著、角川書店発行、一九九二年

『久米島の地名と民俗』仲村昌尚著、久米島の地名と民俗』刊行委員

会発行、一九九二年

『琉球芸能辞典』那覇出版社編集部編、那覇出版社発行、一九九二年

『縮刷版 日本昔話事典』福田浩一・大島建彦・川端豊彦・福田晃・

三原幸久編集、弘文堂発行、一九九四年

『北中城の民話』遠藤庄治著、北中城村教育委員会発行、一九九三年

『沖縄言語研究センター研究報告書 5 那覇方言 那覇市方言記録保存調査報告書 III』沖縄言語研究センター編集、沖縄言語研究センター

発行、一九九四年

- 「沖縄の廢除けとまじない」山里純一著、第一書房発行、一九九七年
- 『貝志川市史 第三卷 民話編上 伝説』貝志川市史編さん委員会編集、貝志川市教育委員会発行、二〇〇〇年
- 『沖縄市文化財調査報告書第23集 むかしばなし（動物昔話）』沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、二〇〇〇年
- 『琉球列島民俗語彙』酒井卯作編著、第一書房発行、二〇〇一年
- 『貝志川市史 第四巻 移民・出稼ぎ 論考編』貝志川市史編さん委員会編集、貝志川市教育委員会発行、二〇〇一年
- 『第20回名護博物館企画展 沖縄の度量衡／はかりを通して人々の暮らし』名護博物館編、名護博物館発行、二〇〇三年
- 『沖縄市文化財調査報告書第31集 池原の伝承をたずねて』沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、二〇〇五年
- 『貝志川市史 第六巻 教育編』うるま市・貝志川市史編さん委員会編集、うるま市教育委員会発行、二〇〇六年
- 『北谷町文化財調査報告書第24集 北谷町の地名—戦前の北谷の姿—』北谷町教育委員会編集、北谷町教育委員会発行、二〇〇六年
- 『沖縄語辞典—那覇方言を中心にして』内間直仁・野原三義編著、研究社発行、二〇〇六年
- 『沖縄市文化財調査報告書第32集 沖縄市の伝承をたずねて 中北部編』沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、二〇〇七年
- 『沖縄民俗辞典』渡辺欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也編著、吉川弘文館発行、二〇〇八年
- 『沖縄市文化財調査報告書第35集 沖縄市の伝承をたずねて 東西部編』沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、二〇〇八年

『沖縄市文化財調査報告書第38集 沖縄市の伝承をたずねて 本格昔話編』沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、二〇一〇年

『沖縄市文化財調査報告書第40集 沖縄市の伝承をたずねて 笑い話編』沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、二〇一一年

『沖縄市文化財調査報告書第41集 沖縄市の伝承をたずねて 広域伝説編』沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、二〇一六年

『沖縄市文化財調査報告書第42集 沖縄市の伝承をたずねて 広域伝説編II』沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、二〇一七年

『沖縄市文化財調査報告書第43集 沖縄市の伝承をたずねて 広域伝説編III』沖縄市立郷土博物館編集、沖縄市教育委員会発行、二〇一八年

「那覇市内史跡・旧跡案内」（那覇市歴史博物館ホームページより、「ナユヒーピン」の項）那覇市歴史博物館、二〇一八年  
(<http://www.rekishi-archive.city.naha.okinawa.jp/archives/site/>)

## 沖縄市の伝承をたずねて 怪異譚編

沖縄市文化財調査報告書第 44 集

平成 31 年 3 月 29 日 発行

発 行 沖縄市教育委員会

編 集 沖縄市立郷土博物館

〒904-0031 沖縄県沖縄市上地 2-19-6

TEL (098) 932-6882

印 刷 (有) 中部電算フォーム

沖縄県沖縄市諸見里 1-39-15

TEL (098) 933-3687

$\varphi^{\theta}(x) = \varphi(x)$  if  $x \in \mathcal{X}_\theta$